
ネガの絆ー歌咲くクラス仲間ー

高木徳一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガの絆―歌咲くクラス仲間―

【Nコード】

N64360

【作者名】

高木徳一

【あらすじ】

丹木徳夫は小学校のクラス会を開いた。恩師岡島千春は前日倒れ、足も苦患で皆に萎びた顔を見せたくない、参加せず。会は和やかに終え、二次会のカラオケで盛り上がる。徳夫は東大医学部を出て、産婦人科の助教授の後、開業。不動産会社社長の赤木善太と別れ、病気で来られなかった狩子猛の屋敷跡にある彼の駐車場で、猛の影に誘われた。靴工場の社長の孫、猛と三軒長屋に住む炭屋の善太とは、四年一組の同級生となり、遊ぶ。相撲大会で猛と八百長を遣り、また週番で校内巡回中、全国標準テスト用紙を失敬した場面を猛に

目撃され、トラウマになる。両国高校から東大に入り、助手の時、朋子と結婚。猛は野球に打ち込み、スポーツ推薦で私立高校に合格。大学三年次、工場が倒産し、アパート住まいとなる。プロ野球にスカウトされ、一軍デビューの時、徳夫と弟の武憲を招待し、巨人と戦う。七年後、初詣に出掛ける際外階段から滑り落ち、頸椎損傷して球団はクビ。新興宗教にのめり込む。徳夫は助教授に昇格したが、近所の女院長から医院を継いでと懇請され、引き受けた。母の末期の膵臓癌に気付かず、自責の念に駆られた。猛が線香を上げたいとの電話に、弟の一件で妹達が嫌がっているからと拒絶し、絶交となる。その後、謝罪の電話が入り、年賀状の遣り取りが再開された。

一片のネガを同封して千春に送った。四月にクラス会を開く。母校に着き、マイクロバスから降りた千春は満開に咲く桜の記念樹の下、教え子らに囲まれ、拍手で迎えられた。ネガを焼いて驚き、感激し、現状を受け入れられたと。音楽室でピアノを弾く千春の背はピンと伸びた。翌日、朝刊を郵便受けから引き出すと手紙が落ちた。差出人は家出した弟。内容は謝罪文。当時を振り返り、自分も相手の立場を考えた思い遣りに欠けていたと自省する。済まなかったな、武憲。

小学クラス会

霜月十八日〈金〉の夕方は木枯らし一番が吹いた翌日で、その名残が百％存在する。

中肉中背の丹木徳夫^{たんきとくお}は食事処「羽衣」の暖簾をふさふさ黒々のナチュラルウェーブ髪に触れさせ、ガラス格子戸を右手に引いた。客がカウンターに一人居る。

「今晚は。大吉小学校クラス会の幹事の丹木です。本日はよろしく願います」中のあったかい空気を押し戻す様に、丹木は中音を飛ばした。

「あら、いらっしゃい。お待ち致しておりました。こちらこそよろしくお願い申し上げます」狸目にアイラインを施し、紺と紫を絞り込んだ様な着物を小豆色の帯で締め上げたママが片笑窪に黒子を包み、ふわっとした日本髪の頭を垂れた。

「お二人さんが上に見えられていますよ」そうですかと反応し、徳夫は急な木の階段を上った。二階にお邪魔するのは初めてである。

二度ばかり赤木善太に呼び出され、この店の一階のカラオケで怒鳴った事がある。上り詰めた顔の前が廊下で、直ぐの突き当たりがトイレ、右手が八畳二間続き、左手が六畳一間。徳夫は右手に二重瞼の柔和な顔を出して、幹事の安作好美^{やすはき}に挨拶した後、その前にいる薄紫地に白の小花をあしらった着物から細い首を出した小顔と目があった。「今日はよろしくお願い致します」「何、言ってるのよ。

この女は野村美和子さんよ」「てっきり、着物姿なので店の女かと思っただんだ。美っちゃんか。全然、判んなかった」「貴方はどちら様ですか・・・」「ほら、丹木の徳ちゃんよ。優等生で足が速かった」

「ええっ、あの丸顔でパンパンに太っていた徳ちゃん・・・坊主頭しか見ていないので、ふさふさの髪では思い出せないのは無理ないわね」「総白髪だけど、染めているんだ」「卒業して四十八年振りの再会ですもの、判らなくて当然よね」「確か、高校時代に駅前に

ある武辺勝君の中華店の二階でやったけど・・・」「都合で、その時は参加出来なかったの」「そうか。高校に入ってから髪を伸ばしたからな。今回私が司会をするから、安作さんに会計をお願いするよ。会費を徴収した人をチェックし、名簿類が入ったこの封筒を渡して欲しい」「ええ、いいわよ」丸眼鏡の好美が返事をして、封筒を受け取る。見覚えのある顔、何処のお爺さんが紛れ込んで来たのかと思う顔、肥えた人、ひなびた顔、脂ぎった顔が次々と階段からヌウツと現れた。お互い、自己紹介を始めている。

「皆さん。先ず、酔わない内に会費をお支払い頂き、封筒を受け取って下さい。席は自由ですので、グルッと壁際にお座り下さい」各人は思い思いの所に腰を落とすと、袋を開け、中の名簿と卒業写真の一・六倍の拡大コピーを食い入るように見詰め、顔をもたげ当人を探す。

続けて徳夫が喋る。

「それでは、皆さん。参加予定の方が全員揃いましたので、定刻より十五分遅れましたが、昭和三十二年、西暦では一九五七年の大吉小学校六年一組のクラス会並びに一年遅れの還暦の会を開催致します。私は今日の司会を担当します丹木徳夫です。小冊子三枚目にある写真の前から四列目の右半分男性陣の一番左側です。丸坊主の卵顔で胸がパンパンに張ってます。高校から髪を伸ばしましたので、高校時代の本クラス会に参加出来なかった方は今の顔との一致が中々合わないと思います。さて、開催の発端は、昨年の中学時代の同期会兼還暦お祝い会に、風邪で一週間熱が下がらず、歳なので無理せず、残念ながら欠席してしまった後に、幹事だった武辺君から電話で当会を開こうとの提案があったからです。それでは、息子から習い、やっとの事でパソコンを打ち作成しました冊子の式次第に沿って会を進めて参ります。最初に不動産会社社長の赤木善太君に開会の挨拶をお願い致します」「僭越では御座いますが、丹木君からのご指名で御座いますので、簡単に御挨拶申し上げます。この会は幹事の丹木君、武辺君、安作さん、貝野さんのお骨折りで開く事が

出来ました。心から御礼申し上げます。ここに恩師の岡島千春先生がいらっしゃらないのは誠に残念であります・・・」「あっ、御免なさい。先生の欠席を言うのを忘れました。後程付け加えます。どうぞ」

徳夫は来る人ごとに先生の出席の有無を聞かれ、答えていたから、済んだものと勝手に脳細胞が判断していたのだ。

「卒業以来、早や四十八年の歳月が流れ、人生の艱難辛苦を乗り越えて、お互いこうして元気に還暦を迎えられました事を素直に喜びたいと思います。今宵は童心に返って昔話や現況を楽しく話しましょう。前で煮えたぎっている鍋が美味しい内に食べてと騒いでいますので、私の挨拶を終えます」

拍手の響きが湯煙を遮る。

「引き続き、酒屋の主人の須木富一君に乾杯の音頭をお願いします」「酒を断った僕に、何故乾杯なのかは判りません。グラスの中はお茶けです。多分医者の方木君が、皆さんも僕同様禁酒するか、量を減らすようにと考えての意味深な指名なのでしょう。実は十年前に胃から大出血をして辛い入院生活を過ごしたのです。皆さんもお身体には十二分に注意して下さい・・・」

商店会やPTA会で赤木君らと浴びるほど飲んでいたせいで、窓際で胡座をかく、白と黒のブチの髭を顎と頬に蓄えた武辺が茶々を入れる。

「ま、後悔も込めていますけど。それでは、皆様始めご家族の皆様様の御健康と御多幸を祈念致しまして乾杯します。それでは、がんばーい」

そこかしこで、小気味よくグラスの合わせ音が暖気の中を行き交う。来る前に三十分の余裕があったので、徳夫は駅前大通りの須木酒店で油を売っていた。富一は父親がややボケてきて、親より先に逝くのはまずいと考え、大出血との合わせ技一本で禁酒を決意したと言う。偉いぞ、しっかりとお父さんを見送ったからだと、奥二重の富一を褒めてきた所である。

「折角の肉団子入り鍋料理が並んでいるので、グラスを傾けながらじっくりと味わって下さい。二十分位歓談にしましょう」

若い仲居を従えた女将が、両手を付き、口上を述べる。「こちらの赤木社長さんには、御贔屓に与かっております。本日はこの近くの大吉小学校のクラス会だそうで、また還暦のお祝いとの事、誠に御芽出度う御座います。この二人が給仕を致しますので、何なりとお申し付け下さい。当店の自慢は鰻料理ですので、どうぞご賞味下さい。それではごゆるりとお過ごし下さいませ」

深々とお辞儀をして、女将は引き下がった。

「白菜、人参、椎茸、里芋、白滝が程よく煮えて、牛の肉団子も入れましょう」「ぴちぴちギャルってとこだな。歳は幾つ位かな」「二十三です。お注ぎしますわ。どうぞ」と、茶髪の細面の仲居が徳夫の問いにすかさず答えた。「若い顔を見ると、十歳は若返り、食欲も出てくるな」「悪かったわね。お婆ちゃんて」「何言ってるんだい。前島豊乃さんはお母さんそっくりで、五歳は確実に若いよ。真っ赤なセーターに緑の上着に白いネックレスで若作りだ。そうだと、みんな」同意の手叩きが起こった。隣同士の差しつ差されつも盛り上がり、湯気の熱さも加わり、耳朵や頬をほんのりと赤らめてゆく。

「それでは皆さん、時間が参り、アルコールも五臓六腑に染み渡り、口も滑らかになった事でしようから、名簿順に消息を訪ねていきましよう。先ず、恩師の岡島千春先生ですが、一カ月前に電話で都合を伺った所、喜んで楽しみにしているとの事。足が弱っているのです。その時まで足を鍛えて行かれるようにしたいとも・・」「へー、未だ生きていたんだ」「変な事言わないでよ」「お幾つになるのかしら」皆は口々に思い思いの言葉を乗せた。

「来年、八十歳の傘寿だそうです。一週間前には赤木君がお迎えに参りますと伝えましたが、昨日になって夜中トイレから戻る途中転んで胸を強打され、気持ちが萎えて、足も苦患で顔も萎びたこんな姿を皆さんに見せたくないとの事です。クラス会終了後、幹事が会

の様子を報告に参りますと述べると、我が儘だけれど、誰にも会いたくないと言われました」「歳を重ねれば、誰だって頭が禿げたり、白髪になったり、顔皺が増えるのは当たり前えだろうよ。こうやって身回したって、歳相応や老け過ぎだっていらあな」「女心なのよ」「そうよ。若い時はお嬢さんで、知的なマスクをしていらしたから、きっとギャップに悩まれているのよ」「勝気で負けず嫌いな所があったから、余計そうなのかも・・・」「丹木の話から、運悪く前日に胸を打って、皆に会いたいと言う昂揚感がプツンと切れたんだ。そっと、先生の言いようにしてやろうよ」「青春の思い出を引きずり、何時までも教え子に対し、しゃきつとした先生でありたいんだろう」「自分らも八十位になれば、先生の気持ち判るかも知れんな」「何、馬鹿な事言ってるの。男性はせいぜい生きても七十歳前後よ。傘寿までは到底無理無理」「それもそうだ。俺何んぞ、胃癌で手術したから、来年この世にいられるかだ」「縁起でもない事、言わないで・・・」

「それでは皆さん、先生には私の方から、小冊子、記念品、寄せ書き、記念写真に手紙を添えて出しておきます。あつ、そうだ。忘れるとこでした。急で申し訳ないけれど、お祝いとして一万円立て替えて包んで欲しいとの事でした。参加をされないのです、よろしいと言ったのですが、他のクラス会にもそうしていると申されたので引き受けました。皆さん、拡大コピーと現在の顔を見比べそのギャップを楽しみながら、当時を思い起こしましょう。名簿一番の赤木君からどうぞ」「見事に禿げ上がった赤木善太です。背も名簿も一番前で何をするにもトップで、度胸が付いた様です。向水商業高校を出て、不動産会社に十五年勤め、独立して不動産屋をしています。バブルの時流に乗らせて頂き、住宅、土地の取り引きに猫の手も借りたい程多忙を極めました、バブルが弾け、事業を縮小しています。最盛期に五十人いた従業員は今三分の一に減りました。倅が昨年結婚し、早く孫の顔が見たいです」「今大問題になっている妹爪一級建築士の耐震構造の偽造には、関係していなかったのか」と、

ギョロ目をひん剥いた黒光りの顔の吉本力が、身を乗り出して聞く。「よせやい。関与しているような口っ振りは。もしそうなら、クラス会所じゃねえだろ。ま、過去の書類を調べ上げるまでは眠れなかったがね。一切関ってないと判ってほっとした」「大変だったのね。でも良かったわ」隣席の千絵が細目と共に頷きを見せた。

「そう言えば、善太は先生をよく泣かしたなあ。入り口の戸の上に黒板消しを挟んで、開けた瞬間、千春先生のボーイッシュな黒髪が白髪に早変わりしたもんだ。廊下でバケツを持たされ立たされていた。それが今じゃ、社長さんだ、偉く変身（変心）したもんだぜ」顎髭を撫でながら、武辺は善太を正面に見据えた。「そうよ。上げ戸の机にトノサマガエルを入れられて、女の子は皆、びっくりしたんだから。本当に悪がきだったわね」「俺だけじゃ無い。健ちゃんや勝だって一緒にやったぜ。唯面白がったんじゃないよ。雅代のような可愛い子の歪んだご面相を見たかっただけだ。選ばれたと思えば、嬉しいんじゃないの」口を尖らせ、顔を赤らめ、胡座をかけた善太が当時の悪さを言い訳する。「まあ、屁理屈つけて」アルバムから抜け出した様に、目鼻立ちがくつきりしたお下げ髪の藪崎雅代が口元に笑みを浮かべる。

「この調子だと、赤穂浪士四十七士と同人数の思い出を話し出すと、夜が明けてしまいます。何も今日が最後と言う訳ではありません。参加者は男性十一名、女性九名で、都合で来れなかった男性一名、女性二名の住所録は完璧です。会いたい人同士が連絡したり、二、三年毎にクラス会を開きましょう。次の飯山君の消息をご存知の方は・・・」

知らないなどの声が、二、三カ所からした。

あすなろの樹の如く成長著しい、眼鏡の石井伸之が立ち上がった。「僕は出来が悪かったので、私立の三流の奥道高校をやったの思いで卒業しました。そして、寿司職人、ガソリンスタンド、蕎麦屋を渡り歩き、パチンコ店に勤めて、銭になる商売と実感し、今ではパチンコ店を二軒持ってます。是非遊びにきて下さい。出る台をそっ

と教えますから。妻一人と出戻りの娘の三人暮らしです。勝君や保夫君とは時々会いますが、その他の方とは正に四十八年振りで、誰だか見当も付きません」

「伸ちゃんはコンパスが長くて、運動会では何時もリレーの選手だったね」寿老人のような顔に、程よい赤味が差した藤谷昭が喋り終えると、富一が続く。「ご両親とも背が高く、二人のお兄さんやお姉さんも他人より頭二つ抜きん出ている巨人家族だよな」「一番上の兄貴は家業のガラス屋を継いで、小さい奥さんを貰った。俺のとは十人並みの家内だ」「バスケットボールでは、ゴール下のポストプレイで何時も得点され、癪に触ったなあ」

若々しい米原莊次郎が言い放ち舌打ちをすると、何人かがそうだったと相槌を打つ。

「フオークダンスの時、私の手をしっかり握ってくれず、軽く指先を合わせる程度だったわ」との豊乃のキンキン声に、産だったんだと大声が響き、爆笑となった。

大宮、小熊のその後を知る者はいない。片波は中学の同窓会にも顔を出していないとの事。

「次の狩子猛君に電話をしたら、お兄さんが出られ、彼はこの正月に倒れて入院中と告げられました・・」実際は、脳内出血で意識が無いとの事だが、折角の祝いの会なので伏せたのだ。徳夫の言葉を遮るように、「狩子ってどんな奴だっけ」と、頬こけた今滝健が言葉を入れた。「ほら、靴工場の社長の次男坊だよ」「ああ、ソフトボールでショートを守ってピカ一だった奴か。中学が違うので、卒業後は会ってないな」ドスの利いた低音の吉本に反応して、今滝が奥深い記憶細胞から映像を網膜に映し、言葉を発した。

「彼の裏に私が住んでいて、小、中と同じ学校で仲良く遊びましたが、高校は別々になり、たまにしか会いませんでした。その後、池袋に引っ越され、プロ野球選手となり、或る日階段から滑り落ち、頸椎を傷め、療養しておりました。年賀状の遣り取りはしています。早い回復をお祈りしましょう。次は、今滝君です」と、徳夫は言い

つつ、『徳さんからの伝言が判らないかも知れない』と兄上に告げられ、絶句した事が脳裏を過ぎる。また、彼に見られた秘密や絶交関係になった過去などがあったけど、お互い心の友だったことには違いないよなど、猛に心で呟く。

「今滝健です。先のクラス会に出ましたが、今回初めて会う人が多く、さっきから写真を見ながら思い出そうと勤めておりますが、中々一致しません。五十年の歳月の長さをしみじみ感じました。過ぎ去って見れば早いのですが……。さて、私は高校を卒業して、葛南バスの運転手を十三年やり、壺谷運送会社に転職し、その後独立して運送会社を経営して、八人ばかり人を使っています。後継者にと、男子を希望しましたが、望み叶わず、娘が一人です、再三再四挑戦しましたが。この上は婿を貰いたいと思いますが、娘は小さい頃から荒くれ男にもまれ、ハンドルを握り、男勝りです。中々相手が見つかりません。悩みの種です」

「この頃は婿養子なんて流行らないわ。嫁にやって家業を継いで貰えばどうかしら。今の世は家中心でなく、個人の人格が尊重されるのよ」舌鋒鋭く、豊乃は言い放つ。「そりゃあ、そうだけれど、男としては代々家を残したいぜ」酒屋の富一が石井に加勢する。「折衷案として、会社名は継いで行くとする事で、嫁に出した形にしたらどうかしら」

貝野美妙の大口が上下左右に開く。「何だか、悩み相談になってしまっただけじゃない。婿適格者が居たらご一報下さい」「クラス会で旧交を暖めるのだから、何を話しても無礼講だよ」「医者嫌いの俺は定期検診を忙しさにまかせて、殆ど受けてない。五年前に胃がむかつき血を吐き出して、救急車に運ばれ、そのまま胃癌の手術を受ける羽目になったんだ。あの苦しい思いを二度としたくないわな。健康の有り難味を実感した。その間、妻と娘がよくしてくれ、感謝だわ。その上、去年は家まで新築してくれたな。女性は強い、頭が下がるよ」

「良かったじゃない。素敵な奥様と娘さんに恵まれて」幹事の安作

がふくよかな顔に幾筋かの皺をしのばせ、明るい声を出す。

「健ちゃんは大人数、目立たなかったけど、小柄で足が速く、ソフトでもホームランをかつ飛ばしてた。近所のクラブ野球チームに入った時に再会して、私より背が十五センチも高くて驚いたよ。お互い外野で、東京都の二部リーグで準優勝した事がある。その時の神宮第二球場での始球式は昭和天皇の弟の秩父宮様だったな」徳夫が今滝との関りを皆に披露する。

「そんな事もあった。勝っても負けてもビールを干して、競馬も賭けたっけ。五年位一緒だったかな」休日の午前はクラブチームで、午後には医局のチームで試合を重ねたものだ。三十八の時、もう一歩が出ず、球が捕れなくなってクラブを辞めたのさ。一抹の寂しさがあったな。さあ、ピッチを上げないと終わらなくなる。フットボール顔の左巻君はどうか」誰も知る者が居ない。

紫がかった眼鏡を右手で押し上げながら、角席の細身がゆっくりと腰を伸ばした。「今晩は、末谷保夫です。皆さんの顔がぼんやりとしか見えません。光が目に入ると眩し過ぎるので、サングラスを一年中掛けております。あのサリン事件の現場に居合わせた車掌でした。一時は失明の淵をさ迷っていましたが、治療のお陰で、皆さんにこうしてお会いする事が出来ました・・・」「他人事だとテレビを見ていたが、友が事件に巻き込まれていたとは驚きだなあ」「大変だったのね」「良かったわ、ご無事で」などの言の葉が飛び交った。「これまでは病気一つせず、頑張ってきたので、定年後にはゆっくりしなくてはと思いました。目が悪くても出来る趣味はないかと思案した結果、耳と手で十分こなせる三味線にしたのです。先だって、川崎市のホールで発表会を行って喝采を頂き、更なる精進をしたいです」襖を揺する程の拍手が沸き起こった、彼の再出発を祝うかの様に。

「末谷君は絵が得意で、夏休みの作品展では何時も金賞とか銀賞を獲得してたわねえ。席が隣だったのでよく覚えてるわ」小太りの夏村清江が同じ列に居る末谷の方に声を投げた。

「確か中学生の頃、お父様のお通夜に行き座敷に上がって、お焼香をする段になって、靴下が少し穴が開いているのに気付き、皆に見つからないように少し寄せた覚えがあるよ。それ以来、身嗜みのチェックの際思い出す。次は須木君だ」ふさふさ頭をかきながら、恥を暴露する徳夫。

「徳さんの下に写っているのが僕です。商業高校を出て、疑いも無く酒屋の後を継いでいます。いい仲になった従業員が今の嫁さんです・・」「じゃあ、前の嫁さんは」「言葉尻を捕らえるなよ、勝」と善太が制する。「餓鬼の頃から、親の目を盗んでは酒樽の栓を捻って味を覚え、気付いたら他人よりも多く飲むようになってたって訳。お陰で、職業病とも言える胃潰瘍になっちまったよ・・」

「酒屋が自分で飲んででは商売上がったりだろ。他人に売らなきゃ。そう言う俺も一緒になって呑み助だったわな」と、須木の店から酒を仕入れている同じ商店会の武辺が責任の一端を感じつつ言葉を吐く。「当時は、娘や息子に酒臭いと嫌がられたもんだ。断酒のお陰で、孫娘の餅肌に頬ずりすると目を細めて笑顔を見せる。目に入れても痛くないわな」「好好爺振りが信じられないわ。憶えてない。理科の授業で蛙を使うからと前日の放課後、裏のお寺の池に行ったでしょ。ギョロ目の殿様蛙を網で捕らえ、虫籠に入れた途端、『こらー、何処の餓鬼どもだー。折角植えた稲が死んじゃう。早く出てけー』と髪を振り乱したモンペ姿のおばさんが鬼の形相で追っかけてきたわね。畦道で田んぼに入っていないと徳ちゃんと言いつつ、竹竿持って迫ってきたの。そしたら、富ちゃんは可愛い女の子を置いて一目散に逃げ出したのよ。雅代と好美ちゃんは徳ちゃんに手を引かれて逃げ延びたわ。やはり、学級委員は違うわね」「そんな事あったっけ・・」「都合の悪い事は忘れたんでしょう」「まあ、そう責めるなって。須木君は池辺君や藪崎さんとお習字の三羽鳥と呼ばれた程で、区長賞を貰ってたぞ」ちびりちびりお銚子を傾けていた橋田が、こけた頬を膨らませ、助け舟を出した。

「次は私、丹木徳夫の番です。短気の徳さんとの渾名の通り、父譲

りで気が短い所があります。先走る嫌いも。恩師に予習は抜群だが、もう少し復習もすれば満点獲れるのにと、よく言われたものです。

両国高校から東大医学進学課程に進み、産婦人科医になりました・

「小学で児童会長、中学では生徒会長に選ばれ、成績は何時も三番以内だったからな」「東大一発合格も当然だわ」「スポーツも抜群で、百米走やバスケットボールでは区の大会にも出場したし、よく俺たちとも遊んでた。何時勉強してたのかと不思議に思っていた位だ」

「根っから頭がよかったんだよ」「運動会で、舌なめずりしながら短い足を素早く回転させ、何時も一番だったな」「止しなさいな。身体の欠点を言うのは」「いいだろう、本当の事なんだから。走る姿が不二家キャラメルのカラクターの『ぺこちゃん』そっくりだった」などと、周りから次々と追加発言があった。

「そう、その短足胴長に悩みました。持てないんじゃないかと。先祖代々からの遺伝子のなせる業とは言え。外人に比べ、多くの日本人はそうなのだと自分に言い聞かせました。小学生の发育盛りに、勉強好きな叔父さんから引き継いだ座机で読書したので、脚が伸びなかったのでしょうか」「何故、お医者になろうと思ったのですか・」
「産婦人科なんて・・・」出来上がった善太は鍋の湯気で顔中一層紅潮させ、眼鏡越しに見上げる篠藤千絵の言葉の尻に続けた。

「身体の特徴が白衣で隠れるから。これは半分冗談ですが。小さい頃、近所だった貝野美沙ちゃんや尾谷博江ちゃん達と悪戯鬼共を交えて材木置き場でお医者さんごっこをした事も一因かな・」
「やだー、徳ちゃん。昔の事をばらさないでよ、恥ずかしいわ」「そうよ、博ちゃんの言う通りよ」「何言ってるだ、美沙。生娘じゃあるめえし。時効もんだわな。昔のマル秘情報を出し合うのもクラス会の楽しみだわな、そうだろう、みんな」勝の言に男性陣から賛同の拍手が起こった。

「更なる理由としては、小学四年次に図書室で人類学者安田徳太郎博士の『人間の歴史』の書籍に釘付けになり、確か十巻位を夜通し

読みました。この時、人間そのものに興味を覚えたのです。中学の図書室で仲間と男性、女性の生殖器の解剖図を女子が居ない時に見たものです。生命の誕生に神秘性を感じたからです。一歩間違えれば、今月親御さんを震え上がらせた新聞販売員による奈良市とペル一人による広島市での小一少女殺害事件の様な性犯罪者になったかも知」 「そんな事はないよ、徳さんは。それにしてもませてたんだ。俺と同じスポーツ少年とばかり思ってた・・」 今滝健は胡座を崩し、身を乗り出すように徳夫をしげしげと見る。

「その後、医局に残って助教授を五年間勤めて開業しました」「どうして、教授にならなかったんだ。徳さんならなれただろうに・・」 「富ちゃん、そう簡単にいかんよ。山崎豊子のベストセラー小説『白い巨塔』、ドラマ化もされてて、見なかったか。出世するには、頭だけじゃない。泥臭い人間模様や金が絡んでるさ。なあ、徳さん」「藤谷君。私の場合は違う。父方の祖母の兄の娘さんが女子医大を出て、近所で小児科を開院していた。七十過ぎの独身で、養老院に入居するので、譲りたいとの事。我が家は路地の奥なもので、角地は渡りに船と安く買い取ったと言う訳さ。女房が薬剤師で、息子は内科医、その嫁は眼科で一緒にやっている」「凄いじゃない、医者家族だなんて」と、美妙は厚い唇に感嘆の声を乗せる。

「知ってたら、徳ちゃんに子供を取り上げて貰ったのに。そうすれば、きっと徳ちゃんに似た頭の良い子が生まれてたのになあ。残念だわ」昔を思い出しながら、尾谷博江は鞠顔を更に丸めた。

「尾谷さんは恥かしくないの、同級生に見られて」と、篠藤千絵が眼を白黒させて抗議する。

「だって、当時から徳ちゃんが好きだったもん」

「まあまあ、私の話はこれ位にして。大分時間を取ってしまった。次は、同姓の丹木秀夫君だ。先日、お兄さんの家に電話したら、何処に住んでるか判らないと言われてしまった。いろいろ事情があったと思うよ。彼はそら豆みたいな顔に眉毛が薄かったな。普段大人しいが、怒り出すと火が付いたように泣き出していたっけ。原因は

忘れたが、後にも先にも初めての喧嘩を彼としたんだ。他に何か情報を持っている人は・・・」皆頭を横に振る。

「今度は俺だけどう、何も喋る事はねえな。平々凡々だわな」「それが一番だぜ、武辺。目パッチリの奥さんとの馴れ初めを話せや」「他人に聞かせる程でねえべ、富さん」「何時だったか、店が休みの日に誘われて、円卓で麻雀をしてたら、若い女性がお茶と菓子を出してくれたな。あの時の女だろう」「隣のタバコ屋の二女で、出来ちゃったで仕方なく、貰った訳だ。子供は三男三女となって朝から晩まで、尻叩かれて働いてるさまよ。サラリーマンの停年退職が羨ましいわ」「駅のまん前で、何時も見るけど、混んでるじゃない。味も美味しいし」と、同じ大通りに面した花屋の好美が言葉を挟む。「今では、四代目の倅が張り切っているのです、どうぞ俺同様可愛がってやって下せえ」「小学三年生位だったかな。テレビが駅の構内とか大型店舗にしかない時代、遊びに行つて、客と一緒に力士出身の元関脇力道山、元横綱東富士、柔道家だった木村がシャープ兄弟やルーテーズを向こうに回し、力道山の空手チョップの嵐や木村の柔道技で相手を苦しめ、それに一喜一憂したもんだ。出来たての湯面と餃子を柔和な表情のお父さんにご馳走になり、その味が今でも忘れられないよ」「そんな事もあったな、徳ちゃん。線路脇から駅のテレビを見たり、店外の人も大勢覗き込んでいたわ」

「勝も善太に負けず劣らず悪だったぞ。スカートめくりをしたり、雪合戦の球に小石を入れて、女の子をよく泣かしてたな」「変な事ばらすなよ。皆は忘れちゃまっているのによ」

白黒ブチの髪に手をやりながら、武辺は口を尖らせ喋る昭の顔に目を刺す。

「武辺さんにも優しいところは有ったわ。習字の塾で一級になり、先生と共に手を取り指導して頂いたもの」「彼はその頃から面食いだったので、可愛い子しか教えなかった筈だよ、騙されちゃ駄目だ、美和子ちゃん。牙を隠してたんだ。良く無事でいられたな」保夫の誇張した言い方に、一同は笑い転げる。

「積もる話もあるかと思いますが、このペースでは女性陣の時間が足りなくなります。二次会で存分に話して下さい。次の土森昭二君は風の便りでは、三十代の頃に鬼籍に入った由。先生に作文の出来を褒められた時、彼の方が、抒情味があると言われたのを忘れません。近頃、エッセイとか小説を書き始めたので、彼の分まで頑張ろうと決意致しました。他に何か・・」 「亡くなっていたなんて知らなかった。物静かな話振りで、先生の質問に答え、特に動物に関した理科が得意だった。飼育係りの時に土手でおおぼこを取って来て、目をキラキラさせて兎に食べさせていたわ」 丸顔の博江の頬に一滴が伝わり落ちた。

「皆さん、鰐辺澄子さんもあの世にいらしているので、二人の冥福を祈り、献杯致しましょう。それでは、けんぱーい」 グラスやお猪口を高々とかざし、一斉に黙礼をする。

「橋田君、どうぞ」

彼は目の細さと薄唇に面影を残すが、白髪とこけた肉付きは写真からは想像も出来ない。

「僕は大学の経済学部を卒業して、山村証券に就職し、一昨年停年を迎え、今は顧問として働いています。皆さんご存知の通り、バブルの頃は株式や投資信託で大いに儲けさせて貰いました。その後弾けて不良債権などを抱え、四苦八苦しました。最近、パソコンの普及とIT産業界からのホリエモンや三木谷社長の登場のお陰で個人投資家が急増し、その手数料で潤ってきました。私生活では、子供は出来ず、妻と二人暮らしです」 「聞いてびっくりしたわ。あの物静かだった橋田さんが、証券マンになっていたなんて。もっと、早く知ってれば臍繰りを増やして貰っていたのに・・」

派手な着物に狸目を見開き、大形裕美子は溜息をつく。

「小さくても腕っ節が強く、ソフトでよくホームランを打っていたよ」 のっぽの伸之が度の強い眼鏡越しに、橋田を見据える。

「ガラスや植木を壊して、爺さんに怒鳴られたものな。その家が転校生の渡瀬君の家だったとは驚きもんだった」 「そうだったな、古

本。金も無かったから謝りもせず、一目散に逃げ出してしまった。ほとぼりが冷めた頃、また同じ事を繰り返したりしてな」健は言いながら、懐かしむように空に眼を浮かす。

次の番は色白な頬にほんのり赤味が付いた藤谷。長身がスックと立つ。「時間が無さそうなので、一言。藤谷昭。兄貴が米屋を継いで、自分は埼玉の坂戸市で果物を売っていて、妻と三女が居ます。以上」

「何時もにこにこ顔で怒った所を見た事無かったわ。きちんと一緒に掃除をしてくれたし。赤木君や武辺君は逃げ回っていたけれど」

貝野美紗のコメントに野村美和子の角張った顎が大きく下に動いた。「次にひけえしは古本力と申すもの。見目麗しき美少年が月日に惨敗し、ご覧の如く、頭はチョロチョロ毛、顔はごつい下駄顔、腹はびや樽。親の代からボタンコで、頼まれ仕事は何でもこなす。金属の型作りで、鍋類、ハンガー、道具入れ、鍵、ストーブなどの部品もあるよ。連れは幼馴染の三歳年上で、子宝は一男一女。皆頭は悪いが、風邪一つ引いた事が無いのが自慢だわ」「信じられねえぜ。ドスの利いた渋い声、何処かの組の親分と思える恰幅のよさに大変身だ。あの頃は、男女と皆で馬鹿おとあんなにしてた。女の子とばかり遊び、女言葉を使い、ゴム縄や縄跳び、石蹴りをして、一度も男と遊んだ事も無かったからな」と悪戯鬼大将の善太は言いつつ、自分より見た目は二周りもある凄みの顔貌になり、悪役スターに出したい位と心考えた。

「姉が二人で、妹も二人。サンドイッチだったから、今から思えば当然の成り行きって訳だったんだな」「学芸会で、シンデレラ姫に扮した姿は、女の私から見ても、うっとりしたわ」「昼休みに、口紅の塗り方を教わったものよ」「女子のオトイレで顔を合わせ、肝を冷やした事もあったけど」などと、女性陣からエピソードが噴き出した。

「次の大柄で長いコンパスを武器にリレー選手だった前川君はどうしてるかな・・・」「この近くのマンションにいらしいと聞いた事があるわ」と好美が答えたので、「町で見かけた際には連絡先を聞

いて幹事に連絡して下さい」と徳夫は頼んだ。

豆タンクと渾名された森崎君は、誰もその後の情報を持っていない。お河童頭の下は端正なマスクで、ボーイソプラノを響かせ、音楽好きな恩師に一目置かれていた吉金君の消息も掴めず。

次は部屋に入って来た時、すぐさま彼に違いないと判断した米原である。卒業時の顔そのまま、背が伸び坊主頭に毛が長くなった感じ。聞くと、染めて無い由。

話す事は無いと座ったまま小さな口を渋々開く。

「噂では総理大臣賞を獲ったって」と、徳夫が話す切っ掛けを与える。「へー、何で・・・」「知らなかったの、夏村さん。刀鍛冶で刀剣の品評会でだよ。家業を引き継いで、兄弟で競い合っているそうだよ」烏龍茶を飲み終えた須木が追加した。

「子供の頃、よくお邪魔して、ふいごで火を真っ赤にした中から刀身を取り出し、ピカピカ頭に鉢巻をした上半身裸のお父様が大きなハンマーで叩き、水にジュジュと漬け、それを何度も繰り返していたな。座敷で、完成した銘入り大刀、小刀を見せて頂いた。今でも鮮明に網膜に焼き付いている」徳夫は現場の一端を臨場感よろしく喋る。

「そう言えば、いろいろな賞を貰ったな。それに、渡辺謙が出演した『ラストサムライ』では、袴姿で顎鬚を伸ばして、刀を鍛えている現場を撮影された」「本当に・・・。凄いのね」「その映画、観てないな」「観たけど、気付かなかったわ。今度はその場面に注意するわよ」「そろそろ、人間国宝ものね」と皆は口々に言い合う。

「まだまだだよ。兄貴と言うライバルがいるから励みになってる」「莊次郎君は無口だったから、余り話した記憶はないわね」「スピーカーと言われていた前島豊乃が昔を思い出す。「お前さんみたく、べらべら喋っているのは手が動かず、なまくらばかり出来て、売り物にならんぜ」的を得た勝のコメントに、その場は笑いの渦となった。「さあ、男子最後の二十三人目の渡瀬君については・・・。先程転校生で話題になったけれど・・・」誰からも追加発言は無い。

「皆さん、話に夢中になって鍋料理が煮上がってしまいます。茶碗蒸も冷めては美味しくありません。この辺で十五分位休みましょう。お酒の方も進んでない様ですので、よろしく。若い仲居さんも聞き入ってないで、お酌しないと売上げが上がりませんよ。それでは休憩」

真ん中でおちゃんこしていた二人は顔を見合わせ、苦笑し、背を押されるように女性にも男性にも注ぎ始める。

暫しの休憩に、トイレに立つ者、隣と話の花を咲かし、往時の顔になる者が居る。司会の徳夫は喉が疲れ、やや温まったビールを飲み干す。ギャルにお酌され、再び飲み干す。見繕って貰った野菜、白滝、肉団子を喉に通す。後半戦に備え、徳夫も美妙の次にドアの向こうで生理現象を終える。

「それでは、皆さん。時間も残り一時間を切りましたので、女性陣に移りたいと思います。所定の席にお戻り下さい」皆は着席した。

「女性トップの大形裕美子です。はるばる熱海から駆け付けました。先程来、皆さんのエピソードをお聞かせ頂き、写真と首っ引きで、必死に半世紀前に切り替えていた所です。さて、父が国鉄の運転手でしたので、転勤が多く、卒業後は各地を転々とし、二十二歳の時に小田原城の近くに落ち着き、踊りや小唄が好きで、熱海の芸者となったのです。今はこんなお婆ちゃんですから、お座敷には出ず、置屋をしますの」「道理で。着物の色合いが良く、粋に着こなしていると思っただわ」

和服姿の美和子が柄を褒める。

「熱海なら何回も不動産業界の親睦会があり、ドンちゃん騒ぎをしたもんだ。ひょっとしたら会ってたかも。お互い名乗らなければ判らないだろうが・・・」赤が頂点に達した頬を膨らませた善太に続いて、須木もそこで酒店組合の理事会を開いたと言う。

「名前のように大柄で、瓜実顔だったからカツラも似合ったでしょう。それに、男の子にもはきはきと悪い事は悪いと言い張っていたわ。善太君のような酔っ払い相手に大変だったでしょうね」

「そんな事無いわよ、藪崎さん。他人と話すのが、根っから好きだったから。そりゃ、いけずな男もいたわよ。その時は商売と割り切ってきたの」

「全校一のグラマーで、何時も男の話題に上ってたぞ。先生方より大きいと」と、ギョロ目の力が力を込めて言い、更に「俺も君の様になりたいと、お風呂でよくマッサージをしたもんだ」と言葉を足したもんだから、かつての女男が男言葉を使って、女らしい仕草を披露したので、そのギャップに皆はやんやの拍手を送った。

「古本があのまま成長してたら、女形になれたかも・・・」断然無理だぜ、藤谷。今の顔に着物を着せてみろよ。それこそお化けだ。家業を継いで正解だった」と、下呂を吐く真似をする武辺。

「このボインの迫力に、男が何人も言い寄って来たの。お陰で、子供が六人、孫が八人、ひ孫が三人居るわよ。私の誕生会には一族郎党が集合し、それはそれは賑やかを通り越して、騒々しいわ」

「幸せそうな大家族が浮かんでくる。わたしは独身で母と暮らしていて判らないけど、お孫さんは可愛いんでしょう」藪崎雅代の声は羨ましさを混ぜた音調になる。

「そりゃそうよ。さっき、須木君が言ってた様に。時には悪たれ口をきくけどね」「今の少子化時代に貴重な存在だよ。男性諸君、種は何時までも枯渇せず。裕美子さんに負けないように、今からでも子作りに励もう」「さすが、産婦人科医だ。言う事が違うな」相変わらず、武辺の合いの手が入る。

徳夫は大形違いであると、この時点で確信し、大きく息を吸い込み、安堵の溜息をつく。今回女性の取り纏めを全て安作に任せ、大形の出席を電話で聞き、小躍りした。当時、色白で切れ長な涼やかな目元に、ずんぐりむっくりの自分と異なり、八頭身の彼女に話す時だけ、ドキドキ胸を抑えつけねばならなかったことが、鮮烈に記憶細胞から蘇った。淡い初恋の子とまた会える。その日が来るのを指折り数えた。そして、今宵彼女は着物に身を包み、その姿を現したのだ。安作に会費を支払っている際、傍に居た前島豊乃が、もしかし

て、おおがたゆみこさんじゃないと声を発したのだ。あの大形さんがと徳夫は振り返った。あっと声を上げそうになったが、飲み込んだ。髪の毛の間から地肌が見え隠れし、額皺と頬皺に囲まれ目鼻が小さい。観る影も無いのに愕然とした。あの美人がこんなになってしまった、月日は残酷過ぎる。こんな事ならクラス会を開かなければ良かった。美しい思い出は思い出のまま封印しておくべきだった。千春先生がこんな年老いた姿を元気な皆さんにお見せしたくないと電話口で泣いた気持ち判った様な気がした。意気消沈したまま、司会業を続けてきた。しかし、全校一のグラマーなる単語が徳夫の脳裏にクエスチョンマークを付けた。スラックとした長身で、確か胸はそれ程大きくは無かった。実物を拝んだ訳ではないが。早速、自分が作成した小冊子の写真を一・六倍にした拡大コピーで彼女を探した。居ない、おかしい、何故だ……。彼女の名は何だったか……。遠い記憶を手繰り寄せる……。そうだ、由美子さんだった。一字違いだ。そうか、四、五、六年のクラスでなく、三年生の時出会ったのかも……。マリア像が崩れなくて良かった。気持ちがスーとした徳夫。

続く大岡明美は家が化粧品店で垢抜けした顔立ちだったと声が上がれば、わたしらは田舎娘だと言いたいのと、女性陣の逆襲あり。ふっくらまん丸顔に面影を残す尾谷博江が徳夫に指名され、起立する。

「私は早稲田の文学部を出て、五年間民放のアナウンサーをしていました。妊娠してから専業主婦です。テニス部の先輩と学生結婚し、彼は大蔵省に勤務しています。一男二女の子育てが済んだら、気が抜けて暫くボーとしていました。ある時、新聞の文芸欄の和歌に目が留まり、小学生の頃、詩や和歌が好きで、ノートに書き留めていた事が頭を過ぎったのです。そして、夢中で山川文庫に五十首を数回応募しました。一年経っても入賞せず、才能が無いとしょぼくれていた矢先、シニアに発表の場を、戦争体験を風化させじ、その他でもOKとの同人誌紹介の記事に目が吸い付けられました。早

速、エッセイを送付した所、二回目に掲載通知を頂いて、天にも昇る気分になったのです。『鶴亀同人誌』に入会し、その後も十編中四編位は活字になり、生甲斐を見付け大喜びしました。自分史大賞にも応募して、佳作に入選し、三千円を頂きました。これに勇気付けられ、他社の公募にも小説を投稿し、協同出版の提案を何度も受けました。これは、著者の経費負担が約七割、出版社が約三割です。今は、著者無料の新人賞とか企画出版を狙っています。何故なら、銀婚式で堅物の夫と子供達が佳作の作品の出版費用を出してくれて、自費出版はこれ切りと約束したからです。七十五万円で三百部作成し、親戚、会社関係者、友達に謹呈しました。この会がもっと早く開かれていたら皆さんに贈りましたのに。手元に三部しか残っていません。男性陣と女性陣に一冊ずつお渡ししますので、回覧され、最後の方はよろしかったらお持ち下さい。皆さんからのコメントを頂ければ幸いです。なお、自分史と言っても、他社へ小説応募の為構想を練って書き始めた所、『鶴亀同人誌』で第一回シニア自分史大賞の応募があったので、急遽主人公と副主人公に自己の体験や主張を投影して書き上げ、その旨を書き添えて投稿したものです。つい、長々とお喋りして済いません」皆は両手を顔より高く上げ、両手に振動を与え続けた。

「博江さんの人生が手に取るように浮かんできたわ」「素敵な旦那さんや子供さんに恵まれて幸せね」「子育てと言う女の務めも卒業し、創作に邁進しているから、目が生き生きしてる」などと、女性陣から声が上がった。「確か、富士乃湯の娘さんだったよね」と、今滝健が念を押す。「そうよ。三人姉妹の真ん中。姉が婿養子を貰ったから、自分は好きな事が出来るの。だから姉貴には頭が上がり、感謝のしっぱなしよ。そうだ、時々番台に出て、徳ちゃんにも会ったわね。恥ずかしそうに前を隠していたっけ」「思春期の恥じらいさ」

照れを隠すように、徳夫は右手で口の周りを撫で回す。「徳ちゃんのは小さかったか、大きかったか・・・」「嫌な、武辺君。今は個人

情報保護法があつて、うっかり個人の秘密は漏らせないのよ」「こりゃ、一本参ったな」

「いい、今度はわたしの番よ。貝野美妙は高校を出て、蒼門会医科大学で三十年間医療事務を担当し退職したの。近所の世話好き小母さんの紹介で警察官と見合いし、両親にも公務員なら食いつぶくれは無いと勧められ結婚したわ。しかし、彼は間も無く刑事になって、殺人などの凶悪犯人を追っていて、ろくに家にも帰らず、子供は作り損なつた訳。事件の度に心が冷えたものよ、今日も無事かしらと・。三年前に停年を迎え、二人で温泉地巡りを愉しみ、心を温め直し、今が新婚気分って言う所かな」「ご苦労が多かったのね、貝野さんは」身体に似合わぬか細い、しみじみ声を夏村清江が美妙に向ける。

「終わり良ければ、全て良しだよ。万万歳だ」と、吉本が手を強く叩いた。

「今度は美妙さんが自治会の地区部長さんで活躍しているそうだ」会が始まる前に、小耳に挟んでいた石井が皆に伝える。

「そうなの。別にこれと言った趣味も無いし、家に閉じ籠っていては老け込んだじゃうから」「それで、お洒落で若々しいのね。私も見習わなくちゃあ」

曾孫が居る安作が穏やかな口振りで話す。

「そうよ、美っちゃんは小さい時から大柄で、遊びの中心的存在だったわね。ドッジボールでは並み居る男供を次々と倒してた」「何よ、博ちゃん。それじゃ、まるで男勝りで、勉強のべの字もしてなかったように聞こえるじゃない」再びの笑いが皆の口元に零れる。

六、七番目の酒井、笹原のその後は、判明せず。

「八番目の篠藤さん、お願いします」「愛育薬科大学から昴製薬会社に入社して、目出度く停年まで居られました。しかし、会社には貢献してないのが、心苦しいです。担当は抗生物質の開発研究の生物グループですが、ひとつも製品化出来ませんでした。夫は抗潰瘍剤研究の合成グループのリーダーとして年商一千億円の製品を世に

出し、取締役になりました。彼の成功を祝福する反面、複雑な気持ちです。彼は、企業は共同体で、全員の力の結集で物が出来上がり、後輩が貴重なデータを引き継いで、抗生剤領域でも近い内に製品化可能だと慰めてくれますが・・・」 「大変な世界なのね、薬を作ると言う事は、考えてもみなかったわ。まして、夫婦が研究者ではお互いがライバルなのね」

「千絵さんは、忍耐強く何かをじっと考えるタイプね。蛙の実験では、先たってナイフを握ってた」

「よく、憶えているわね、美妙さん」 「だって、同じ班だったじゃない」 「小屋の前で、この大きな兎も解剖してみたいと言ったら、飼育係りの土森君が青い顔して、金網を背に両手を目一杯広げていたわ。彼には、きつと貴方が鬼婆に見えた筈よ。あの世で、まだ震えているわよ」 「止してよ、前島さん。変な事思い出させないで。」

確かに、マウスを何千、何万匹と殺してきたわ。暮れには神主さんを招いて、動物慰霊祭を開いてきちんと供養しているの。これも、人間の為なのよ」 「ここ二十年位前から、動物愛護団体の運動が活発になって、実験動物の代替物の開発、例えば、微生物やDNAなどの利用、使用匹数の減少、麻酔薬による安楽死などを訴えている。その方向に製薬業界も動いていると新聞に載ってたな」 徳夫が知識の一端を示す。「私はずっとシャム猫を愛してるので、反対の気持ちには痛いほど判る」と、前島豊乃が顔を歪め、涙声になる。「でもさ、必要最低限の動物は使わないと。いきなり、人間をモルモットには出来ないぜ」 善太はしたり顔で言い終えたと、お猪口の辛口を啜る。

「先日、高校の化学部の女子生徒が母親に毒物のタリウムを飲ませて、その作用を克明にブログに発表してたって。知識偏重で、心が育ってないんだな。パソコンばかりでなく、生身の人間と心を通わす対話が必要だ」と、証券マンとして若手に遅れまいと必死にパソコンを猛勉した橋田がぼそりと言った。

「しみみりした話になりましたが、続いての鈴木、田中、中島さん

の消息は・・・」「田中さんは訪ねた三日前に引越され、行き先は聞いていないと両隣の人から聞きました。一足違いでとても残念でした」幹事の好美が唇を噛みながら、報告する。

「次の夏村清江さん。どうぞ」「わたしは松戸競輪場の並びの八百屋に嫁ぎ、二十歳で車の免許を取り、朝から晩まで独楽鼠の様に働き詰めです。お陰で、腰を傷め、整形に通ってます。旦那と車券を買いるのが唯一の楽しみですが、何だかんだ言っても負けてます。でも、あの興奮がストレス解消よ。今日もライトバンを飛ばして来ました。先生をお送りしようと張り切ってたのに、がっかりです。でも、こうして幼馴染みに会えて、良かったです。事實は小説より奇なりではないですが、皆さんのお話を伺っていますと、色々な人生模様が有るんだなあと感心もし、驚かされました。息子が一人おりますが、自動車会社に就職し、二代続いた八百屋も廃業近いです。近所に、スーパーが建ちましたから・・・。御免なさい、詰まらない愚痴を言って」「しょうが無いよ。時代の波だ。この高砂大通りだって、駅向こうの南口に五階建てのスーパーが出来てから客足が極端に少なくなったよ。家の酒屋も俺の代で終わりだ」「小さくて、こけし顔の可愛い清江ちゃんが肝っ玉母さんみたく、肥り気味だが、男勝りに車をぶっ飛ばしているなんて信じられないぜ」「そうよ、赤木君。千住のやつちゃ場で、仲買人から競り落すのに男も女も無いわ。生活が掛った真剣勝負ですもの。そこで、大分鍛えられたの」「ふくよかな胸を揺らし、善太に受け答える。

次の西沢は近くのマンションに居るが、都合がつかず欠席との事。小学生の時と同様、小柄な野村美和子が着物の裾を直しながら立ち上がる。「皆さん、今晚は。やっと、皆さんのお顔がタイムスリップして写真と部分的にも一致して参りました。私は青桐女子大の演劇部に所属し、演劇祭で心泉大の男性と意気投合し、同棲しました。共に演劇人としての道を歩みましたが、私には役がつかず、悩み、隙間風が強くなる一方で、別れました。不憫に思った新聞記者の姉が、接待で利用している向島の料亭の離れで、心とお腹を温め

てくれたのです。帰り際に、そこのご主人に紹介され、その後何度か姉妹で訪れました。或る晩、家風呂で背中を流して貰っている時に、あのご主人の印象はどうかと聞かれ、料理の様に心和む男性と答えたなら、驚く事を私に告げたのです。実は彼からプロポーズを受けたが、仕事が辞められずに断った由。奥様を二年前に病気で亡くされ、子供はなく、社交的で明るい女性を後添えにしたいとの希望だとの事でした。白羽の矢を貴女に立てたから、付き合うだけでもと口説かれ、その彼が現在の夫です。子供も二男二女授かりました。皆さん、是非遊びにいらして下さい。うんと、サービス致しますから」「へー、まるでドラマだ」「妹思いのお姉さんだ事」「夢が叶わなかったのは辛かったろうけど、今が幸せならそれに越した事はないよ」「お姉さんはお元気なの・・・」「姉はどうとう独身をとうして、悔いは無いと。次男が高校生の時、姉の養子になり、お嫁さんを貰いました。わたしは、昨年、乳癌を宣告され、うろたえましたが、幸い、初期でしたので、手術で完治したと言われ、一息ついた所です。思いの丈を和歌にぶつけましたら、区の文化祭で金賞を頂き、短歌の会に入りました。昔、千春先生に詩を褒めて頂いた事を病床で思い出し、創ったのです」「そうよね。小学校で褒められたり、叱られたりした事はよく憶えているわね。大人になってからはすっかり忘れてるって感じよ」との藪崎雅代のコメントに何人かが頷く。

辺見、松尾の卒後の足取りは判らず。

「松尾って、都会の花村学園から来た転校生だろ」

「そうだよ、富ちゃん。大人びた色気があって、知的な目、口で先生の問いに真っ先に答えていたな。学習進度が一学年前倒しの彼女に対抗出来たのは徳ちゃんだけだった」武辺が昔を懐かしむように、顎鬚をしごく。

「夏休みのラジオ体操には、真っ赤な高級自転車に真っ赤なショートパンツを穿いて、バンビのような脚でペダルを漕いでいて眩しかったな。あの女神に会ってみたい」「どうせ、わたしらは大根足で

すよ。練馬大根はおでんにすると頬が落ちる程なの。だから、中身で勝負よ。健ちゃん始め、男の人は外見にしか目がいかないんだから。いいかげんに歳を重ねてきた訳じゃないでしょ。目を覚ましなさい」顔はくたびれているが、恰幅の良い大形裕美子がぴしゃっと今滝を睨み付ける。

「大形さんは芸者になる位だから自信有ったんでしよう。小学生の時から目立っていたし」剣幕に押された今滝は追加をする羽目になった。

「さて、皆さん。五時半に始まって、丁度予定の八時ですが、そこは赤木社長の馴染みの店なので、一時間のオーバーもOKとの事です。先程、社長が女将に頼み込みました。それでは、前島豊乃さん、どうぞ」「いよー、緑の上着を脱げば真っ赤なセーター。還暦祝いの赤いちゃんちゃんこにだぶって見えるぞ。待ってました、豊乃ちゃん」

「何を待ってたのよ。いびり倒したいんでしょ、勝君は」「ご名答」「何処を叩いても、何も出ませんから。昔から品行方正だったでしょう。言われる前に言っておかなければ。おぼんの負け犬でーす。

三十以上の未婚、子無しですから。一人娘で、残された父親の面倒を見ている内に時刻は流れ、五年前にその父を見送りました。クリーニング業を引き継いで、食べる為に稼ぐ毎日です。それ切りなの」

「趣味は無いの」と清江が引いた声を出す。

「強いて挙げれば、カラオケかな。アイロン掛けながら、ラジオの歌謡曲を口ずさんでいたから」

「秋祭りの神社の境内で、若い頃美空ひばりを歌って、よく景品を獲っていたなあ。良く通る艶と張りのある声だった」「そうなの、富ちゃん。一度、聞いてみたいわね」と、美妙は殿様蛙目を前面に出し、厚唇を動かす。

「もう、歳で声が細くなったわ」「それだけ出れば、上出来だよ。さあ、幹事の安作好美さんの番です」

「わたしは農家の三男二女の次女で、高校を出て、農協の事務員を

して、六年後に見合いの話があつて、そのまま結婚したのです。夫は花屋で篠藤千絵さんのお兄さんです。つまり、千絵さんがわたしの義理の妹に当たる訳。不思議な縁だと思いました。そして、二年後に社内恋愛の千絵さんが結婚して出て行きました・・」 「兄の見合い相手が好美さんと知った時は飛び上がる程驚きましたよ。早く、家を出なければと焦り、煮え切らなかつた彼のお尻を抓り、早目にゴールイン出来ました。お義姉さんのお陰です。感謝していますわ」 「子供は二人娘で妹が嫁ぎ、姉は店を手伝ってくれて未だ独身です。親として気を揉んでおりますの。義理の両親が八十代で、実家の二親は九十過ぎですので、両家を行き来して、世話をしております。世に言う老老介護の典型ですよ。千絵さんも相模原の遠くから、わざわざいらして、ご両親の面倒を看て下さいます。手が負えなくなれば、施設にとも考えています。済いません。面白くも無い老人問題をお話して・・」 「いや、我々にとつては切実な課題だ。心身両面とお金の苦労がつきまとうから。家族だけが抱え込むとしんどい場合もあるから、公的機関の利用も必要だよ」 徳夫が話しの後を引き取った。

「キャベツ畑でチョウチョを追いつけたり、田圃で蝗を捕ったりした時、安作さんの、現在の俺みたく立派に禿げ上がったお父さんによく怒鳴られたもんだ。なあ、徳ちゃん、富ちゃん、勝」 赤木社長が腕組をしながら、首を振り振り、錆び声を上げる。「そんな事も度々あったわ」と、須木が言う。他の二人も肯定の頷きを見せる。「好美さんはお誕生会には、必ず家で採れたスイカ、茹でたとうもろこし、トマトなど季節の物を持って来てくれたわね。採れたてでとても新鮮な味だったのを今でも思い出すわ。有難う」と、顎のしゃくれた博江が笑顔を見せる。

「参加者最後の藪崎さん、どうぞ」 「はい。私は青い目と黒目の孫のお婆ちゃんです。長女が大学のドイツ文学部に入り、心配でした。が一年間のドイツ留学を許可しました。文学所か、子作りの勉強に専念して、彼と孫を連れてきたのにはさすがに面食らいました。で

も、子供には子供の人生があり、自己責任を持てばと思っていたので、夫と祝福して迎えたのです。実は、私は千葉大学の薬学部で薬剤師免許を取り、病院か薬局への就職を希望していたのですが、呉服屋の一人娘で悩んだ末、繁盛している家業を継ぐ事にしたのです。また、大学の同級生を好きになり後ろ髪引かれる思いで、高校時代に心臓中隔欠損症の手術の時寝ずに見守ってくれた彼と結婚しました。この様に、私の人生は環境によって変わったので、子供達には自由な自分の意思で生きていって欲しいと願ったの・・・」「雅代さんは波乱に富んだ人生だったのね」と、美和子は目を丸くする。

「心臓手術では、同室の三人の彼女が戻って来ません。覚悟を決めたものの、前夜は眠れなかったです。でも、この様に生かされました。しかし、十年前に貴女と同じで乳房摘出をしたと思ったら、今度は人工透析を受ける羽目になったのです。よくよく付いて無い巡り合わせと恨みました・・・」

「凄かったんだ、病気のオンパレード。良くぞ、耐えてきたね」聞いていて、険しくなった徳夫の目が、徐々に明るさを取り戻す。徳夫にとってぽっちゃりで、勉強も出来た雅代は意識していた一人であった。これからは幸多かれとの願いを込めた拍手が湧いた。

「三年前に、これが最後の機会と考え、死んでも本望との意気込みで、カタコトの英語を頼りに単身、娘のいるドイツに行きました。医者には止められたのですが。向うの病院で透析中、義母から義父が倒れたので、娘は至急戻るようにとの携帯が入り、素っ飛んで帰りました。残された私は一言も独語は喋れず、英語も通じず、奈落の底に蠢いていました。義父は大した事なく、娘が戻って来て、やっと生きた心地がしたものです。そんな思いはしましたが、一年生と三年生の緑目の男の子と三歳の黒目の孫娘と二週間遊べたので、元気を貰いました。スイスとの国境に近いフライブルクの町なので、夏のアルプスの山並みが壮大で、マッターホルンにも脚を延ばしました。後の望みは息子二人に良い相手が見つかる事です」「大丈夫よ。いいお婆ちゃん振りですもの。きっと貴女に似た素敵なお嫁さ

んが来ますよ」「有難う、美和子さん」

「それでは、名簿の最後の鰐辺三人娘さんになります」「へー、鰐辺姓が三人もいたっけ」「ほら、勝さん。後ろから二列目でわたしを挟んでいるでしょうよ。右隣のぽっちゃり、お下げで可愛いのが和子さんよ。しっかり、思い出して。反対側の和歌子さんは中国人の周さんと結ばれて、横浜中華街で店を出しているそうよ。今回は多忙で行けないけれど、是非近所に来た際には立ち寄って下さいと言われました。皆さんによろしくとも」

幹事の好美が電話の内容を皆に伝えた。

「やっとの事で赤穂浪士四十七士と同じ人数のチェックを終わりました。還暦を過ぎたせいとか、健康不安、病氣、介護の話題が多かったのは当然と思います。お金は有りませんが、病氣の相談ならご一報下さい。話に夢中になって手がおろそかになってた方は、折角のご馳走ですから、胃を喜ばせて上げましょう。その間、六色のサインペンと花形の用紙を配布しますので、千春先生宛てにメッセージと名前を記入して下さい」

皆は好きな色を取り、酔った頭で捻り始める。暫し、ゴトゴトと鍋が揺れる音だけ。

「書き終わった方からペンと用紙を戻して下さい」「何んて書いてらいいか、わかんねえな」武辺の赤鬼顔がやや青鬼になる。

「お互いの内容は発表しませんので、自由に感じた事、思ったままでよろしいですから。私は色紙にレイアウトする都合上、読ませて頂きますが」

「ずるいぜ、一人だけ読むなんて」「役得だな」「どうせ大した中身でないくせに」「幹事に一任するわ」などの声が乱舞する。

「最後に、武辺君に閉会の辞をお願いします。その後、記念写真と行きましょう」「今回の幹事を決めなければ」と、藤谷が立ち上がって真顔で提案する。

「毎年やりたいわね。出掛ける口実になるもの」「二、三年に一回がいいとこだよ」「早く、幹事を決めましょう」「また、徳さんと

好美ちゃんていいんじゃない。そして誰かが手伝う」「終身幹事を頼むよ」「徳さんじゃなければ、纏まらんよ」「来年、徳さん生きてるかなあ」「まあ、縁起でもないわ」「還暦過ぎてるから、誰にでもお呼びが掛る可能性は平等よ。天のみぞ知るだわ」「判りました。次回も私から声を掛けましょう。それでは、閉会の言葉をお願いします」「この会は正に、徳さんと安作さんの熱意で開かれました。御礼申し上げます。わたしや善太、富ちゃん、貝野さんが少しはお助けしましたが。童心に返って、言いたい事を損得抜きで言い合いました。全てが本根だった筈です。これを機会に、各人が健康に留意され、連絡を取り合い、残りの人生にプラスになるようなお付き合いをしましょう。では、本会が今後盛大になる事を祈念して、一本締めをします。それでは、いよー」

タイミングのばっちり合った音響が暖かい空気を振るわせる。お膳を片付け、思い思いの位置に座ったり、壁際に立ったりして、美和子持参のカメラで仲居が撮る。

「少し暗くてよく写るかしら」「大丈夫、善太の頭で十分だ」「周りがハレーションを起こし、ボケるんでねえの」「じゃあ、離れた場所に移動するわ」「大した顔でねえから、何処に居ても同じだわ」笑いが起こった時にシャッター音がした。

「崩れた表情になってしまったから、もう一枚お願いするわよ」「それでは、一斉に。はい、チーズ」と、徳夫が音頭を取った。

「これで、この場はお開きとしますが、二次会は駅前の喫茶店でゆっくりと自由に語らって下さい」

皆は、衣紋掛けから、コートやジャンパーを外し、着て、階段を下りる。表に出ると、冷気に全身が身震いする。清江は土曜も仕事だからと、車で帰った。

一行は赤ら顔でボリューム調節が出来ず、声を張り上げ、南へ進む。「おい、白十字が閉まってるぞ」「今日は休業日だったんだ」との大声に、「この先のカトレアにしよう」と徳夫が言いつつ、右折し

ようとした。

「カトレアは三年前から自転車置き場になってるぜ。徳さん知らないのかよ」「幹事なのに、調べておかなかったの」「ああ、一次会に熱中して、二次会は成り行きと思っていたから。じゃあ、線路沿いのカラオケに行こうや」

皆の賛同を得て進み、駅前広場に差し掛った。そこで、遠いから、都合があるからと言う女性四人を、再会を約し、見送った。自転車を引いている若顔の刀鍛冶は、「音痴だから帰る」と言い出す。

「何、言ってるんだよ。俺なんかどら声だけど、心を入れて怒鳴ってるだけだ。誰も聞いちゃいない。自分が楽しめばいいんだよ。未だ宵の口だし、明日は土曜日だ。一時間位付き合えよ」緊張が解け、地が出て俺と呼ぶ徳夫は米原の幅広い肩に手を遣り、自転車のハンドルを目的地に向けた。

徳夫が店員と交渉後、十五名がぞろぞろと細い階段を軋ませる。最大の十人部屋に肩を寄せ合い密着する。丸い椅子を三脚追加した。全員満腹のせいか、飲み物だけのオーダーになる。ビール、烏龍茶、コーヒー、オレンジジュースなどを各自口に運ぶ。

トップバッターは徳夫で、千昌夫の『北国の春』を朗々と、手振りよろしく三番まで歌い上げた。

「徳さん、上手いじゃんか」と、勝が目を見張る。

「本当、歌い慣れてるって感じね」「実は、豊乃さん。千春先生の音楽の時間に、ドレミファソラシドの一音階が出来ず、善太と残されたんだ。その時、急に裏声が出て、乗り切って、彼を置いて帰宅したんだ。高校まで、歌の授業には虫唾が走ったよ。詩を作るのは好きだったので、医局旅行の宴会で自作の替え歌を披露したら、やんやの喝采を貰って病み付きになったんだよ。それからは、カラオケテープを買って、同じ曲を何度も練習したものさ。習うより、慣れるの諺を、身を持って体験したよ」「好きこそ物の上手なりよね、確かに」と豊乃が言いつつ、マイクを徳夫から奪い取る。勝つと思うな 思えば負けよと大口を目一杯広げて、美空ひばりに負けじと

気合を入れる。

「かなり、授業料が掛っているな」「低音と高音のバランスがいいわ」「歌いづらくなるじゃない、最初に真打が出ると・・・」「平気だって、何を歌おうかと皆、必死でページを捲ってるから、聞いてないって」などと、皆言いたい事を口に出す。

「赤木も一曲どうだ」「浪曲なら、いけるけど。ここには無いだろう」「奥さんに聞いたぞ。隠れて歌謡教室に通ってたって」「まあ、少しな。接待や宴会で浪曲ばかりじゃ、時代遅れだからな。下手だけど、聞いてくれるか。鳥羽一郎の『兄弟舟』を入れてくれ」

その前に、瀬川暎子の『命くれない』を、病気のデパートとおぼしき藪崎雅代が情感豊かに、しつとりと聞かせた。引き続き、リズム感はまだあまだが、音程が舟の様にふらつく『兄弟舟』が善太によって熱唱された。「・・・熱いこの血はヨー おやじゆずりだぜー」

と三番まで歌い上げた。拍手が部屋中に響く、船が曲がりなりにも帰港できた事を祝して・・・鳥羽一郎が聞いても、涙ながらに応援するだろう、社長の奮闘振りに。富一はさくらんぼ農家でアマチュア民謡歌手だった大泉逸郎の『孫』を、実感込めて丁寧に詠ずる。

「刀鍛冶も一曲歌えば」「『村のかじや』があるぞ」と周りが囁すが、「千春先生に音痴と言われ、それがトラウマとなって歌に恐怖を覚えてしまったから、駄目だ」と、右手を左右に激しく振る。

「小さい頃の記憶は鮮明に残っているわね」「人が落ち込む様な事はズバリと言わない方がいいのよ」「だから、俺は褒め言葉を七割、叱るのを三割にしている」「褒められれば、また褒められようと思つて、一層頑張るのにね」などと、騷や教育問題の発言が続く。

「俺と善太だけかと思つてた、音痴族は。莊ちゃんもそうだったんだ。でも、今じゃあ、俺は歌好きになつてる。音楽掛けながら仕事したんでは、やわな刀になつてしまうけどな。暇な時に聞けば。さつきも言ったように、習うより慣れ親しむ事だ。刀鍛冶の世界も同じじゃないのか」「言われてみれば、そうかもな。少しずつ聞いてみるか」

「次は俺にマイクを寄越せ」と武辺が言いつつ、立ち上がる。前奏に継いで、「まちのあかりが　とてもきれいな　ヨコハマ・・・」と、裏声が髭に囲まれた口元から流れ出て、皆は呆気にとられる。気持ちよさそうな表情は、己の逢瀬場面を思い起こしているのかもしれないと徳夫には感じられた。

「わたしには『東京のバスガール』をお願いします」と小柄でおちよぼ口の博江が手を上げた。

「随分、古い歌だな」「知らないの、石井君。これは卒業の年の昭和三十二年にコロンビア・ローズがレコードデビューした曲なの。その頃、近所の子供に風呂屋の娘、ダニ娘と苛められてた。おだにの姓から『お』抜きの。風呂場に流れていたのがこの曲よ。テンポの良い、明るい曲に随分慰められたわ。自分もバスガールになろうと」「歌は世につれ　世は歌につれと言われている様に、歌からその頃の自分が浮き上がってくるもんな。歌の力は偉大だ」皆の歌に聞き入っていた末谷が力説する。

「・・・紺の制服　身につけて　私は東京の　バスガール・・・」頭の天辺を通り抜けるソプラノが壁に共鳴する。

地元を詠んだ細川たかしのレコード大賞曲『矢切りの渡し』を、身体を前後に揺らしながら、徳夫はやや低音気味にじっくりと味を出す。その後、何人かがマイクを握り締め、最後は全員で坂本九の『上を向いて歩こう』を、肩を組み、大合唱した。店を後にして、駅前広場で再会を期し別れた。徳夫は高砂駅前的大通りを柴又帝釈天の方を目指し、歩き出す。途中、須木に手を振り、赤木、古本と肩を並べる。

百米進み、五差路の金物店の前で、「徳ちゃん、今日は楽しかったよ。また、やってよ」と古本に頼まれ、「そうだな。また、皆の元気な顔が見たいよな」と笑顔で答える徳夫がそこに居た。古本は大きな身体を縮こませ、左手に遠ざかる。右手に二本の四米道路が走る。その一本と大通りに挟まれて、勝組みの赤木社長の五階建て三角ビルが聳える。周辺は三階どまり。駅前には十二階建てマンシ

ヨンはあるが。

「徳ちゃん、お疲れ様。じゃあ、また」と、赤木は言い残し、カードを差し入れ、網入りガラスのドアを広く開け、中に消えてゆく。三十米続くビルの裏側が切れると、百五十坪の二階式立体駐車場となる。これも赤木不動産の所有物。中程に差し掛かると、車の間から、手招きしている坊ちゃん刈りの少年が居る様だ。目を凝らすと、目が鋭く、鼻が高く、口をきりりと閉めた逆三角形顔が三日月の淡い光に浮かび上がる。狩子猛のようだ。ここは、狩子家のお屋敷があった所である。突然、星が流れ落ちたと思ったら、人影は消え去っていた。徳夫は不吉な予感を覚えた。猛君に万一の事が起こったのかも……。勘弁してくれよな、猛君の傍に行つてやれない。その代わり、一期一会と言う言葉があるだろう、会った際には心を込めて全力で友情を確かめ合ってきた、そうだろう、猛君。それでいいだろう。生まれ出ずる時も一人、世を去る時も一人、さようなら、猛君。今年の年賀状は出さないぞ。意識が無いそうなので……。この時、母の臨終の場面が徳夫の脳裏に鮮明に蘇る。

六年前の師走、病院内も一段とせわしくなった。

今月の誕生予定が三組、二階に入院中である。

或る日の黄昏時に、一階奥の院長室の電話がけたたましくなった。院長不在の為、掛けた方が六回の呼び出し音を聞いて切った。みち江は事務室に掛け直し、院長の徳夫を呼び出して貰った。数分の後、徳夫の声がした。「何か用か……」。「今、母さんをお風呂に入れていたら、背中全体が黄色くなっているの、驚いて知らせたのよ」「何だって！ それは黄疸だ。直ぐに向うから待っている」

徳夫は受話器を乱暴に置き、看護婦を伴い、急いで病院を出る。

とりは八十五歳になり、三年前から脚が苦患になって、庭の散歩位しか出来なくなっていた。一週前から微熱があり、徳夫は風邪と診断し、解熱剤を与えていた。まさか、肝臓疾患とは考えてもいなかった。誤診なのか、徳夫の脳内に黒い渦が巻き始めた。

南への道を右折し、路地奥の木戸を開け、玄関のガラス戸を引き、足を入れた。八畳間に居た母を、布団を引いて寝かせた。確かに、白目の部分が黄色く、背中を肌けると誰の目にもそれと判る。

「肝臓から出た胆汁の十二指腸への流れが悪くなり、血液中に侵入して全身を巡っているんだ。正に黄疸の症状だ。何が原因か、明日東大病院の最新の器械で検査して貰う。みち江、検査入院の準備をしてくれ。これから戻って、大学に電話しておく」「院長先生、明日は佐藤さんの予定日ですが・・・」スリムな滝川看護婦が尖った顎の先から事務的な声を飛ばす。

「そうか、それでは青山君に替わりに付き添って貰おう」

自分が一緒に行きたいのは山々だが、これが医師の宿命と今更ながらに身に染みる。ま、大した事とはならないだろうと良い方に解釈した。徳夫は母の手を握ってから病院に戻った。

翌日は、実家の前で往診用の車にとりとみち江が乗り、青山が運転席に着いた。

「宜しく頼んだぞ。内科の桜井教授には病状を伝えてある。何か判ったら、直ぐ知らせてくれ。母さん、こちらのお産が済んだら、駆け付けるからね。大した事ないから」「しつかり、赤ちゃんを取り上げるんだな。こんな歳になったから、どこか悪い所があるのは当たり前前だわ」

幾つになっても息子を心配するとりは、ふくよかな顔を後部座席に入れる。黒塗りの車は静かに発進した。病院に引き返した徳夫は業務に戻る。午後に分娩室に入るが、みち江、青山から連絡が無いのが気に掛る。安産で無事に女の赤ちゃんが出てきて、一安心する。東大病院に電話をしようと思って、院長室のドアを開けた途端、受話器が弾み出した。急いで、それを耳に押し当てた。みち江の声が、精密検査は明日の午後と告げ、徳夫は昼頃行くと伝えた。

翌朝、三階の自室で外出の準備をしている所に、でっぷりと肥えた前島看護婦から電話が入り、二〇二室の三枝さんが急に産気付いたと慌てている。一仕事してから出掛ければいいと思い、分娩室に急

行した。予定日より半月も早く、妊婦は丸顔に油汗を滴らせていた。腹部に超音波を当て画像を観察すると、子宮膜がかなり薄く、子宮破裂の危険が迫っている。帝王切開を即断し、メスを握った。胎盤の炎症と出血が見られ、細心の注意を払い、男の赤ん坊を取り出した。心音と呼吸はしているが、産声がない。育児保育器に横たえ、栄養液を点滴する。母親の腹部を処置して、切開部位を縫合した。三時間の手術から二時間経って、母親が目を覚まし、不安げに保育器を見詰める。

徳夫は病院を離れる事は出来なかった。母さん、御免ね、行けなくてと、院長室で呟く。

午後に入っても、赤子は泣かないと知らされ、頭を抱える徳夫。一週前の画像では異常は無かったのに……。もっと頻繁にチェックすべきだったかと悔やまれる。義弟の青山に院長室で事情を話し、母親の診断結果を聞いて来て欲しいと依頼した。勿論、みち江が傍に居るけれども、専門的な事が判らないからと。

明くる朝、青山副院長は部下に外科外来を任せ、電車で東大に出向いた。京成上野の終点まで、乗ってしまえば二十分程で着いた。裏門から入り、病棟に消えた。

院長室の白衣の徳夫は、白熊の様に رفتり来たりして渋い顔を見せる。青山からの連絡を今か今かと待つ。けたたましい音に一瞬驚いた徳夫は電話器に手を伸ばした。午後二時から桜井教授が検査の結果を家族に話すとのみち江からの連絡であった。新生児の容態を観察中で離れられないから、青山君としっかり伺う様指示する。

昼食のカレーを摂るが、味蕾も不安がり働きが鈍る。食後、机上の新聞に目を通すが、活字が網膜から先に伝わらない。休憩が終わり、机上の書類に印鑑を機械的に押してゆく。電話音が耳元で鳴り響いた。反射的に受話器を取り上げ、みち江だと思った。キーキー声が鼓膜を振るわせる。

「院長先生、院長先生、泣きましたよ、泣きました・・・」「落ち着きたまえ、佐藤君。誰が泣いたんだね」「新生児の三枝翔ちゃんで

すよ」「ほ、本当か、あの児が・・・直ぐ行くから」

徳夫は部屋を出て二階に駆け上り、新生児室に入った。

「この保育器に近付いて下さい」

徳夫は中腰になり、耳を傾けると、弱々しい泣き声が聞こえ、手足をばたつかせている。このまま順調に成長してくれる様に徳夫は祈った。

「業務連絡を致します。院長先生、電話が掛っておりますので、院長室にお戻り下さい」

チャイムから始まる院内放送を耳にした徳夫は、急いで戻った。

「もしもし、丹木ですが・・・」「に、兄さん。は、母が・・・」「みち江か、どうしたんだ・・・」

みち江の涙声に、徳夫の全身に戦慄が走った。

「す、膵臓癌だって言うの・・・」「な、何だって・・・」

「持って、後半年位ですって・・・」

嗚咽交じりに、腹から搾り出すようにみち江は必死に伝える。

「そ、そんな馬鹿な・・・」

徳夫の脳天はハンマーで叩き付けられ、その波紋が脳全体に及ぶ。

みち江が受話器を持ったまま崩れ落ちた。青山が大きな手で抱き起こす。

「もしもし、義兄さん。聞こえますか、もしもし」「・・・あ、

青山君か・・・」

徳夫は唇を辛うじて動かす事が出来た。

「申し訳無いです。一緒に住んでいて気付かなくて・・・」「自分も

同じだ。医者でありながら早期発見してやれなくて・・・」「・・・」

「具体的な病状はどうなんだ」徳夫の声は急かすように、荒くなる。

「先程、桜井教授と恩師の島村外科教授にMRIの写真を見せられ、説明を受けました。膵臓癌のステージは？です。更に悪い事には、

癌細胞は腹腔内全域にまで広がっています・・・」「何だって、それ

じゃ、手術して膵臓癌を摘出しても腹腔内の癌が残るって事か・・・」

微かな望みも断たれたのかと、徳夫は右手の拳を一層強く握る。

「そうなります。癌が膵臓の三分の二を覆い尽くしており、それが胆道を圧迫して、胆汁が十二指腸に排出されません」「胆道に挿管して胆汁を十二指腸か体外に導くと、どの位の延命効果になるんだ・」

・「島村教授の見解は、精々一、二カ月だそうです」「そうか」

徳夫は下唇を噛み、顔を歪める。

「このままで、良くて一年、最悪の場合は半年以内との事です。手術するかどうかはじっくり考えて下さいと言われました」「うん・」

・「末期の膵臓癌で痛みが全然無いのは、不幸中の幸いである。十人中七人が激しい痛みを覚え、大量の鎮痛剤投与をしているとも。挿管手術をすれば、術後患者が若干苦痛を引き摺るので、また高齢である点を考えるとこのまま家族の方が見守ってやるのも一つの方法であるのかもとのアドバイスを頂きました」「よく、判った。帰ってから皆で相談しよう」「あ、それにお義母様に癌告知をするかを尋ねられました、家族で考えますと答えておきました」「何、言ってるんだよ。母に癌と告げても何の事やら判らんよ。それに余命一年以内と宣告すれば、その事で精神が参ってしまう。歳を取って肝臓の働きが弱り、食物を消化する胆汁の出が少し悪くなってる」と伝えればいい」「判りました」

「私から、直接言うよ。みち江が相当参っているから宜しく頼んだよ、青山君。それじゃ」

電話を終えた徳夫は、妻に染めて貰った黒髪に両手の指を指し込み、頭を抱え込む。医者なのに家族の癌を早期に見付け切らなかった自分を責め続ける。この事が世間に知れたらどうなる。身内も守れない医者とのレッテルを貼られる。しかも、妹の亭主も同期の医者なのだから・・。

善神が慰めの言葉を耳元で囁く。今まで、痛みも無く、症状もなかったのだから医者と言えども察知するのは至難の技だ。まして、母上は医者嫌いときておる。

だからこそきちんと定期検診を受けさせれば良かったのだ。自分の診療にかまけてそれを疎かにしていた己を恥じる。御免ね、母さん。

至らなかつた息子で・・・。

徳夫は寢床に就くと、自責の念に駆られ、苦悶苦闘を繰り返す。

一週間が過ぎた頃、残された時間を穏やかに過ごして貰いたいと、徳夫は強く無理やり思う事にした。それは、八十五歳は父よりも二十四年も長生きしているし、母より年上は近所でも裏の佐野の爺さん、角の井田の小父さん、通りの杉本小母さんの三人しかいないと、客観的に考えられたからである。

こうして、徳夫の気分は次第に落ち着きを取り戻してきた。

とりは食欲が薄れてきたので、栄養液を点滴し、腎機能の衰えで尿毒症になるのを防ぐ為、利尿剤を静脈内注射される。

徳夫は母を自分の病院に引き取り、正月を迎えた。

何処も痛くないし、ここにおいても窓の外は電信柱と空ばかりしか見えず、季節が判らんから家に帰りたいと、とりがしきりに言う。ここは暖房が完備されているので、もう少し暖かくなったら、家に移すと説得した。二階は妊婦と新生児の部屋で、三階が外科の入院室と居宅になっている。とりは三階の病室に居る。

「赤子の泣き声が聞こえてくると、お前達が生まれた時の事が蘇ってくる」ととりが微笑みながら喋る。更に加える。

「赤ん坊が生まれ、年老いた者は死んでゆく、これが世の常じゃ。

随分と長く生きてきたもんだわ。弟二人と妹を見送り、思い残す事はねえわな」「まだ、源叔父さんが胃癌を取っても頑張っているよ」

「最後に残るは寂しいわな。源蔵には是非とも見送って貰うんだわ」まるで死を身近に感じ取っている様な口振りに、徳夫の目の奥がジーンとなる。親兄弟、甥、姪の話題に徳夫は耳を傾ける。この様に、母の話を長時間聞いた事は無かった様に思われた。時間の許す限り病室を訪れるが、他の患者さんをしっかりと見てやれと、途中で話を止め、手で出て行けと言う様な仕草を見せる。

ここに来て、血液検査の結果、腎機能が悪化してきたので、残された時間はもう少しと考え、母の希望通り自宅に搬送した。

とりは開口一番、「我が家が一番だわな」と明るく言い放った。

徳夫が雪見障子を開けると、とりはガラス戸越しに八畳間のベッドから、南の庭に目を細める。

「対で植えた梅の紅と白が、よう咲いとるわ」

一羽の鶯が鍛えた喉で、とりの帰宅を祝う。

徳夫の心中は、桜の季節まで持つて貰いたいと手を合わせている。

何時もと変わらぬ笑顔でとりは日々を過ごす。徳夫は一日一回利尿剤を打ちに来て、夕食を摂り、一時間ばかり話をする。

とりは倒れる三年前白内障をレーザー手術で角膜に人工レンズを入れ、前よりよく見えると言って喜び、耳では毎日ラジオの人生相談を聞き、こうすべき、ああすべきとコメントしていたのと思い出すと、徳夫の心に一瞬やり切れなさが走る。

食欲の出ない今は、庭景色の観賞を一番の楽しみにしている。小鉢のサボテンにピンクの花が開き、徳夫はベッドの横にそれを置いた。春が巡りきて、隣のブロック塀の上から桜花が満開になり、微風に舞い落ちる花びらはとりの眼に留まる。

「村山さんとこの桜は何時見ても見事じゃのう」

「そうだね、母さん。内には桜は無いね」「花より団子だわな。父さんの安月給では戦後四人を育てるのは大変だったわ。実家の吉蔵がオート三輪で野菜を運んでくれて助かったがのう。それで家には実の成る樹を植えたのじゃ。梅、桃、柿、蜜柑、柚子だな。花も綺麗で実と合わせ、これが本当の両手に花じゃ。梅酒も小さい頃から与えたせいかな、皆、母さんに似て酒好きに成ったわな」「好きを通り越して、妹達はザルだよ、母さん」

とりは幾分顔にむくみが見られ、大きな眼が奥眼になっている。

「足先が少し痒いわな」

布団と毛布をまくると、とりの足はパンパンに膨らんでいる。

「尿の出が悪いので、水が足に溜まっているんだよ。そのせいなんだ。だから、薬で尿の出を良くしてる」「長いこと、身体を使ってきたから、くたびれたんじゃろ。仕方のねえこった」

徳夫は足をさすり始める。

「気持ちがいいがな。ありがとさんよ」「母さん、また明日来るから」「そうか。お前も身体を大事にするだな。こうなってからでは何の楽しみも無くなるでな」「大丈夫だよ。母さんみたく規則正しい生活をして八十の山を越えてみせるから。母さんは九十を目指さなくちゃあ」「もう、無理だわな。大分弱ってきたわ。長い事ねえな。みんなにもう一度会いてえ」「判ったよ。母さん。源叔父さんや喜美ちゃんに来て貰うから」

徳夫は涙声になり、母のむくんだ手を握り締める。

後ろ髪引かれる思いで、徳夫は病院に戻った。

翌日の午後には、樋口源蔵が息子茂実の車で到着した。写真の水兵姿の凛々しい影はどこえやら、頬がこけ、目玉だけがギョロつき、倅の肩に手を置き、ソロリソロリと歩む。徳夫が食堂の椅子をベッド脇に運び、源蔵はそこに腰を落す。三年振りの対面に、見詰め合い、両手を結ぶ。互いに無沙汰を詫び、とりは駆け付けてくれた事に感謝する。

「源に会えたで、嬉しいわな。先に行ってるから、お前は後でゆっくり来いや」「そ、そんな、姉さん。大丈夫だ、医者徳ちゃんが付いてるでねえか。長生きして貰わねば、おらの生甲斐も無くなるだ」

面目ない自分に恥じ、徳夫は俯く。

「何、気の弱え事を言ってるだ。そこに連れ合いの妙さんがおるだに」

二人はひとしきり、青春時代の野良仕事の辛さや愉しさを語り合う。「母親が五人目を産んで、産後の肥立ちが悪くて三十八歳で亡くなって、おらが四人の弟妹の母親代わりになったわ。丁度十五の時やった。他人に負けん様頑張ったもんじゃ」「それを聞かされて、姉様には頭が上がりなかった」「嘘付けや。競輪、競馬の博打は止めんかったくせに」「十年位ですっぱり手を出さなくなったが・・」「まあな。心を入れ替えて、性根を入れて働き、土地を買い、家を建てたのは立派だったわな」「妻や子供達が良く稼いでくれたお陰

なんだわ」「そうよな。一人の力はたかが知れている。家族の協力が大事だわな。最低限世間様に迷惑を掛けちゃあならんぞ」綺麗に禿げ上がった弟に、とりは言い聞かせている。

別れ際、とりは源蔵の顔をあの世でも忘れまいとするかの様に、眼を何回も回転させ、網膜に焼き付ける。

木戸が閉められた時、とりの頬に一滴が流れ落ちた。

二日後の土曜日は、前日より気温が上昇し、南風が頬を寄切る。

旧姓窪田、現姓棚橋喜美子が訪れ、八畳間に父親似の濃い眉の下がり目を入れる。

「お母さん、御免なさい。授業があつたので、遅くなって・・・」「何、いいんだな。来てくれて嬉しいわな」小柄な喜美子はベッドに近付き、とりの手を握り締め、頬ずりする。

「学校の授業のかたわら、泳げないのに水泳部の顧問をしていて、中々忙しいの。大分ご無沙汰してしまって・・・」「そりゃあ、お互い様だわな。お前の母さんが亡くなってどの位経つかのう」「今年の十二月でまる五年よ」「早いもんじゃ。お前の母さんが夢枕に立って呼びよるんじゃ」「そんな事を言っちゃあ、嫌よ。お母さんにはもっとと長生きして貰いたいの」「ありがとよ。でもな、自分に判るんじゃよ。父さんも呼んでるわ」

喜美子がとりをお母さんと呼び掛けるには訳があつた。とりの妹のはつが、小太りでバイタリティ溢れる亭主と全国を駆け巡り、蜂蜜を採取していた頃、足手纏いになるからと、サラリーマン家庭のとりは喜美子を二歳から四歳まで預けていた経緯がある。

「小学校の高学年まで、ずっとお母さんに捨てられたと思ってたの」「悪かったのう。お前に弟が出来たで、養女にすると約束してたんじゃないが、その一カ月後徳夫に恵まれて、止む無くお前を本当の母親に返したんだわ」「お母さんの子供だったら、どんなに良かったかと何度も考えたわ。でも、同僚の貰いっ子の彼との結婚を両親に大反対された時、お母さんが祝福してくれ、みち江ちゃんと友達による励ます会に出席してくれたわね。あの時、心から二人の母を持つ

て幸せだと思ったの。有難う、お母さん」「そんな事もあったわな。その時は目先の事に必死で生きおるが、振り返れば全て神様、仏様のお導きだわ。喜美子も身体に氣い付けて、われ以上に長生きするんだわな」

どちらが見舞いをしているのかと、喜美子は面食らった。生き生きしたとりの言葉遣いに、何処が病氣なのかと不思議になる。喜美子は二年前京都の修学旅行中に疲労で倒れ、救急車で運ばれて初めて老いを感じたと。しかし、七十歳停年の私立高校なので、後十年絶対に勤め上げると言い切る。喜美子は社会科の教師で、子は居ない。だから、教え子皆が子供だとにこやかに言う。卒業後、会いに来てくれるのが楽しみだとも。喜美子は顔をとりの方くよかな胸に埋め、第二の母の温もりを顔中に貰った。

「また、お邪魔するから、お元気で・・・」小さな手を振り、障子の外に消え、玄関を後にした。

駅への道すがら、徳夫から後一カ月持つかどうかと聞かされ、ハンケチで涙を拭う。

「お母さんをよろしくね」喜美子は蚊の泣く様な声になり、徳夫がその撫で肩を抱き、駅に向かい、見送った。

翌日曜日に、徳夫の九歳下の妹芳子が警察官の旦那と一人娘を連れて、大阪から掛け付けた。芳子はそのまま残り、一週間通りの面倒をみた。大柄な芳子は栄養液、尿パック、オムツを交換したり、上半身をタオルで拭く。父親の血を色濃く引き継いだ故に、無駄口を叩かず黙々と作業をこなす。時折、手で目頭を拭っている。

最後の日には、芳子は母の足をさすり、両手にむくんだ掌を包み、「母さん、色々心配掛けてきて済みませんでした。有難う御座いました」と、嗚咽交じりになった。「何を言うだな。親が子供の心配をするのは当たり前だわ」「母さん、言う事を聞かない子供を持つて親の苦労が判ったのよ」「みな、順送りじゃよ。しっかり、家庭を守るんじゃ」

芳子は頷きながら手を離し、玄関の戸を静かに開け、外に出た。

新幹線の車中で、母と過ごした二十四年が鮮烈に蘇り、瞬時に通り過ぎる近景や遠景も只目のレンズに投影するのみ。涙に思い出の映像が滲む。

その後、徳夫は母方の親戚と父方の親族に一週間の間を空けて電話で連絡し、母との最後の生前別れをお願いした。とりも喜び、昔話に花を咲かせる。皆は外に出ると、血色も良く、頭の回転も素晴らしいのに、何故最後の別れかと訝しがる。癌細胞がじわじわと腎臓を破壊しているからだ、徳夫は説明する。

五月を迎えると、とりの腎機能の数値は極度に低下した。庭では、橙色のサツキと紫のツツジが咲き乱れ、とりの眼を愉しませる。隣家の鯉幟が威勢良く青空を泳いでいる。倅の徳太郎と嫁の朋江、それに孫の陽子と明美がとりと言葉を交わし、手を握り合う。次いで、みち江と青山登がとりに言葉を掛け、掛け付けた別居中の一人息子の大蔵省職員茂、妻の慶子と長男潤が代わる代わるとりに握手を求める。孫、曾孫に囲まれたとりは、「みんな、有難うよ。仲良く、明るく暮らすんだぞ。世間様には絶対に迷惑を掛けるでねえ・・・」と言葉が途切れると、急に呼吸が荒くなった。徳夫が血圧を測ると、上が五十の下が二十であり、急遽アドレナリンを静注した。しかし、呼び掛けても反応せず、意識はない。酸素マスクを被せると、胸の上下動が緩やかになった。一時間が経過、二時間が過ぎ、柱時計が正午を知らせ始めた。とりの顔がガクツと右に傾き、口から青汁が流れ出す。青山が瞳孔反射、血圧を入念に調べ、「ご臨終です」と、低い声を出した。周りのすすり泣きがとりを包む。

母さん、良く頑張ったねと徳夫は呟いた。

青山は、「僕は小学二年の時、両親が離婚し、父に引き取られお婆さんに育てられた。だから、とりさんを実の母親と思って甘えさせて貰った。本当に有難う御座いました。お母さん」と、目を真っ赤にして心情を吐露する。

「母さん、長い間、お疲れ様でした。ゆっくりお休みなさい。父さんに会えるかも知れませんか・・・」

みち江の白い手はとりの温みのある顔をさすり、声に感謝の念が籠もる。

孫や曾孫達は、厳肅な人の死に立会い、身じろぎ一つしない。

「お婆ちゃんは若い頃、母親を早くに亡くし、弟妹四人の面倒で苦労したけれど、亀太郎爺さんと結婚し、僕らを生んでくれた。そして、孫や曾孫に囲まれて、幸せな人生だったと思うよ。八十五歳は長生きだ。皆、笑って天国へ送ってやって欲しい」徳夫は家長として、皆に頼んだ。一同は涙目で首を縦に振る。

五月五日の子供の日に息を引き取ったのは、私への当て付けなんだろう、母さん。心で問うた。父さんに似ず、信心深い息子が母さんの命日を直ぐ忘れるからだろ。祝日にすれば馬鹿な脳にも刻印されると思ったんでしょ。母の笑顔が眼に浮かぶ。

この事は皆には喋らない、威厳がなくなるので。

「さすが母さんだわ。子供の日に亡くなるなんて。世事に疎い兄さんを良く観てるわ。しっかり覚えて、命日に線香の一本も上げてくれと言う事よ」

「それはないよ、みち江・・・」「だってそうじゃない、父さんに自分から線香を上げた事ある・・・何時だって、わたしが催促してるわ。墓参りや法事の段取りもしてるし。じゃあ、父さんの立日を知ってる・・・」「真夏の八月十二日だ」「死んだ年は・・・」「・・・」顔を歪め、横を向く徳夫。

「ほら、覚えてないじゃない、昭和五十二年よ。ちゃんと覚ええてね」「どうも、頭に入れても直ぐ忘れてしまう。葬式の月日は照りつける太陽の下で、柿の木の油蟬が一斉に騒ぎ出し、正座で焼香の人にお辞儀をし続け、痺れた印象が強く残ってるから覚えてるんだ」「父さんが怒ってるわよ」

「判ったよ」と徳夫は言い、口の中でぶつぶつと五十二年を繰り返す。徳夫はみち江には何かにつけ、歯が立たない。それも、専門馬鹿だから仕方がないと、徳夫は心の中で自己防衛する。

翌日は友引きで通夜を避け、その次の日に行なった。

明くる日の葬式も五月晴れで、徳夫は喪主として、参列者に謝意を表した。

一週間が過ぎた頃、母の実体がこの世に存在していない事を心から感じた。人は生まれ、死ぬ。父と母の単純相加平均の七十三歳を超えれば御の字で、是非とも母に追いつきたいと母に誓う。

葬儀から一カ月後の午後七時過ぎ、居間で夕刊の字面を追っていると、朋子が顔を渋くし、狩子猛から電話だと言う。何の用事かな、選挙の噂も無いのにと思いつつ、黒い受話器を受け取る。

「もしもし、お電話替わりまして丹木徳夫ですが・・・」 「おう、徳さんか、水臭いな・・・」 「何が・・・」

「お母さん、逝去されたんだって。知らせてくれればよかったのに。善太に今日電話した時、聞いたよ」 「ああ、五月五日に膵臓癌で亡くなった」

「それはそれは、ご愁傷様でした。お悔やみ申し上げます。小母さんにご厄介になったので、お線香を上げさせて貰おうと思って電話したんだ」 「だって、脚が悪いんだろ・・・」 「杖の助けを借りれば、何とか行けるさ。是非とも拝ませて貰いたいんだ」

側のソファアーに浅く腰を掛けている丸目の朋子が手招きしている。徳夫は送話器を手で塞ぐ。

「何か、用か・・・」 「貴方、狩子さんに来て貰うのは止した方がいいわよ。武憲さんの一件があるし・・・」 「あれは武憲にも責任の一端はあるんだし。親友に線香を上げて貰う位いいだろうよ」 「後で揉めると困るから、みち江さんや芳子さんに聞いてからご返事した方が良いわよ、貴方」

電話線から猛の声が転がってきた。 「もしもし、徳さん聞いているのかよ・・・」 「ああ、聞いているよ」 「明日、行きたいんだが、都合はどうかな」

来て、直ぐ帰って貰えばいい事だし・・・。待てよ、またみち江に何だかんだと何時までも愚痴を言われるのも癪に障るし・・・。ここは朋子に従い、妹に確認を取った方がベストだと即座に判断した。

「来て貰えるか、妹にも相談してみるよ」「何でだよ。徳さんが喪主なんだろう。徳さんがうんと言えればいい事だろうよ」「・・・。武憲の事で妹達は猛君を敬遠してるみたいなんだ」「少しは責任を感じるけれど、小母さんが亡くなったんだから最後のお別れをしたいんだ。頼むぜ、徳さん」「そりゃあ、判るけどさ。側に居る妹達とこの事で仲違いしたくないんだよ」「じゃあ、どうすりゃあ、いいんだ・・・」猛の声は語尾が尖ってきた。

「悪いけど、一日か二日ばかり待ってくれ、妹と相談するから」「判ったよ。良い返事を期待してるからな。徳さんは家を継いでいるんだから」「では、後で連絡するから」徳夫は受話器を戻し、油汗を手で拭った。

「貴方、その場で断ってしまえばそれで済んだのよ」「今後、彼と絶交する覚悟があればそうしたよ」

「そうすればいいのに」「そう出来れば苦労はないよ。幼馴染み四人組みの一人なんだ。善太、富ちゃんそれに猛君だよ。皆個性があり、掛け替えの無い親友なんだから。彼らに会っていると、心が休まる」「貴方の友達との付き合いの深さは判らないけれど、家族や親族の絆を壊してまで友達と交際するのは止めて下さいね」「そんな事位、承知しているさ。だから猛君とは外で会ってるんだ」「歳のせいかな、この頃、何かにつけ怒鳴るようになってきたんですもの。ごたごたを起こしては嫌ですから」朋子は曇り顔でそう言い残すと、お茶を淹れに台所に向かった。その間、徳夫はみち江に連絡を取った。問題を先送りしては、明日の業務にも差し支えらる考えたからである。みち江が電話口に出た。猛からの用件を述べると、即座に反応される。

「兄さん、何考えているのよ。母さんが喜ぶ訳無いじゃない」怒りをあらわにした甲高い声が徳夫の耳介を突き抜ける。「・・・。だって、猛君は幼友達だし、線香を上げて貰っても良いじゃないか・・・」
「私は嫌ですからね。もし、呼ぶなら兄妹の縁を切らして貰いますから。芳子だって嫌がってるのよ、猛さんを。嘘と思うなら、聞い

てみたら・・・」

「何を言うんだ、猛君は俺の友達だ。線香の一本位で、母さんは騒がないよ」

みち江の言い草に徳夫はコチンときて、突き放すように高飛車になった。

「それじゃあ、兄さんだけ会えばいいじゃない。家には入れませんから」普段、温厚なみち江からの最後通告に、徳夫は少しひるんだ。「勝手にしろよ」と、徳夫は頭に血が上ったまま、受話器を乱暴に戻した。「貴方、何もそんなに大きな声を出さなくとも・・・」少し前に、ドアを開けて入室した朋子がお茶を座卓に置きながら喋った。「これは俺の地声だ」「はい、どうぞ、お茶を召し上がれ」

小刻みに震える手で、徳夫は寿司ネタの魚偏が詰まった大きな湯飲み茶碗を持ち上げ、顎を天井に向ける。一回、二回と・・・。朋子は渋い顔で、徳夫の仕草を見詰める。じっと待った。

「みち江の奴、猛君が来る事に反対なんだ。その上、彼を嫌っているとも・・・」「みち江さんの心の奥底は窺い知れないけれど、聞いている範囲ではみち江さんや芳子さんが狩子さんの顔を見たくない気持ちも判るわよ。貴方が長い間育んで来た他人には判り得ない友情もあるでしょう。でも、友達の中で兄妹喧嘩はして欲しくないわ」

「判ってる積もりでも、売り言葉に買い言葉で、つい怒鳴ってしまったな」お茶が効いているのか、徳夫の心は平らかになっていた。

「きつと、みち江さんは狩子さんの件で何故叱られるんだろうと不満の筈よ」「そうだな。冷静に考えれば、猛君が武憲の件の切っ掛けをつくったんだからな。ま、仕方ないか・・・。私が今まで通り外で会えば済む事だしな」「そうよ、貴方。そうすれば兄妹で波風立たず、仲良く暮らせるのよ」

「何も、猛君援護の為に目くじら立てて妹達と口喧嘩する必要はないな。人は誰しも馬が合う、合わないの相性と言うものがあるからな。直ぐ、猛君に連絡するか」「貴方、狩子さんの気分を壊さない様にお願ひしますよ」「そりゃあ、無理だろう、何しろ断りの電話

なんだから・・・」

徳夫は薄茶色の開襟ワイシャツの胸ポケットから紺の携帯電話を取り出し、親指で狩子の電話番号をスクロールして押した。

「もしもし、狩子さんのお宅でしょうか」「おう、徳さんか、待ってたぜ」「猛君、言い難いんだけど、妹達が武憲の一件があったのでどうしても駄目だって言うんだ。勘弁してくれよ。私が今まで通り外で会うからよ」「武憲君の場合は、彼の自己責任じゃあないか。徳さん、何時だったかそう言ってたじゃないか」「そうだけだよ。妹達はそう取っていないんだ。今回は手を引いて欲しいんだ」「小母さんにお世話になったから、心から手を合わせたいんだ、判るだろう、この気持ち」「判るけど、妹と喧嘩してまで猛君に来て貰う訳には行かないんだ」「徳さん、友達甲斐が無いなあ。一本上げたら直ぐ帰るさ」「頼むから、止めてくれないか」徳夫の言葉も上擦る。

「そんなに言うなら、徳さんとはもう絶交だぞ、いいのか、考え直してくれよ」

猛の細くて高いキーとは違って、野太い声調が電話線の向うで聞こえる。猛、もういいだろ。徳さんが嫌だと言ってるんだぞ、しつこいぞ。だって、兄貴・・・。しょうがないだろ、猛。断られたんだから。もう、止めとけ。

遣り取りの相手が猛の兄の剛一である事は、声質から徳夫には直ぐに判った。

「もういいよ。もうこれ切りだ、残念だけどな」

「そ、そんな、猛君。考え直してくれよ」「もう、いいって」ガッチャンとの音が徳夫の鼓膜を強く振動させた。徳夫は親友を一人失い、両肩を落した。その後、布団の中に入っても、猛との断絶の場面を思い出し、頭の中は曇り空で今にも雨が降り出しそうであった。これで良かったのだ。家族や兄妹の絆を切り裂いてまでも猛君の心に飛び込んで行く事は出来なかった。判ってくれよ、この心情を・・・。

夢と現の世界をさ迷い、何時しか夢の淵に引き摺り込まれた。

二年後に、猛の電話を受け、あの時は勢いに任せて絶交と言ってしまったが、よくよく考えると、親友は徳さんしか居ない事が痛いほど心に染みたので、謝るから仲直りしてくれと頼まれた。

私は喧嘩別れした積もりはなく、一方的な宣言で今でも親友だと伝えたと猛は涙声になり、その心が電話線から流れて来る。

これ以来、年賀状も復活し、男同士の逢引も再開されたのだ。

ネガの秘密

回想から現実世界に戻った徳夫は川沿いの通用門から入り、合鍵でドアを開き、エレベーターで三階に行く。寝室のダブルベッドに横たわり、朋子の横顔を観る。微かな寝息が聞こえる。

今晚は珍しく呼び出し着メロが鳴らなかったなあと思いながら瞼を閉じた。

翌土曜日は風も止み、小春日和となった。午前中は外来患者を診察し、昼過ぎには入院の妊婦並びに新生児と母親をチェックする。

夜九時過ぎから書斎のパソコンに向かい、徳夫は都合でクラス会に参加出来なかった岡島千春先生、小熊一雄、前川照夫、榊原三千子（現姓、坂本）、田口久子（薮内）、萩尾悦子、鰐辺和歌子（周）の為に、クラス会、二次会の内容や雰囲気の詳細に文章にした。

翌日は番地や電話番号の誤りを二、三訂正し、名簿の修正版を作成する。そこには、四十七士全員の氏名、改姓、郵便番号、住所、電話、携帯電話、FAX、Eメール、出欠の欄があるが、大分歯抜けとなっている。表紙は大吉小学校一九五七年卒業六年一組クラス会及び還暦会の表題の下に、日時、場所、司会者を打ち、式次第と続く。二枚目は、先生をトップの別枠にした男性陣の名簿で、三枚目は女性陣となる。四枚目には一、六倍に拡大コピーした卒業写真。真ん中先頭に長い顔に黒眼鏡の谷本丈夫校長先生と岡島千春先生が椅子に座り、階段状に余所行きの表情が並ぶ。右半分が男性で、最前列の善太は坊主頭に眉毛が濃く、詰め襟学生服がダブつく。中段の猛は縦縞セーターを着て、ふさふさ髪の方ちゃん刈りで、彫りが深く、精悍な面構え。横に居る富一と勝は短髪ですまし顔。その後徳夫はくりくり頭の卵顔で、五つ釦のジャンパーがパンパンに張っている。

女性の最前列には、校長先生の左隣はお下げの野村美和子が格子縞のスカートに両手を膝の上に揃え、一人置いて漫画のサザエさんに

似た田口久子、端はこけし人形そっくりの夏村清江、中段には男装の麗人然とした藪崎雅代、最上段には芸者になった大形裕美子の膨らんだ胸に垂らしたお下げが見える。頭上では正面玄関の『良い子の鐘』が皆を見守る。

徳夫が一人ずつ顔を凝視すると、奥深い記憶細胞の引き出しがゆっくりと開いて、彼らが飛び出し、生き生きと脳を走り回る。そんな事もあった、あんな事も有ったなど。

徳夫はパソコンの手を休め、目を細める。右の空欄に、当日欠席した左巻信也のとっくりのセーター姿がある。中学生へと巣立つ直前の、三年間同じ釜の飯を食った友人達がそこに居る。全員、唇を真一文字に結び、何か決意を秘めた鋭い目付きである。ショートカットの千春先生も同じ表情をしているが、それは別れの辛さだったのではと、今想う。

次の頁は写真に対応する氏名。

六枚目は、音楽室での合唱、合奏の写真である。音楽を得意とした千春先生が正面で後ろ向きにピアノを弾き、その後方に徳夫、石井伸之、今滝健、古本力、大形裕美子、田口久子、前島豊乃らが口を開けている。左手には立て笛を吹く一団が居て、最前列に居る猛と富一が頬を膨らませ、両手の指で穴を押さえる。右側には、眼を丸くしてハーモニカに吸い付く集団が居て、勝、橋田弘三、藪崎雅代の懸命な表情が見て取れる。左上には、達磨ストロブが撤去され、そのブリキの煙突が写っていた。

最後の頁には、先生方からの寄せ書きがあり、千春先生は、『楽しいとき　そしてさびしいときにも　歌いましょう』と、したためる。二組の水戸照行先生は『考える人に』、三組の藤井益男先生は『自己に忠実であれ』で、校長は『日々新たに』を記す。この他、『健全な身体に健全な心やどる』『いついつまでも　お元気で』『将来の大成を祈る』『いつも心に春風をもつ人に』『お元気で』『一人は万人のために　万人は一人のために　生活できる社会になりたいものだ』『御卒業おめでとう』『皆さんの一年の頃を忘れないわ

それはそれはかわいい人達でしたもの』『世界人類を愛せる人に』
『いつまでも仲良くね』『考えて実行し　そして又考えよう』『が
つしりと大地に足ふみしめ　子どもらよ　伸びるんだ』『お元気で』
『さようなら』『明るく素直に』『おすこやかに』と激励して下さ
った先生方。鮮明に瞼に浮かぶ先生とぼんやりとした輪郭しかない
先生もおられるが、この内七割近くは鬼籍に入られているかと思う
と、徳夫の目頭が熱くなる。

四日後に野村美和子から焼き増しされた集合写真が送られたので、
眼の悪い人も見える様に拡大コピーもとった。参加者には、修正名
簿、収支報告書、写真とコピーを郵送した。近所の友には手渡しや
自宅のポストに入れる。また、都合で参加出来なかった友には、更
に名簿を修正した小冊子とクラス会の報告文章を付け加えた。

千春先生には祝い金を頂いており、幹事の安作好美の花店からシク
ラメンを購入し、呉服屋から赤富士と歌舞伎女形の趣味の手拭いを
買って、資料一式とそれに徳夫の卒後から現在までの喜怒哀楽のエ
ピソードをパソコンで急ぎ打ち、それらを一緒に宅配便で送った。

シクラメンの花弁は紅色で、下部に僅かに純白が混ざり、深緑の葉
とのコントラストが見事で、しかも一株に十数個の花びらが寄り添
い豪華である。

クラス会の後処理も全て完了し、徳夫はやったと言う達成感で身震
いした、喉の奥に小骨が突っ掛かっていた様な気分が一掃されたか
ら。但し、猛が来られなかったのは至極残念であった。善太、富一、
勝を始め、参加者の約七割は近所に住んでいて時々道で遇う。だか
ら、わざわざクラス会を開く必要性を少なくとも徳夫は考えていな
かった。だから、猛などの様に他の地域に引越した人の為だった
のにとの思いが深い。『親孝行をしたい時には親はなし』とはよく
言ったものだと感心する。正に、猛に当てはまる。でも、参加者全
員が喜び、毎年でも良いから会いたいと言い出す始末。それでは話
題も無いだろうから、三、四年後位にしようと徳夫が提案すれば、
皆な老けてきたから世の中におさらばする人も多くなると反論され、

大笑いとなった。二、三年後開催するまで自己健康管理をして身体を持たせるようにしようと言う事になったのだ。

翌日の夕食後、居間で寛いでいると、携帯電話の着メロが流れた。もしかしたら千春先生かとも思いながら、耳に当てる。「もしもし・」。「もしもし、徳ちゃん」昔と変わらぬ甲高さが加わったソプラノが転がって来た。「ええ。千春先生ですね」

「素敵なシクラメンを送ってくれて有難う。しっかり、丹精するわ。四時頃宅配便が来たんだけど、お仕事中心と思って今連絡を差し上げたの。電話しても大丈夫・」。「平気ですよ。丁度、夕飯を済ませて休んでいる所ですから」。「そう、良かったわ。貴方方がクラス会を始めた頃は、主人に車椅子で病院に連れてって貰い、つまずいて胸を打った所を診て頂いて帰る時だったわ。会えるのを愉しみにしていたのに・」。脚も弱って、顔もお婆ちゃんになって、若くて元気な皆さんに見せられないと思ったの、御免なさいね・」。一段と涙声の度合いが強くなる。

「先生、誰しも歳を取れば白髪や禿げたり、しみ、そばかす、皺が出来ますよ。私だって、白髪染めで黒々してますけど」。「そうね、徳ちゃんが送ってくれた写真の拡大コピーに橋田君が白髪で頬がこけて、内の主人とそっくりなのに驚いた。皆さんの中にも歳以上に老けた人も居るのね。私も考えを変えなくては少し思うようになったわ。徳ちゃんのお陰で」。「そうですよ。早く元気になって下さい。何時でも、先生からお呼びが掛れば素っ飛んで行きますから」。「有難う。でも来年八十の大病に乗るのよ」。「母は八十五歳までびんぴんしていました」。「そう、わたしも頑張ろうって気になったわ。貴方のお手紙を読んでみたら、順風満帆だと思ってたのに、弟さんの事で色々辛い事もあったのね」。「人は生かされていて、運命や宿命に縛られていると思っています」。「まあ、徳ちゃんはお医者さんなのに、仏教者みたいね」。「人生を振り返ってみると、そう思えば辻褄が合う事が多いんです」

「クラス会や二次会の様子が臨場感に溢れた描写で、一人一人昔と

今の顔を見比べて、あの頃が涙の奥にくっきりと浮かんで来て、懐かしさが込み上げて来たわ。本当に有難うね。一生の宝物にする」

「そうですか。そんなに喜んで頂けて、クラス会を開いた甲斐がありました。実は十月に開催の予定でしたが、自治会の総務部長をしている善太から誘われて、八部の副部長をしており、今回国勢調査員を頼まれた為、約一カ月遅れてしまったのです。先生に寒くならない内にと考えていたのですが・・・」

「そうだったの。昔と変わらず、徳ちゃんは優しいのね。先生が見込んだ通りの人物になってくれたわ。良かった。昔、徳ちゃんが家に泊まってくれたわね」「ええ、覚えていますよ。信用金庫を経営なさっていた細身のお父様は読書家で、日本や世界の文学全集それに落語全集も本棚にびっしりあって、何冊かお借りしました。お母様はふくよかで、優しい目をしていて、何度か手作りの料理をご馳走になりましたから。六年生の時、お父様がお亡くなりになって、一人っ子で寂しくなったからと、私と富一君が呼ばれて泊まった事を昨日の様に思い出します」

「あの時は有難う。早いものね、あれから五十年近く経つわ。お婆ちゃんになるのも仕方ないか」「そうですよ。私達だって直に先生位の歳になるんですから」「残念だけれど、歳はどうもがいても縮まらないのよ」「その分、先生は先に生まれて私達が知らない事を経験してるんですよ」「そうね、徳ちゃんの言う通りだわ。大分、長電話して御免なさい。つい、昔を思い出して・・・皆さんの事を良く知って、これから頑張って生きていく希望が持てたのよ、有難う。奥様や妹さんにも宜しくお伝えして。それでは、益々の活躍を期待していますからね」「判りました。どうぞ、何時でも気が向いたらお電話下さい」「有難う。さようなら」「御免下さい」

向こう側で、受話器を戻す音を聞いてから、徳夫は静かに携帯を折った。

一日でも長く元気で生きて欲しいと願う。

二日置いて、朝方メールを開くと、末谷君、野村さん、鰐辺さんから郵便物の到着とお礼のメッセージである。参加出来なかった鰐辺

さんは横浜中華街の周さんと結婚し、日々お店で忙しい由。写真を見ても中々皆さんを思い出せないとも。その内、会いたいとも加えてある。篠藤さんからは電話でのお礼があった。

翌日には、末谷君と野村さんからの携帯が立て続けに鳴り、当人が驚いた事に千春先生からの連絡であり、お互い写真を見ながら三十分近く昔話に花が咲いて、自分も先生も大変喜んだと言う。愉快的輪が広がっているんだと思うと、徳夫の胸は弾んだ。また、必ずクラス会をやろうと、皆の笑顔が背中を押す。

卯月八日〈土〉、春風が頬に心地よく、徳夫は弾む心で今滝健のマイクロバスを待った。予定通り午後一時に合図のクラクションが三回鳴り、徳夫は薄い肌色のポロシャツに薄い青色のジャケットを羽織った姿で玄関のドアを開ける。

「やあ、今日は、健ちゃん。悪いな、会社の車を出させて」「徳さん、そんな事はねえさ。まあ、いいから早く乗れや」

健は格子縞の茶のジャケットでハンドルを握って、坊主頭を徳夫の方に振った。徳夫が先頭座席に腰を置くと、発進して直ぐに停まった。そこで善太を拾い、大通りに出て、四つ角の手前に一時停車して、お稲荷さん、海苔巻、太巻き、赤飯などを買い込んだ。花屋で、花束を持った安作好美を乗せ、酒屋では缶ビール、酒、ジュース、烏龍茶やつまみを積み込み、富一もシートに身を沈める。

踏み切りを渡って、緩やかな坂を上り切ると、富士山が遠くに浮き上がっている。中川の水面が光の反射で煌く。白い水鳥が憩う。車は高架線を潜り、一路西へと進む。ウィーンと姉妹都市を結んだ葛飾区が建ったシンフォニーヒルズのビルの前ではモーツァルトがバイオリンを持つ姿が眼に留まる。更に進行し、線路を渡り、近くの逆Y字路の股にそり立つ五階建てビルの正面にマイクロバスは停車した。一階にはスーパが入っており、北側のエレベーターホールに運転手の健以外が足を踏み入れる。誰一人このビルになってから訪れた者はいないと言う。案内板の三階の所に岡島光男と岡島信

彦の名前があり、集合郵便受けの三〇一号には岡島光男、千春が併記されていた。皆は部屋の前に着き、インターホンを押し、出迎えを伝えた。ドアが引かれ、ふさふさの白髪頭で、眼鏡の下の頬骨が浮き出た老人が首を伸ばす。

「お迎え頂き有難う御座いました。私は夫の光男と申すものです。妻が首を長くして、心待ちに致しておりました。どうぞ宜しくお願い致します」

「初めまして、私が丹木徳夫で御座います」 「お噂はかねがね伺っております」

徳夫は善太、富一、好美を紹介する。

「先月、ぎっくり腰をやりまして、妻の車椅子を押すところではなくなったので、今日は娘が付き添います」 「そうですか。お身体を大切になさって下さい」

奥の方から、涙の混じったソプラノ声が聞こえてきた。「あーら、徳ちゃん。有難うね」

手を支えられ、そろりそろりと歩む老婆の姿が徳夫の眼に飛び込む。最後に会ってからこれ四十年近くになる。三十代後半の千春先生の面影と目の前の姿が一致しない。電話の明るいトーンは昔となら変わらなかったのと思う。現実を回避して、澆刺な美人先生のイメージのままで終わらせた方が良かったのかと咄嗟に自問自答する位、変わり果てていた。腰が曲がり、縮み、頬が大分こけている。母は八十五歳まで色艶よく、ふっくらしていた。それに比べると・・・。待てよ、父の母はこんな感じだったと思い出す。母が特別若作りだったのかも・・・。日々一緒に暮らしていたからその変化に自分の脳が対応して、母の老化を受け入れていたのかも知れない。十人十色で、近所の高齢者を見回しても、若々しい人とくたびれた爺さん、婆さんがいるなど自分を納得させた。

「先生、長い事ご無沙汰致しておりました。善太、富ちゃん、好美さんも来ましたよ。健ちゃんは車で待機してます」 「そう。皆さんの活躍は噂で聞いておりますよ。みんな立派になられて、先生、嬉

しいわ。昨年は胸を打ってクラス会に行けなくて御免なさいね」「仕方ないですよ、先生」善太が手を伸ばし、血管の浮き出た千春の細い手を握る。

「今日は、長女の千夏に面倒を見て貰いますので、皆さん宜しくね」「千夏です。母はこの日を指折り数えて待ち望んでおりました。皆さんのお陰で、眼に輝きを取り戻し、にこやかな顔になりました、本当に有難う御座います」「じゃあ、行きましょうか」「済いませんね、お茶も差し上げなくて」「いいんですよ。先生。皆な待ってますから」

光男が折り畳み式車椅子を通路に出して、セツトした。千夏が誘導し、座った千春のスカートの上に花柄の膝掛けを置く。その時、子供が二人、通路に出て来た。

「この子が孫の光太郎で、この春中学一年生になり、孫娘は千穂と言い、五年生に進級なのよ。皆さんにご挨拶なさい」「今日は、光太郎です」眼鏡を掛けたもやしが背を折る。

「こんにちは、千穂です」大きな目をクリクリさせ、甲高い声を出す。

「孫達があの当時の皆さんと同じ歳になるのですもの、お婆ちゃんになるのも当たり前だわね」「わたしにも孫が三人おりますわ、先生。わたしだってこの頃、しみじみと老けたと感じますもの」「そう、好美ちゃんもお婆ちゃんになったの。光太郎に千穂や、よく聞きなさい。この丹木徳夫さんは一生懸命勉強して東大を出て、お医者さんになったのよ。赤木善太君は可愛い悪戯坊主だったけれど、今ではビルや駐車場を持っている不動産屋の社長さん・・」「嫌だな、先生。昔の事をばらさないでよ。先生もこんなに大きなビルの所有者じゃないですか」善太は寂しい毛に手を遣りながら、唇の端に笑みを乗せる。

「大した事ないのよ。土地を提供して、ビルを建って頂き、等価交換しただけなの。そうよ、その時、善太君に相談すれば良かったわね。三カ月前にマンション偽装問題があったでしょう。耐震検査を

頼んで、大分経費が掛ったわよ。でも、大丈夫で、安心したけれど」
「良かったですね。人騒がせな話でした。私どもが紹介した物件も、居住者の要望で検査を依頼し、問題なく、一安心したところですよ」
「こちらの須木富一君は家業を継いで、酒屋の主人なの。安作好美さんはお花屋さんに嫁いで、綺麗なシクラメンを見繕って昨年届けてくれたわね。大事に育てているわ。有難うね」
「そう言えば、この南辺りがバラ園でしたね。背丈以上の色々なバラが綺麗に咲き誇っていたのを思い出しますよ、先生」
「そうね、富ちゃん。父が丹精込めて養っていたわ。今は、この辺もコンクリートジャングルになって寂しいわね」
「ここは立石駅まで歩いて三分で、一等地ですから仕方ないですよ」

善太は言葉を挟んだ。

「健ちゃんが待ちくたびれているから、行きましょう」徳夫の呼び掛けの後、一同はエレベーターで運ばれた。

近くで見る千夏の顔立ちは往年の千春に生き写しである。片笑窪が唯一異なる点か。声調も似ている。千春の蘇りか……。未だ、亡くなくても居ないのに不謹慎だと、もう一人の自分が囁く。白いスラックスと浅黄のブラウスがフィットし、清々しさを演出する。

一方、千春のブラウスは黒地に赤や黄色の小さな花が数多くプリントされていた。

ドアが開き、外に出て、好美と千夏が千春の手を取り、バスの中へと誘う。

「あら、今滝健ちゃんじゃないの。目の辺りに面影が残っているわよ。今日は宜しくね」
「先生、ご無沙汰しております。皆な、先生の顔が見たいと言ってましたから、喜びますよ」
「そう、そうならいいんだけど。ご覧の通り、大分お婆ちゃんになっちゃったでしょう」
「僕は四十代から白髪が急に増え、月に一回女房に染めて貰ってます。商売柄身嗜みには注意してますので」
「まあ、そうなの。普段は白髪のままなんだけれど、娘の千夏がしっかり染めて若作りにしないと、二度と皆さんが誘ってくれないからと言うもので・・・」

「そんな事はないですよ。恩師は恩師ですから」「そう、有難う」
千春は千夏と並んで二番目の席に、ゆっくりと腰を下ろす。先頭席は徳夫と好美で、運転席の後は善太と富一が席を占める。バスは静かに発進した。

光男と孫達が手を大きく振り、角を曲がるまで見送っている。バスは京成線と斜めに交差する踏切を渡り、狭い路を突き進む。来る時に通過した本通りに合流し、青戸へと向かう。右手に、かつしかシンフォニーヒルズの灰色がかった白い石の壁が見えて来る。この文化会館には、国内トップクラスの音響設備を誇るモーツアルトホール（一三一八席）と小規模演奏用のアイリスホール（二九八席）があり、その他練習室、展示室、カフェテリア、会議室などを備えた区民が憩うカルチャーゾーンである。

「母さん、右前方にモーツアルトの立像が見えるわよ」「よく聞きに来たものね。彼の作曲になるレクイエム二短調、フィガロの結婚、トルコ行進曲、魔笛に何度も聞き惚れたわ。貴方も来た事有るでしょう」「ええ、二、三度程、息子の友達のお母さんに連れられて確か、バツハとかハイドンの曲だったと思うけど。余り、馴染みが無いもので、はつきりとは覚えておりません。歌謡曲ならあちこち行くんですけど。ここはクラシックが主ですから、滅多に来ません」「好美は恥ずかしそうにはにかみながら喋る。「私は一度だけ」「へー、徳さんが……。そんな趣味があったつけ……。」「怪訝な顔つきで、善太は徳夫の方に短い首を伸ばす。

「善太も一緒だったじゃないか。それに、善太に誘われたんだぞ」「まさか……。俺が……。」「富ちゃんも居たさ」「なーんだ、徳さん。昨年ここで開催した線路の高架化の設置促進決起集会か」「ピンポーン、富さんの当たりー。高砂駅から江戸川駅の区間は開かずの踏み切りが多いので、足立区竹ノ塚での死傷事故を繰り返さない為にも早期の高架線化が必要だな。実現は二十年先だけど」「徳さん、担ぐなよ。人が折角真面目に聞いていれば……。」「

「だって、先生が来た事有るでしょと質問されたから、素直に答え

た訳だよ」「音楽の話をしてたんだから、演奏会を聴きに来た事あるかに決まってるだろ」口を尖らせ、むきになる善太。

「善太君、徳ちゃんはそれを知っていて、わざと言ったのよ」「その位、判るだろうよ、お互い音痴なんだから。所詮クラシックって柄じゃないだろう。先生覚えてますか、お手紙にも書きましたけど。四年生の頃、歌唱力テストで二人とも音が取れず、居残りを命じられても、ドレミの音階をオルガンに合わせられず、先生が途方にくれた事を。突然、私は声が引っくり返って裏声が出て、合格し、善太を置いて喜び勇んで帰りました。今でも、飲む度にその話が蒸し返され、友達甲斐が無かったと善太に笑われます。その後、宴席が多い善太は浪曲や小唄を習ったそうです。私は作詞のセンスがあり、歌番組が好きになり、カセットを買って自己流で歌ってます」

「徳ちゃん、何も俺を引き合いに出すなよ」「勿論、忘れるもんですか、徳ちゃん。あの時、先生は随分悩んだのですもの。とつくに時効ものだから、お話するわね」「何だか、嫌な予感がするな」「先生、何ですか。是非聞きたいですわ」「皆さんも良く知ってるの通り、徳ちゃんは勉強にスポーツに抜群の成績を上げてたわね。只、歌うと言う環境に無かったせいかな、音程が上手く取れずにしょぼくっていたの。音楽だけが三で他は皆五点満点だった。音楽のペーパーテストは何時も九十点以上だったけれど」「歌が下手なのは、黄色い声で唸る父親の遺伝だとか、赤ん坊の時頭を何時も剃り上げていたからだとか言って親達が騒いでました。母の甥は田舎の喉自慢大会で優勝したとか。確かに、富さんや武辺勝君の様に幼稚園で歌を習ったりしませんでしたから、発声方法が皆目判りませんでした。癪に触って、ペーパーテストに全力を尽くしたんです」「その辺は、先生にも痛い程判ったわ。徳ちゃんだけを特訓すれば口煩い父兄がえこひいきだと言い出すので、涙を飲みましたよ」「そうだったんですか。五年、六年と音楽で五点を頂き、努力すれば認めて貰える事が身に染みました」「そうよ。歌唱力にも著しい努力の跡が見られたので、満点にしたわ。私の四十年近い教員生活でオール五は徳

ちゃんだけだった。それだけに強烈な印象を持っているの」「徳さんは中学でも、学年のトップになったりして、何時も五番以内に入っていたんですよ、先生。僕らと遊んだり、スポーツをしてて、何時勉強してるんだろうと、皆不思議がっていましたから」「そうだったの」「善太は今じゃあ、押しも押されもせぬれっきとした社長じゃないか。大したもんだぞ」

「そうよ、徳ちゃんの言う通りよ。小学生の時には、一番前で可愛い顔をしていたけれど、余り目立たなかったわ。秘めたる才能を先生は見抜けなかったのね。色々と苦労は当然有ったでしょうが、良く頑張ったわね」「それ程でも・・」首をすくめた善太は光輝く頭を撫で回す。

「二組の吉井義男先生が褒めてたわよ。演劇のセンスがあって、よく通る声で自然体の演技が素晴らしいって。区の発表会で銀賞を獲ったでしょう」

「ええ、確か五年生の頃かな」「富一さんは習字がとても上手で、度々校内の金賞を受賞して、区長賞もさらったわね」「商人には読み、書き、算盤が大事だと、書道と算盤に四年生から通わされたから」「習った人全員が優秀とは限らないでしょう。手筋が良かったのよ」「一緒に居た勝君や藪崎雅代さんも区の展覧会では何時も入賞していました」「そうだったわね。皆な得意な分野で活躍していたのね。そうそう、好美さんはお誕生会で可愛いウサギさんのアップリケの付いたエプロン姿で、ケーキやコーヒーを運んでいたわ。優しいお嫁さんになるなと想像してたもの」「わたしは勉強が嫌いで、母と何時も食事を作っていて、料理好きになったんです」

「何もお勉強が出来なかったとは言ってはいないわ。今は個人情報保護法が出来て、やたらに喋れなくなったの。大丈夫よ、貴方の成績については口を閉ざしておきますから」笑い声が一斉に上がった。「先生、健さんの思い出は何ですか」「ニキビ面を後生大事に保存している富一が尋ねる。」「すっかり忘れていたわ」「先生、健ちゃんについては会場についてからにして下さい。話に気を取られて、ハ

ンドル操作を誤ると一大事ですから」徳夫はエンジン音を超えたボリュームで、話の続きを制した。

「そうよね。健ちゃんに全員の命を預けているのですもの」「大丈夫ですって、何せ、プロですから」

フロントガラスに跳ね返った錆び声が聞こえた。

「中途半端なプロが一番危ねえ時期だな。何処かに油断が出来るから」「善太の言う通りだ。最近配達中何度か子供を引っ掛けそうになった」富一は真顔で、身を善太の膝まで乗り出し喋る。

「それは歳のせいで、反射神経が鈍ってきたからだ。余り速度を出さない事だな」「さすが、医者徳さんだわ」「ほら、健ちゃん。後ろを見ないで、しっかり運転して頂戴。もう、健ちゃんに話し掛けないでよ」震え声を出し、一同に注意を促すのは好美である。

「そう言えば、学生時代の夏休みに男四人で友達の伊豆の別荘に出掛けた時、真鶴付近で死ぬ思いをした経験があります。助手席の自分が運転手に話し掛け、正面を向くと厚い石の壁が目飛び込み、咄嗟に、危ない、ブレーキと絶叫してたんです。ズズズーと車は滑り、ガチャーンとの轟音が耳をつんざき、もう駄目だと思った。シートベルトが無かったので、身体は前後に大きく揺れ、背をドアに打ち付けてしまった。砂煙がもうもうと上がるのを目が捕らえ、生きていと実感したよ。ドアを開けると、旅館の二階の窓が開いて、大丈夫ですかーとの不安げな声を耳にしたんだ。仲間も打ち身程度だったので、大丈夫でーすと直ぐに答えたが、車の左後部の側面がかなり凹んでいたな。直角の右カーブで、前は高さ二米近い防波堤。あと一秒ブレーキが遅れたら正面から激突して、あの世行きだった。運転手が一瞬自分の方に向いたからなんだ」「交通事故は悲惨だね。叔母夫婦が追突されて、鞭打ちになり、二人とも首にコルセットを巻いていたのを思い出すわ」千春の皺顔は曇った。皆押し黙って、車内はエンジン音が響くだけになる。

信号で、マイクロスバスは止まった。

「急に静かになって、どうしたんだ。今日は葬式の送迎車じゃない

んだから、話し込んで大丈夫だって。俺は運転に集中している。車から降りたら、ゆっくりする習慣になっているから」「縁起でも無い事言わないでよ、今滝君」「ほらほら好美さん、運転手に話し掛けない事。それじゃあ、健ちゃんを百%信じて、折角のクラス会だから賑やかにやろう。健ちゃんには悪いけど」徳夫が言い終えると、信号待ちのバスはスムーズに走り始めた。

「音楽に話題を戻そう。先生は音楽が得意で五年生の時、オルガンに替わってピアノが入り、喜んで弾いて下さった。それに、遊びに伺った際にはお琴で『春の海』の音色を聞かせて貰い、気持ちが和みました。あの頃が目の前にちらつきますよ」

富一が本日主人公の千春に話しを持っていく。

「そうね。お琴もピアノもここ十年近く弾いてないわ。指に力が入らなくなってるね。昔はモーツアルトの曲も鍵盤に乗せたものよ」「最近、医療現場で音楽療法と称してモーツアルトの楽曲が利用されてますよ。脳波をとったり、神経、精神や心理的なテストの結果から、やる気を引き出したり、落ち着きを与えたりする効果が科学的に認められています」「私は随分前から十分にその事を体験しているわよ。音楽は心のお薬だと思っているの。彼がもっと長生きしていたら、優れた作品がもっと生まれていたのに。三十五歳の若さで世を去り、非常に残念だわ」「へえー、知らなかったなあ、そんなに若死にだったなんて。どうして亡くなったんだろう。まさか、交通事故・・・」善太が身を乗り出し、問い掛ける。

「その事で、昔母さんと言いつつたわね」「いいじゃないか、そんな事」「聞きたいですよ。どう言う事なんですか」「音楽史の謎、モーツアルト殺人事件として映画やドラマにもなったのですよ」皆は口々に聞いた事もないと言いつつ、千夏の次の一言を待つ。

「彼はオーストリアで生まれ、五歳で作曲し、音楽家の父親と欧州各地を演奏旅行して、有名になったそうです。その後、大司教宮廷音楽家を経て、ウィーンで独立し、宮廷や教会に雇われたけれど、収入は不安定でした。多額の借金を背負ったまま、働き盛りに突然

死したのです・・・」

「突然死とは具体的には・・・」推理小説のファンである富一が膝を乗り出す。

「死の二時間前に医者が診察に来て、冷湿布治療をしたとの記録がありますが、死亡診断書がないのです。一七九一年当時、ウィーンは医学の面で世界的に指導的な役割を演じていて、死亡診断書の提示義務が例え無かったとしても、死因が明確でなく、しかも有名人なのに検死解剖がなされなかった不思議が残ります。その上、葬儀も数人で慌しく行なわれ、墓石も無く、貧困者用共同墓地に埋葬されて、墓の位置も確認出来なくなっているそうです。生前支援してくれた裕福な友人や後援者が大勢居たのにおかしいとなる訳です」

「成程。聞けば聞くほど、本当に謎だらけですね」

「現在では、多くの歴史家がモーツァルトは毒殺されたと考えています」

「そうになると、容疑者は・・・」

「当時の有名人、友人、秘密結社、妻、当人などが上げられますが、証拠は何一つありません。これが逆に神秘的なベールを覆い、謎に謎を呼ぶのです」

「もう、その位にしたら、千夏。この娘ったら、これを契機に推理小説にどっぷり漬かったの。保母さんなのだから子供の教育に悪いからと幾ら言っても聞かなくてね」

「僕も好きですよ。特に西村京太郎の鉄道ものを愛読しています。妻は気違いじみていて、この点で犯人はあいつに違いないとテレビ画面を指差して、うるさいったらありやしません。彼女は夏樹静子、山村美妙、高村薫、桐野夏生ら女流作家の作品を乱読し、対抗上こちらは男性作家の横溝正史、江戸川乱歩、松本清張、西村京太郎、東野圭吾らの本を読破してます」

「まあ、富ちゃんは夫婦で競って推理物を読んでいるの」

「社会の縮図が描かれていて、面白いですよ、先生。自分とは違った極端な人生のひとコマが覗けて」

「そう言えば、子供の頃乱歩の明智探偵、小林少年のラジオ放送や映画に胸がワクワクドキドキもんだったな」

善太は過去に思いを馳せる。

「私は小学生の時、近所の小父さんが貸してくれた野村胡堂の『銭

形平次捕物控』シリーズを夢中で夜中まで読んだものです。その後友から借りて、コナン・ドイルの『シャーロックホームズ』にも熱中しました。誰にもそう言う時期があるもんだよ」「いやあ、徳ちゃんは早熟だったんだ。鼻垂らし小僧のおいら達は遊びで泥んこになってた」

善太が言うと、間を置かず、富一が首を縦に大きく振った。

「そう言えば、徳ちゃんは他の子と違って、大人びていたわ。朝の書き取り十問に毎回満点を取ったのは、読書のお陰だったのね。凄いい子がいたもんだと呆氣に取られたわよ」「勉強の話になると、徳ちゃんしか出て来ないな」「仕方無いでしょ、善太君。それ程徳夫さんとの開きが有ったと言う事よ」「ご免なさいね。皆さん一人一人に思い出は一杯有るのよ」

皆が話に夢中になっている間に、バスは中川橋を渡って左折し、ガード下を潜る。開かずの踏み切りを避けた為に。柴又浄水場からの水道本管が埋まっている細い通称『水道道』に入り、東へ直進する。戦災で浅草から逃れてきたお寺五軒を左手に遣り過ぎ、大吉小学校の西門へと健はハンドルを切った。西日を浴びた校舎を見上げた徳夫の脳は、死ぬまで他人には言えぬ場面を鮮烈に蘇らせていた。

四年次の或る日の放課後、友らは原っぱでソフトボールの練習試合をしていた。早く合流したくて、週番だった徳夫は相棒の女子と別々に巡回し、居残っている児童を退去させ、窓の鍵が掛かっているかをチェックして回った。二階の自分の教室を見回り、前の扉から出ようとした時、二段重ねの書類棚の上のガラス戸が少し開いているのが目に留まった。閉め様と思い、近付いた。『全国標準テスト』なる文字が目飛び込み、徳夫の瞳孔は拡大し、心音は高鳴った。悪いと知りつつ、一枚位抜き取っても判ら無いだろう・・・、鍵を忘れた先生も悪いと勝手に解釈し、やや苦手な理科の問題を一部失敬し、懷に差し込んだ。その時、後ろの扉がドスンと開いた。徳夫の心は凍り付いた。

「おう、徳さんじゃないか、何してんだよ。早く来ないと試合が終わるぜ」「・・・、猛か、びっくりしたよ。今、週番で戸締りがきちんとされてるかみてるんだ。何しに来たんだ・・・」声の上擦りをはつきりと徳夫は自覚する。

「健ちゃんと俺がホームランを打って、球が二つとも見付からないんだ。机に一個しまつてあるから取りに来たんだよ」「何だ、そうだったのか。早く出ないと小使いさんに出入り口を閉められる」「わかった。ボールを取ったら出るから」

ソフトボールを手にした猛は早々に立ち去った。

盗みの手元を見られてしまったか・・・否、確かに用紙を胸に入れ終わってからドアの音を聞いたから、大丈夫だ。もしも、現場を見ていたなら、猛は胸に何か入れたんじゃないかと言う筈だ。安堵の色を表情に付けた徳夫はアツと小さく叫んだ。

何と、ガラス戸が大きく開いたままではないか。

この点を猛が網膜に映していたなら、怪しむに違いない。困った・・・。猛に直接聞くわけにはいかない。後ろめたさを残したまま、徳夫は何食わぬ顔で試合に合流した。

三日後に実施された全国標準テストの算数、国語、理科、社会の総合点数で、徳夫は三十万人中三百二十三番となり、千春先生に学校初まって以来の高順位といたく誉められた。今までの最高は二千番台との事。徳夫としては毎年盗むわけにもいかない、鍵が掛かっているのです。五年ではその分頑張って三千番台を取り、六年では千百十番になった。

万一、猛がテスト用紙失敬場面を目撃していて失業中にゆすり等してきたなら、猛にも同罪があると言う積りであった。隣町の相撲大会で、近所のお兄さんの指示に従い、五人抜きで猛が土俵に上がり、わざと徳夫に負けて、豪華な賞品を皆で山分けした事実がある。いわゆる二人は八百長相撲に加担したのだ。もう一つは、善太の友達の家で猛と徳夫が連れて行かれ、二階から天体望遠鏡で天の川を見せて貰い、その美しさに感動した後、真向かいの銭湯の

女湯を双眼鏡で覗くよう言われ、好奇心には勝てず、従ってしまった事である。鼓動の激しさを身体全体で感じていた時、母と妹がレンズに拡大され、徳夫はあたふたした。時間稼ぎをして、視界から離れてから猛にバトンタッチし、冷や汗物だった。風呂屋の娘の博江は子供らに洋服を着せているところだった。

それに、ソフトボールでホームランを放ち、盆栽を折ったり、ガラスを割り、弁償しない事も犯罪と言えば犯罪である。

児童だから許して貰える事なのかもしれないが、もし、警察沙汰になっていたなら、徳夫や猛のその後の人生は大きく変わっていたであろう。

母から、近所の中学生が配達された牛乳を失敬し、牛乳屋の小父さんは配達先から苦情がきて困り果てていると聞かされた。盗まれた家の人は確かにあの中学生と言うが、自分が盗みの手元を直接見て無いので警察に突き出せないし、もし突き出してその子が更にぐれたら同じ町会に住んで、嫌な思いになるから、その親御さんに話して、親の口から、しないように説得して欲しいと伝えたとの事。それから苦情は無くなった由。

その話を聞いた徳夫は、自分も同じ様な経験をしているとは言い出せなかった、両親を悲しませなくなかったので。

何時までもこれらの事が心にこびり付き、二度と不正はするまいと誓った。

この時の古傷が今でも痛み出す。

ここに猛が居なくてホットする。今頃彼はどうしているのか。意識が無いとお兄さんが言っていたけど、もう気が付いているのかと思ひ巡らすと、眼の奥が潤む。

バスは南の正門に回る。

「母さん、見て御覧よ。桜が満開よ」「ほう、見事に咲いているね。この桜はこの子達の記念樹なんだよ。在職中花が開く度に皆さんの事を思い出し、懐かしんでいたのよ」「大きな枝垂れ柳の横に植え

たわね」「好美さん、柳は枯れてしまったの。その代わりを、この桜が果たしているわ。貴方方みたい立派に成長したものよ」

薫風にひらひらと幾枚かのピンクの花弁が舞う。

門は肩位の高さで鉄柵の引くものだが、当時は二米の石柱に観音開きの木製門が取り付けてあり、週番がかんぬきを抜いて開けた。授業中や放課後には、人は横の通用門から出入りする。塀は一時石塀になったが、地震の際崩落して危険だからと、当時と同じ竹の四つ目垣になっている。新葉が紅葉する紅カナメモチが密生し、所々にムクゲやハナミズキが顔を見せる。健が合図の警笛を鳴らすと、鉄柵が引かれ、車をゆっくりと前進させる。両サイドに参加者が現れる。車から降りた千春を全員で心の籠もった温かい拍手で迎える。前回参加の二十名に太り気味の西沢祀江が駆け付けた。徳夫が車椅子を下ろし、広げて、千春を席に誘導する。

「あらあ、野村美和子さんじゃない。ちつとも顔形が変わってないわ。呉服屋の女将さんだけあって、和服の着こなしは素敵よ」「それ程でも・・・先生、ご無沙汰しております。お電話を昨年頂きまして、驚いたと同時に、本当に嬉しかったです」

「そう、迷惑じゃなかったかしら、三十分も話し込んで・・・」「とんでもないです。また、何時でもお電話下さい」「米原君は卒業時のアルバムそっくりね。徳ちゃんが昨年のクラス会の様子を詳しく手紙に書いてくれたけれど、描写通りに若作りで、自分の目を疑うわよ」「どうも、莊次郎です。お元気そうで、嬉しいです」「駄目よ。御覧の通り、脚が弱ってきているわ。刀の展覧会で何度も入賞して御目出度う。その新聞を切り抜いて、大切に保存してあるの。皆さんの活躍がとても嬉しいわ。これからも頑張ってね」「親の跡を継いだけで、大した事無いですけど・・・」「そんな事は無いわ。人並み以上の努力が無ければ受賞出来ないわよ」

「先生、みんなに名簿順に並んで貰いましょう。先ず、女性陣から」徳夫は名簿を読み上げる。紺紺を着た女が先頭に立つ。

「大形裕美子です。判りますか・・・」「名前の様に大柄で、ぽっち

やりの愛嬌のある顔立ちだったから覚えているわよ。お母様似で、ハキハキしてましたよ。スポーツが得意で、男の子をドッジボールで負かしてたわ」「そんなにお転婆でしたか。そう言えば、いじめられた子に代わって思い切りボールをぶつけていたかも」「お子さんは居るの・・・」

「ええ、子供が三人と孫が五人おります。芸者の稼ぎでは子供の教育は高校までですが」「いいのよ。子供は元気でありさえすれば。わざわざ小田原から来て下さって有難う」「何故、知ってらっしゃるのですか・・・」「徳ちゃんが逐一教えてくれたわ」

裕美子は千春の萎びた手を軽く握った。

風呂屋の娘、尾谷博江は黒のワンピースに七分袖のプリントアンサンブルシャツを身に着けている。独楽鼠の様に良く動き回り、給食や掃除の当番をてきぱきとこなしていたと千春が明かす。博江は大蔵省の役人と結婚し、エッセイや小説を趣味に創作していると言う。次の貝野美紗は医療事務に従事し、見合いで刑事と結婚し、新郎が超多忙の為子なしと、編み立て帽子の下から話す。仲間達は笑い転げる。透き通ったソプラノだったと千春に褒められた。

大人しく、地味だった篠藤千絵は薬科大卒後、製薬会社に就職し、その研究員と結ばれ、現在は相模原市で開局していると伝える。黙々と何事も遣り遂げるタイプなので、研究者に向いていたのねと千春のコメント。

八百屋に嫁いだ夏村清江は小太りの身体を千春に近付け、抱き締め、卒後初めての対面を涙に濡れる。周りの皆ももらい泣きする。やや間を置いて、目元がきりっとしたスラックス姿が口を開く。

「先生、長過ぎる位ご無沙汰致しておりました。西沢祀江です。弁護士資格を取って、女性の人権問題に取り組んでいます。先生、何時までもお元気で」「男の子に苛められた女の子をよく慰めて、芯のある子だと思っていたわ。弁護士と聞いたから言うんじゃないのよ。意義あるお仕事ね」「先生が寄せ書きに、楽しい時、寂しい時にも歌いましょうと書かれ、写真としてアルバムに貼ってあります。

それを胸に終い、男社会に挑戦してきました。心強い味方でした。本当に心から感謝致します」「まあ、そんなに役に立っていたなんて知らなかったわ。喜んでもらえて嬉しい。これから頑張ってるね」堅い握手を交わしつつ、祀江は薄い唇を噛む。

野村美和子が料理屋に後妻に入り、乳癌となったが初期でホッとし、和歌に心の安らぎを見出したと告げる。

美和子の体験を聞き、老化による容貌や足腰の衰えを過剰に、敏感に感じ取っていた自分は未だ、恵まれた方なのだと千春は考えた。こんな事を昔の教え子には言えないと思った。

「千春先生、お久し振りで。前島豊乃ですよ。わたしは家業のクリーニングを継いで、父の面倒を見ていたら、アツと言う間に現在に至ったって感じです。妹は嫁がせましたが・・・」

ショートカットしたボーイッシュな顔貌は両胸にポケットをあしらった灰白の袖付カットソーと膝までのチョコレート色のタイトスカートの上に乗る。形の良いすんなり伸びた脚は網サンダルに納まっている。

「そう、大変だったのね。そんな苦労を微塵も感じさせない明るさと若さがあるわよ、貴女には。容貌や話し方がお母さんにそっくりね」「音楽の時間に先生からいい声をしていると褒められたお陰で、美空ひばりの熱狂的なファンになり、カラオケではひばりのオンパレードで仲間内から煙たがられる存在です。ストレス解消にもってこいですね。昨年のクラス会の二次会で三曲歌い上げましたよ」「そうよ、歌う事は健康にも精神にも良いわ」「中々マイクを離そうとしなかったな」豊乃の背後から、勝の声が飛んだ。

幹事の好美とは車内や昨年電話で話しているので、二言三言で終わった。

娘がドイツに嫁いで行った藪崎雅代は、学生時代に心臓の中隔欠損症の大手術に耐え、結婚後は癌により乳房摘出し、現在腎臓病で人工透析の為、週に三回は病院通いと告白する。娘に青い目の初孫が出来、命を賭けてドイツを訪ね、孫達とアルプスを望み、生涯忘れ

得ぬ思い出を作ったと片笑窪を見せ、語る。

ここでも千春は人の一生は千差万別であると、思い知らされた。自分は毎年同じ年頃の子にだけ接してきて、教育現場以外を知らな過ぎたと痛感する。

澄み切った青空に親子雲がふんわりと浮いている。まるで千春組一同の会話を聴いているかの様に・・・。

「先生、お疲れでしょう。丁度女性陣が終わった所で十分程休みみましょう」「ええ。こうしてお話している内に昔の事が次から次へと臉に湧いてくるわ」

好美が手渡した烏龍茶入りの紙コップを親娘は傾け、ゴクリと喉を鳴らす。他の者は思い思いに車内に戻り、セルフサービスである。休憩が終わり、皆が先生の車椅子を取り囲む。

トップバッターの赤木善太は、バブル期の不動産業は恐ろしいほどの好景気であったが、現在は下火であると述べる。一方、パチンコ店の景気は景品交換があるせいで、好不況に大きく影響されず、コンスタントな儲けがあると、顔も背も縦に長い石井伸之が小さな口を動かす。千春先生から、長いコンパスを生かし、小さな子を寄せ付けなかった徒競走の姿を思い出すと言われた。

運転手の今滝健は車中話せなかったので、ここで一気に口角に泡を飛ばし、喋る。娘二人が運送業を手伝ってくれているが、良い婿が来て欲しいと本音を吐く。胃癌を摘出し先がないので、一刻も早く孫の顔が見たいとも。今滝君は口数が少なかったけれども、徳ちゃんと学年で一、二位を争う百メートル競走の名場面を作ったと、千春は健の手を取り、話す。

続いて、営団地下鉄の車掌勤務の際にサリン事件に遭遇し、失明の一步手前を体験した末谷保夫が、今は三味線に熱中し、月一回の発表会が待ち遠しいと語り、黒眼鏡を掛けた頬が緩む。また、音に対してかなり鋭敏になったとも。

「わたしの顔は判るの・・・」「大丈夫です、治療のお陰で今は。そうでなかったら一人でこうして出歩けませんから。強い光は眩しい

ので、サングラスが放せません」目線を合わせるように、保夫はしやがむ。

「そう、良かったわね。良くなって。末谷君は縦笛やハーモニカが得意だったわ。あの頃から、演奏の素養があったのよ」

保夫が立ち上がり、その場を離れると、富一、徳夫が近寄り、握手を交わし、引き下がる。二人は十分千春先生と話し込んできたので。勝の番になると、千春が口火を切った。

「残業で遅くなったりした時には、よく勝さんの店に寄って、暖かくて美味しい中華を食べたわね。その時に、皆さんの活躍の噂を良く聞きましたよ」

「そうか、勝が情報の発信源だったのか。詰まらない事は言っていないだろうな」「善太、喋られてまずい事でもしてるのか」「そ、そんな訳ねえだろが・・」「安心なさいな、良い事しか聞いてないから。勝さんは書道や絵画が上手な芸術家肌だったわね。料理も芸術かも知れないわ」「ええ、親父と違ったオリジナルをお客さんに愉しんで貰うのがとても好きなんです、性に合った職業と思ってます。今では倅に半分任せ、書にも励んでますが・・」

「いいわね、素敵な趣味が有って・・」「先生は音楽を愛してたじゃないですか」「最近離れてしまっって・・。皆さんのお話を伺って、また少し始めたくなったわ」「先生、また何時でも顔を見せて下さいよ。サービスしますから」「有難う。今度寄せて貰うわね」

勝は橋田弘三と交代する。弘三の髪は太陽に輝き、黒々していて頬も膨らみ、昨年のクラス会の時とは雲泥の差で皆は啞然とする。その時の写真を見ている千春も余りの変貌振りに目を見張った。

「先生、橋田弘三です。五十年のご無沙汰をお許し下さい。中学や高校のクラス会、同窓会には足を運んでいるのですが、小学校からは連絡が来ませんでした。リーダー格の徳さんが何かと忙しいのだろうと。風の便りでは、東大を出て、産婦人科病院を開業されたと聞いたもんで。僕は証券マン一筋に停年まで勤め上げました。親がくれた頑健な身体に感謝しています。病氣一つした事ありません。

意外と僕みたいなのがコロっといくのかも知れませんが・・・」「大丈夫、殺しても死にそうに無いほど、顔に度胸が滲み出ているぞ、こうちゃん」富一が口には手を遣り、声を張り上げる。前回は隅の方でしょぼくれて、一人静かにお猪口を傾け、挨拶も口に籠もっていたのに。今日はこういう風の吹き回しか、雄弁に恩師の前で一席ぶっている、皆、同じ事を考えている。

「影日向無く、三年間ご指導頂き、感謝に堪えません。私の方から徳さんにクラス会の開会を要請すれば良かったと後悔しています。申し訳ありませんでした」「いいのよ、橋田君。こうして、皆さん私の我が儘を聞いて集まってくれたじゃない。昨年、自分の都合で出られなかったのに。有難う。貴方は物事をじっくり考えてから行動するタイプだった。音読の語尾もはっきりと言い、教室の隅まで響いていたわ」「ソフトの遠投テストでは、クラス一番だったな。良く、ホームランも豪快に打っていた」歳を取ってやや奥眼になった健が、言葉を挟む。「先生、長生きして下さい」弘三は背を折り、両手で千春の手を包む。

続いて藤谷が前に一歩出て、瓢箪顔から高い声を発する。「お元気そうで、何よりです。老けたので判らないでしょう・・・」「藤谷昭君でしょう。お兄さんの清君は4年間担任だったので、貴方の事をよく覚えてるわよ。それにお兄さんのクラスはまめにクラス会を開いて呼んで下さるので、その都度貴方の事が話題になるわ」「そうですね。現在、僕は埼玉県の坂戸市で果物屋をやっています。今度は、先生がいらっしゃるとの事でしたので、贈り物を持参致しました」「何かしら・・・」「果物の王様のメロンと石垣イチゴです。採れたてですので、ご家族でどうぞ召し上がって下さい。母は九十歳で元気でいますが、その母の実家が静岡でメロン栽培をしていて、そこから仕入れたのです」「まあ、そうなの。美味しそうだし、悪いわね。遠慮なく頂くわ。有難う。私もお母様に見習って元気にならなくちゃあね」「昭一人、点数稼ぎしてるぞ」「今更、点数稼ぎは無いでしょ、卒業したのですから。損得勘定はないわよ。悔し

かったら、善太君も土地を先生にドカーンとプレゼントしたら」弁護士の前江がピシャツと言い放った。

「いやあ、そこまでは・・・」禿げ頭を掻き、苦笑いする善太の仕草に、一同は笑い合う。

紺のジーンズに濃紺のジャケットを着込み、縦縞のポロシャツの臍辺りが突き出ている古本力は、鍋、釜などの金属加工を自営しており、六年前に放火で半焼した際、善太、徳さん、勝君、富ちゃんがいち早く掛け付けてくれ、何かと世話になって商売も軌道に戻って、嬉しかったと赤眼になり語り出す。

「そうだったの、全然知らなかったわ。良かったわね。良いお友達が勢いて。貴方のつやつやした顔といい、響くような野太い声には驚いたわ。小学生の頃は、女言葉を使って、身体も仕草もなよなよしていて、心配していたの・・・皆の中で、一番変わったので、先生もびっくりよ」

心では、何処かの組事務所の親分が現れたのかと、千春は思ったが口には出せない。

「あの頃は姉妹に挟まれていたので・・・心機一転、中学、高校では柔道をやっていましたから・・・」

「三段だそうですよ、先生」と、富一がコメントを加えた。「道理で、がっちりした体格になったのね」「息子二人は柔道でインターハイに出て、三位と六位になり、嬉しい思いをしました」「そう、良かったではないですか。お子さんは親の背中を見て育ったからでしょうね」

ギョロ目の力は最敬礼して横に退いた。

米原の顔を見るなり、千春は先ほど話した事を繰り返す。「三、四年おき位に莊ちゃんの名前を新聞で見付け、とても嬉しくなり、貴方の同級生はどうしているのかなあと、懐かしく思い出していたわ。総理大臣賞始め数々の受賞、御目出度う。素晴らしい活躍で、先生も鼻が高いわよ」「親の刀鍛冶を継いできたら、何時の間にか賞を頂いていたですよ」「伝統技術を代々引き継ぐのは大変でしょ

う。お子様もやってらっしゃるの・・・」「ええ、兄と私の子がそれぞれ修行中です」「そう、良い事ね。更に、精進して頂戴」

米原で二十一名全員の挨拶が済み、最後に千春が来し方を語る。

「本日は大勢の方が集まってくれて、心から御礼を申し上げます。

短い会話でしたが、皆さん一人一人がそれぞれ違った人生を歩まれ、喜怒哀楽を感じ、越えられ、ここにおられる事を頼もしく思います。

貴方は、私の四度目の卒業生で、徳ちゃんを中心によく纏まっていたクラスでした。遠足、運動会、音楽会、絵や書道の展覧会など楽しい事が思い出されます。その五年後にお見合いし、銀行員の星光男と結婚しました。一人娘だったので、父の目に叶った人を養子にとりましたの。ここにいる長女の千夏と次女の千秋を生みました・」

「千夏です。本日は母の為にクラス会を開いて下さり、御礼申し上げます。母はこの日を指折り数えて、子供のように待っておりました。有難う御座いました」眉の濃い千夏は礼をしながら、ぐりぐりと一回転する。

「不思議な縁で、千夏も養子を貰い、孫の光太郎と千穂を授かりましたの。光太郎は今年中学一年生で、皆さんのあの頃と一緒にですから、自分が老けるのは当たり前だと思えてきましたわ。千秋も結婚し、男の子欲しさに、女の子ばかり四人生んで人口減少に歯止めを掛けています・・・」

クスクス笑いが漏れてくる。

「当家にとって光太郎は七十三年目に授かった男の子ですの。皇室も約四十年も男の子がご誕生されないので、小泉首相を先頭に、女性、女系天皇を容認する皇室典範改正案の賛否の議論が沸騰している最中ですね。秋篠宮紀子様のご第三子ご懐妊で、改正案の国会提出が見送られ、全国民がご誕生を静かにお待ちする事になったのはとても良い事です。私は六十歳の停年まで頑張り続け、今は雀の涙程の恩給で暮らしていますわ。孫の面倒を見たり、音楽を聴きに出掛けたり、時にピアノを弾いておりました。数えてみたら、十六回も卒業生を送り出して、そのクラス会に何度も招待され、楽しい

ひと時を過ごしてきました。七十を越えた頃から、足腰が弱ってきて、体調が優れないと、欠席してきましたの。今回久し振りで参加出来て、とても嬉しいです。皆、立派になられて・・・」

お終いの方は、千春の涙声で聞き取りにくい。

「それでは、皆さん。ここで二十分間休憩に致しまーす」徳夫は口に手を当てて、連絡する。

お茶を飲み終えると、幹事は皆に手伝って貰い、準備していた椅子や机を正面玄関前に並べる。

「いいですか、皆さん。このアルバムと同じ位置に着いて下さい」一同は徳夫の手元の拡大写真で確認してから、その席に移動する。

「先生は車椅子のままで結構ですから・・・」「少し位は大丈夫よ。椅子に座ります」勝気な口振りで言い放つと、やおら立ち上がり、千夏の手を支えに一番前の正面に足をやや引き摺りながら進む。

「千春先生は長年の教師生活をまっとうされたので、本日はその労に報いる為、一日校長に推薦し、花束贈呈をしたいと思います。元の千春先生の席には保母さんだった千夏先生が二代目として着席して下さい」「そんな、徳ちゃん。恥ずかしいでしょ・・・」「大丈夫ですよ。一日の期間限定ですから」

「そう。徳ちゃんに免じて、言う事を聞くわね」

好美が花束を抱え、千春の正面に進み出る。

「先生、四年生から六年生の間、親身になって、勉強に遊びに体当たりの情熱で接して頂き、本当に有難う御座いました。皆それぞれ的人生を歩み、早くも昨年還暦を迎え、子供時代を懐かしむ歳になりました。先生におかれましても、今年傘寿のお祝いとの事、誠に御目出度う御座います。ここに、御礼とお祝いの印と致しまして、花束を贈らせて頂きます。今朝、わたしがアレンジして参りました。春の明るさとのどかさを表現する真っ赤なバラ、淡いピンクのガーベラと長寿を祝う白いチューリップを取り入れました」「どうも有り難う。見事な花ね」

花束を手渡す瞬間、善太が懇意にしている商店街の写真屋がシャッ

ターを切った。

引き続き、富一が記念品のブローチを包みから取り出し、千春の左胸に着ける。

「先生の庭のバラ園を思い出して、買ってきました」「まあ、綺麗な白バラだ事。有難う」「それに、これは葛飾北斎の赤富士です。

日本人の心の故郷、富士山を天保二年頃に描いたもので、正式名は『富嶽三十六景 凱風快晴』です。パワーと普遍の魅力に溢れ、以降多くの画家が赤富士を描いてきましたが、右に出るものはありません。この絵から先生もパワーを貰って下さい」「有難う、皆さん。色々と氣を使って頂いて。一生の宝物にするわ」
集合写真が念のため、二枚撮られた。

「四十七士のほぼ半分の参加で少し寂しいけど、鬼籍に入った人、病院で命を点してる猛君、それに連絡のつかない友もいるけれど、明日に向かって命ある限り、歩み続けよう。この歯抜け写真も拡大コピーして届けますので、じっくりと卒業写真と比べて下さい」「いやな、丹木君。孫に見せたら物笑いの種になるわよ。女心が判らないのね、産婦人科医でしょ」ふくよかな雅代の顔が河豚の様に目一杯膨れた。

「自信がなかったら、見せなきゃあいんだな」

善太の一言に男性陣が笑った。

「それでは全員、今度は先生の方に寄って下さい」
徳夫が指示を出す。

当時は玄関の正面に良い子の鐘があり、校舎は木造二階建て。現在は、鐘は右側の男女の児童がドッジボールを抱いた石像の横の小さな三角屋根の下に在る。

皆はチーズと言われ、にこやかな表情になる。

記念写真を撮り終わると、千春は車椅子に乗り、皆の方を向く。

「皆さん、本当に有難う。生きる希望を与えてくれて。足腰が弱り、思う様に身体が動かず、皺は増える一方で、子供や孫も一人立ちして、生きる意欲も失せていたのよ。徳ちゃんから送られたネガを焼

いてびっくりしました。ここで、卒業時と同じ場所で皆さんの一人一人の笑い顔が写っていました。しかも、普段着でスッピン。素顔剥き出しに、白髪、薄毛、禿げも地のままで。皆さんの心中を思うと熱き涙が溢れてきました。先生を勇気付けようとして、清水の舞台から飛び降りる心意気で、この写真を撮られたかと思うと、正に負うた子に教えられの心境になりました。これからは、与えられた命を大事に、昨年貴方方から贈られたシクラメンを愛で、音楽にも目を向ける事にしました。本当に有難うね」「先生、今日はばっちりカツラで、厚化粧をしてきましたの」「大形裕美子がかつらを外すと、地肌が見える程の薄毛が寂しく寝ている。一同は呆然となる。「何も、そこまでしなくても、送った写真で先生はご存知よ」目を白黒させながら、豊乃がたしなめた。

「写真でははっきり判らないから、実物を見て頂いたの。四十代の頃から激しく抜けてきて、悩み抜いたわ。まして、芸者をしていたから、尚更よ。カツラを着けて生き返った気分になったの。それからは、どのカツラにしようかしらと楽しくなったわ」「そうだったの。皆、色々悩みはあるのね」

「先生、僕も今日は大変身です。見て下さい」証券マンだった弘三が二列目右サイドから大きく口を開いた。「昨年のクラス会の写真を女房に見せたら、いきなり貴方がダントツに老けていると馬鹿にされました。退職して、身嗜みがルーズになったとも。ふさふさ髪の毛の丹木さんは黒々と染めて若々しいから、デートを申し込みたい位と。そこで、一念奮起して、サラリーマン時代のように染め始めました。顔の手入れとして、乳液やクリームの使用法を素直に教わり、実行し、その使用後がこの姿です。随分若返ったと鏡の中の自分を覗いて悦に入っている今日この頃です」

話し終えると、拍手の嵐が起こった。

「歳を取ると、頑固になるけれど、自分から今まで以上に周りの意見に耳を傾ける事は大事なのね。老いては子に従えとはよく言ったものだわ。偉いわよ、橋田君はそれを実行したのですもの。このネ

ガと写真は、あの世に持って行く為、お棺に入れて貰うわ、千夏、良く覚えておくのよ」千夏は小さく頷く。

「先生、嫌ですよ、お棺だなんて。ずっと、長生きして貰わなくては・・・」大柄な身体を震わせる雅代の目頭は熱くなった。

「仕方が無いのよ。生あるものは必ず死を迎えるから。私は幸せよ、皆さんとのこんな素敵な出会いが有ったのですもの。本当に有難うね」先生の言われる通りだ。みんな、これからの一日一日を大切に悔いなく生きていこう」

徳夫の呼び掛けに、一同は拍手で答えた。

「それでは、先生に良い子の鐘を鳴らして頂こう」

千春が紐を引くと、軽やかで、涼やかな音が学び舎に木霊する。側には児童の像があるが、当時は西の校舎の前に手に読本を持ち、薪を背負った二宮金次郎の像を何度も仰ぎ見たものである。バブル社会を経て、拝金主義に陥った現状を憂いて、二宮尊徳翁の私欲のない勤勉さや経営哲学が見直されている。徳夫はいにしえを思い遣った。

後片付けを済ませ、皆は車椅子を先頭に校舎に入り、三階の西校舎の南端にある教室に向かう。札が掛っていて、横書きで音楽室とある。

「何処に連れて行かれるのかと思っていたら、音楽室だったのね。懐かしいわ。当時の音楽室は正面校舎の西端にあって、オルガンからピアノに代わった時期だったのでよく覚えているわよ」先生、卒業アルバムにも音楽室の光景が写っています」

「俺はハーモニカを吹いてた」「わたしは縦笛よ」

「僕は音痴だから、只口をパクパクさせていたっけ」皆は口々に言い合う。

「先生はピアノを弾いているお姿なので、きれ・・・」その後の言葉を咄嗟に飲み込む美和子は、実際、きれいな顔が見られなくて残念と言う積もりであった。『綺麗な顔』は現状との対比を思い出させ、禁句と脳がブレーキを掛けたのだ。

「先生はピアノを弾いているお姿で、きれの良い音を響かせていました。しっかりと耳に刻まれてます」冷や汗をかきながら、美和子は言い直した。

「そうだ、先生にここでピアノを叩いて貰おうよ」

演歌が好きな富一が声を張り上げた。

「勿論、その積もりでここへお誘いした訳さ。私は歌唱が一番不得手で、皆さんの音を狂わせ、辞退したい位ですが、今日は千春先生に一層元気になって頂く日ですので、是非とも皆さん、協力をお願いします」徳夫が引き戸を開けると、目の前に黒光りのグランドピアノがでんと居座り、可愛い長い机と椅子が行儀良く並んでいる。小学生なら五人座れるが、大人は三人で程好い。皆は好きな所に腰を置いた。

黒板の上の白壁には手書きの音楽記号が貼ってある。四分の二、三、四拍子と八分の六拍子のリズム図、それにト音記号、シャープ、フラット、強弱記号のpp、p、mp、mf、f、ffなど。

廊下側の窓の上部には、日本人の作曲家と作詞家の顔写真が並び略歴と代表作が記載されている。作曲部門では、岡野貞一（おぼろ月夜）、滝廉太郎（花、荒城の月）、山田耕作（赤とんぼ、からたちの花、この道、ペチカ）、中山晋平（しゃぼん玉、証城寺の狸囃子）、信時潔（一番星みつけた、海ゆかば）、海沼実へ里の秋、みかんの花咲く丘らが揭示され、作詞家としては、高野辰之（おぼろ月夜）、土井晩翠（荒城の月）、三木露風（赤とんぼ）、北原白秋（からたちの花、赤い鳥小鳥）、西条八十（かなりあ、東京行進曲、青い山脈、蘇州夜曲）、野口雨情（七つの子、赤い靴、船頭小唄、枯れすすき）、サトウハチロー（リンゴの歌、ちいさい秋みつけた、長崎の鐘）らの顔が見える。

「先生、あそこのしんじきよしさんは余り知られていませんね・・・」
「・・・誰の事かと思ったら、のぶとききよしさんの事。音読みでなく、訓読みでいいのよ」「そうなんですか。てっきり、しんじだと信じ込んでいました。」徳夫の見え透いた掛詞に、皆は軽く笑っ

た。

「彼は山田耕作と肩を並べるほどの実力者よ。今の東京藝術大学音楽部の前身であった東京音楽学校の教授時代の戦時下に、依頼され作曲した『海ゆかば』が戦意昂揚、鎮魂の歌として一世を風靡したものだ。私も女学校で朝礼の際、君が代の後で必ず歌わされたわ。敗戦後、国民は掌を返した様に戦犯扱いして、冷たい目を向けたの。不運な音楽家だったわね」「知りませんでした。人間は時代に流されたり、時代を背負って生きているんですね」「そうね。皆さん、一番よく知っている作曲家はどなたですか・・・」

滝廉太郎と山田耕作の名が、間髪入れずに挙がった。

「滝廉太郎が土井晩翠と組んで作った『荒城の月』は余りにも有名ですものね。では、『花』でコンビを組んだ作詞家は誰でしょう・・・。あら、嫌だわ、音楽の授業をしているみたいになってしまつて」皆、口々に知らないと言う。

「地元東京出身の武島羽衣よ」「女性ですか・・・。昨年のクラス会の会場と同じ名前だ」白い髭を生やした勝が顔を前に突き出す。

「本名は又次郎なので、柔らかい筆名にしたのでしょうか。歌人、詩人、国文学者よ。墨田公園に歌碑があつて何度か見たわ。彼は九十歳まで長生きしたので、皆さんもあやかりたいでしょ」「寝たきりじゃ、疲れるけど。元気なら・・・」一番前の善太は振り返って、皆に同意を求める。

「反対に、滝廉太郎は明治三十六年に二十五歳で命を閉じているのよ」「病気ですか、肺結核とか・・・」

すかさず、徳夫が尋ねる。

「国からドイツ留学を命じられ、真面目な彼は各地の音楽劇場を視察し、十一月のオペラ鑑賞後、寒空で風邪を引き、こじらせ、帰国の翌年に亡くなったの。無理をしたのね。皆さんも気を付けてよ」

「正に、人生は短し、芸術は長しだな」「おう、富ちゃん、良い事言うじゃないか、たまには」

「『たまには』は余計だろう。善太」「誰かの受け売りだな、それ

は・・・」「それは誰なんだよ、徳さん」「ギリシャ時代に遡って、医学者ヒポクラテスの言葉とされているんだ。それが英語の格言になった」「さすが、徳ちゃんは物知りだわ。でもな、折角富さんが言葉をやっと思つて、良い気分で吐き出したんだから、たまには見守ってやらなくちゃあ。そこが徳ちゃんにとって、玉にきずだわな」「悪かったな、富さん」苦虫を潰した顔の徳夫は、照れ隠しで視線を落す。

「講釈はその位でいいでしょう。ねえ、みんな、歌いましょうよ。先生、早くピアノを弾いて下さい」負け犬豊乃の誘いに賛同する拍手が鳴り響いた。

「もう、何年もピアノの前に座っていないわよ。指が動かないかも・・・」「母さん、後は私に任せて。母さんにも習ったし、保育園でも童謡なら弾いてきたから」「そうかい、出来る所までやるかな」

「そう来ると思って、図書館で譜面をコピーしてきましたので、配布します。選曲は好美さんと決めました」「幹事さんだけあって、手回しがいいわね」「どんな曲かしら」「もう、大分歌詞を忘れてるな」「そうね、この歌は良く歌ったわよ」

ざわつきの中で、譜面が次から次へと手渡しされる。

徳夫と善太は二手に別れ、赤い縁取りの黒い布覆いを、ピアノの手前から持ち上げる。

千春は千夏の手を取り、椅子に浅目に腰掛ける。

「そうだわ。ピアノは鍵が掛っているし、それに勝手に弾けないわよ・・・」千春は眉間に更に皺を増やし、振り返る。

「済いません、鍵を借りてきます」「大丈夫なの、好美さん。急に頼んだりして・・・」「先生、安心して下さい。一カ月前に私と善太で校長先生に挨拶して、事情を話すと、音楽室でのピアノ使用を快諾されましたから」「おいらと富ちゃんは子供らが世話になっている時に、順番にPTA会長をしていました。今では自治会の総務部長として、新年会に校長先生を毎年招待しており、また災害時における避難場所の施設責任者の校長先生とは連携をとっておりますの

で、安して下さい」善太が立ち上がって経緯を説明すると、千春の顔皺がほころんだ。

木製のドアを引いて、好美は廊下に出る。

「まあ、どれも懐かしい曲ばかりね。あの頃が目の前に浮かんでくるわ。最初は何と言っても校歌からよ。皆さん、忘れていてでしょう。私が言うから、千夏、黒板に書いてくれる」

一番と二番を、皆の裸眼でも見えるように千夏はチョークで大きく書く。

直に、好美が舞い戻り、鍵を差し込み、黒光りのピアノの蓋を開けた。

前奏を弾き始めた千春の後姿は背筋が伸び、リズムに合わせ全身が前後左右に滑らかに揺れる。車椅子の猫背の姿からは到底想像出来ない、徳夫は思った。躍動感が徐々に漲ってきた様だ。

一番の歌詞は、『春風に 匂う 若桜 響き渡る 良い子の鐘 みんな仲良く 元気良く 共に進もう 希望の道 ああ 大吉 大吉 小学校』である。

先生の「はい」の合図で歌い出す。

「はるかぜにー におうー わかーざくらー ひびきー わたるー よいこのかねー みんなー なかよくー げんーきーよくー ともにー すすもうー ああー だいきちー だいきーちーしようにー がっこうー」

続いて二番も声高らかに合唱する。キーの違いに頓着無く。

終わると、伴奏と自分への感謝を込めて、皆は一斉に拍手した。

「元気一杯で、良くハモッていたわよ」 「先生も力強い演奏で、驚きました」 八百屋の清江が頬をリンゴの様に赤く染め、千春の笑顔を見る。

「皆さんに元気を頂いたお陰よ。張り切ってしまったわ。春と言えば、『春の小川』ね。今は小川には蓋がされて、道路になってしまっって、情緒が無くなっています。当時を思い浮かべ、歌いましょう」 「先生、あの頃は、裏の方には小川や畑が拡がり、貨物の引き

込み線の彼方に霊峰富士山がくっきりと望めましたね。夕日が幻想的でした」

「そうね、雅代さん。今は高い建物が出来ているから見えなくなっただわね」「中川や江戸川の土手からなら、富士山を拝めますよ、今でも」

伸之のコメントに善太が追加する。

「さっき、南窓から外を見たら、ビルの間にうっすらと富士の姿が収まっていたぞ」

皆はその方角に視線を送った。

「さあ、それでは歌の方に戻りましょう。そこに書いてある様に、作詞は高野辰之、作曲は岡野貞一よ。高野先生は北信濃生まれで、国文学者になり、東京音楽学校の教授を勤め、『春の小川』を始め、『春が来た』『おぼろ月夜』『紅葉』『ふるさと』などの有名な童謡、唱歌を作詞しているの。父の故郷が信州なので、高野先生には親しみを持ったわ。北アルプスに抱かれた信濃の大自然の中を、子供の頃よく駆けずり回ったもの・・・」「千春先生、うちの母親も長野の佐久平出身で、母に連れられて何度も遊びに行きました」「まあ、偶然ね、美妙さん。父と同じ村だなんて。あら、ご免なさい。また教師の悪い癖が出て、説明が長過ぎて・・・」

「いいんですよ。先生は一生涯先生なんですから。僕らを育てて下さった・・・」

徳夫の言葉に助けられた千春は鍵盤に向かい、細い指を目一杯動かして、メロデーを奏でる。軽やかな伴奏に合わせ、皆にこやかに大口を開けて、腹の底から発声する。

「春の小川は　さらさら行くよ　岸のすみれや　れんげの花に　すがたやさしく　色うつくしく　咲いているねと　ささやきながら」首を振って、調子を取ったり、手や足でもリズムを取るなど、人様々である。

二番まで流し終え、互いに讃え合う。

「もう、限界だわ。手が少しつってきたの。練習してないせいね。」

今日を契機にまたおさらいを始めるわよ」「そうですよ。折角の上手な腕前なんですから。次回も愉しみにしてます。今度は僕の三味線と合奏しませんか・・・」「末谷君に負けない様に、頑張るわよ。悪いけれど、千夏、代わって頂戴」千夏は頷き、千春を車椅子に戻し、母の温もりのある椅子に腰を入れる。

「次は何にしましょうか・・・」

あちこちから声が上がリ、弘三の推薦曲の『おぼろ月夜』になった。千夏の指は若さに任せて鍵盤の上を跳ね、音も負けずに付いて来る。

「菜のはーなばたけーに 入りー日うすれー 見わたーす 山のーは かすーみ深しー・・・」

歌いながら、徳夫は菜の花畑で舞う紋白蝶を写生した際の夕日の映像を瞼に浮かべた。

引き続き、武島羽衣作詞、滝廉太郎作曲の『花』が、（隅田川）の所を（中川）に代えて、合唱された。

「春のうららの 中川 のぼりくだりの 船人が・・・」

この歌も二番まで一気に突き進み、終了した。

「どうも皆さん、お疲れ様でした。突然のご指名にも拘らず、千春先生、千夏先生には素晴らしいお手並みで伴奏して頂き、有難う御座いました。喉も渴き、お腹の方も空いた事でしようから、野外で御食事と致しましょう」「よう、徳さんよう。折角童心に返った事だし、千夏さんも油に乗ってきた所だから、もう二、三曲頼むぜ。いいだろう、みんな・・・」髭面を振り向かせ、同意を促す勝。

「やんちゃで、我が儘だった勝君には勝てないわね、みなさん。又、苛められそうだから言う事を聞きましょう」何度も泣かされた、無口だった千絵が喋ると、押し殺した笑いが漏れる。皆の答えは大きな拍手となった。

徳夫らが準備したのは春の歌ばかりだったので、言い出しっぺの勝が夏用の『我は海の子』、秋の『赤とんぼ』、冬の『雪』の一番を板書する。幸い、千夏が保母時代に繰り返し、園児に教えた曲であった。入道雲が湧き出ている青空の下で、海水浴をした情景を皆は

それぞれに頭に描き、声を一層張り上げる。

「我は海の子白波の さわぐ磯辺の松原に 煙たなびくとまやこそ・」

この歌と『雪』は作者が不明で、次の『赤とんぼ』は三木露風作詞、山田耕作作曲と、千春が付け加えた。

打って変わって、しんみりした歌声が静かに流れていく。

「ゆうやーけ こやけーの あかとーんぼー おわれーて みたのーは いつのーひかー・・・」

続いて、テンポよく弾むリズムになる。

「ゆきやこんこん あられやこんこん ふってもふっても まだふりやまず・・・」

歌い終わってから、ここでも千春は含蓄を加える。

「最近の研究では、『ゆきやこんこ』が正解です。『こんこ』は方言で『来た来た』と言う意味で、『雪が来たよ、あられが来たよ』となると解説されているわ」「『こんこん』と歌ってて、てっきり擬音語、擬態語だと思ってました。何しろ、音の調子がいい」「徳さんの言う通りだ。僕もそう思ってた」健が声を大にして話すと、みなも賛同の頷きを見せる。

「音楽の世界も奥が深いですね。さあ、勝君もこれで気が済んだかな」「サンキュー、徳さん。これで思い残す事はないぜ」「皆さんの澆刺とした歌声を耳にして、もう一度ピアノに向かう決心をしました。そこで、皆さんに了解を取っておきたい事があります。それはピアノの上に、貴方方のスツピンのあの写真と今回の記念写真の両方を飾る事です」「写真に写っている人全員の賛成のもとに、あのネガを差し上げたのですから、どうしようと先生の自由ですよ」

「そう言うけれど、徳ちゃん。現在は個人情報保護法が幅を利かし、先生方も家庭の中に何処まで教育上踏み込んでいいのか悩んでいるらしいわ。緊急連絡網も作ってない学校も多いと聞くの。ですから、皆さん一人一人から許諾の書類を頂きたい位なのよ」「先生、ここにいる連中は、誰一人として見の狭いもんはおりませんよ。まし

て、先生の教え子です、信用して下さいよ。そうだろ、みんなー」
善太の野太い声に応えて、そうだ、そうですの言葉が壁に跳ね返る。
「弁護士西沢さん、黙ってないで一言コメントをお願いします」
「心配する事ないですよ、先生。お手紙は発信者と受信者の間の私信ですので、第三者に公開する場合には相手の了解が必ず必要です。本件では受信者個人の利用ですから問題はありません」「そう、安心したわ。ネガと写真は宝物よ。皆さん、本当に有難うね」
涙ぐむ千春を見て、勝気で負けず嫌いな性分を持つ反面、泣き虫だったあの頃を、徳夫は思い出す。また、皆も同じ思いを抱いているとも考えられる。

丸い壁時計の針は午後三時を回っていた。

一行は校舎を後にして、マイクロバスに乗り込み、一路東へ向かう。大通りに出て、柴又八幡神社を左手に見て、単線の踏み切りを渡り、柴又街道を越え、直進する。映画『風天の寅さん』で、一躍全国区になった柴又帝釈天の鐘楼が存在感を示す。横を過ぎ、直ぐに江戸川の土手となり、右に川魚料亭『川甚』の看板が目に入る。本館は近代的なビルになっているが、別館は昔ながらの三千坪の庭と池を配し、四季折々の草花を愛でられる、静かな座敷もある。

「先生、この『川甚』は創業が天保年間の老舗で、風流人が多く訪れたそうです・・・」「五回位、来た事あるわよ。値が張るけれど、それなりに美味しかったわ」「この辺りは江戸の音曲や川柳に取り入れられ、明治になって芝居や映画の舞台になっています。昭和に入り、加東大介、淡島千景主演の映画『大番』のロケ地になり、渥美清、倍賞千恵子主演の『男はつらいよ』シリーズは今も人気が高いですね。小説にも『川甚』が登場します。例えば、夏目漱石（彼岸過迄）、幸田露伴、田山花袋、尾崎士郎（人生劇場）、谷崎潤一郎、林芙美子、それにあの松本清張の小説にも『川甚』が描かれています」「さすがだ、徳さんの物知りには恐れ入ったぜ」「違うよ、善太。インターネットで調べた一夜漬けだ」「覚えられるだけ、大したもんだな。おれなんぞ、覚える前から忘れてるがな」「もとも

と、頭の構造が違うよ、徳さんとは」勝がちやちやを入れる。

車は土手下を進み、大正ロマンの色濃い建築物の『山本亭』を遣り過ごし、満開の若桜に囲まれた『寅さん記念館』の側の土手を登り、坂道から河川敷の駐車場に進行し、停車した。大型、小型のバスや自家用車でほぼ満席の状態である。春風に誘われて、団体は旗に従い、家族連れ、恋人同士はそぞろ歩く。ビニールを敷いて団欒に興じているグループもいる。野球場には、白球を追う選手の姿が目映る。

男達は飲み物や食料を手分けして持ち、バスから降りて野原を進む。千夏に代わって女子が車椅子を丁寧に押し、樹木がこんもりした所に向かう。

枝垂れ柳の新緑が江戸川の水面に映る。猫柳の新芽が柔らかそう。真っ赤な木瓜の花が日に輝き、一面に雪柳の白が拡がる。

木の杭に『矢切の渡し』と、墨字で書かれており、渡し船を待つ人が列をなす。

「この辺でいいだろう。さあ、宴会を始めよう」

徳夫の一声で、皆は車座になった。紙コップが配られ、互いに酒、ビール、烏龍茶、ジュースなどを注ぎ合う。

「千春先生の傘寿と我々の還暦を祝い、更にランクアップの米寿と古希に辿り付ける事を祈り、乾杯致します。ご唱和をお願いします。かんぱーい」

喜びに弾む声と拍手が青空に響き渡る。

「お祝いと言う事で、お赤飯のお握りを買って来ましたので、どうぞ召し上がって下さい。一人一つずつ配ります。あとは、お稲荷さん、太巻き、海苔巻、カップ巻や鮭、紫蘇、おかかのお握りもありますよ。好き嫌いもありましょうから、適当に取って下さい・・・」

「適当と言われても。大食いもいるからな。それに今日はみんな童心に返っているから分別がないぜ」

好美の言葉に、善太が物言いを付けたので、笑い声がそこかしこから漏れた。好美が目を上に向け、思索していると、サングラスの保

夫が助け舟を出す。「善太、そりゃあ、土台無理な話だよ。第一大きさが皆違うから、数では不平等になる。重さを量るしかないな」

「食べ物への恨みは怖いと言われていますので、お赤飯のお握りと他に好きなのを一つ取って下さい。残りを数えて、配給制にしますから」

「配給制だなんて、好美さんは古い言葉を使うのね。終戦後は、物資不足で品物の購入が制限され、家族数に応じて配給券が支給されていたの」

「先生、覚えています。パン屋さんに大勢の人が並んでいて、券でコッペパンを買った事を・・・」

「確か、米や醤油も券だったような気がする」

「あの頃は、こんなに美味しいものは無かったのよ。食べられるだけ、有り難いと思わなくちゃあ」

「そう言えば、学校給食の脱脂ミルクは余り美味くなかったぜ」

「後で知った事だが、あれはアメリカからの支援物資だったんだって」

「敵国に貰ってたんだな」

会話は波紋の様に広がる。

「ビールをがぶがぶ飲めば、お腹が一杯になるわ」

「足りない方は、今宵素敵な奥様に手料理を作って頂いたら・・・」

「素敵な奥様だって・・・何処に・・・」

やや赤くなった善太は、男どもを見回す。

「貴方一人、好き勝手に遊んできたんですから、勝手に自分で作ったらと言われるのが落ちだぜ」

「このご時世、停年離婚が流行りだ。後二年我慢すれば民法が改正されて離婚分配金として財産の半分入ると、てぐすね引いてみんな待ってるくせに」

「そうらしいわね。内も考えようかしら・・・」

「今更別れても・・・。良い男が見付かればいいけれど・・・」

「貴女、その顔で再婚する積もり」

「残りの人生、旦那の世話で終わりたいくは無いわよね」

女性陣は一斉に拍手する。

「食べ物から深刻な話になってしまいました。ここら辺で、話題を切り替えましょう」

「その前に、赤木さんに話の腰を折られ言いそ

びれておりましたが、アルコール類とおつまみは、須木さんが三割引きのサービスをして下さいました。最初、半値でよいと言われたのですが、上がったりでしょから、三割だけ負けて頂きました。皆さんにお伝えしておきます」

お礼の為、一同は掌を何回も合わせた。

「そうだ、忘れる所だった。今滝健君は、幾らかでも受け取ってくれないかと言ったのですが、昔世話になったからとマイクロバスの代金を受け取ってくれません」「自分のドライブに皆を誘ったのだと思えば、当たり前だな。みんなが愉しんでくれれば、それでいいんだ」「普段は呑み助なのに、今日は飲めませんので、自宅での晩酌用に二本贈ります」「そんなに好きなら、運転手を他の人に頼めば良かったのに」カツラの似合う裕美子が頬を染めながら伸之に強い視線を送る。

「自分の車で事故を起こしては、皆さんに申し訳がないです。自分が責任を持って送り迎えをしたいからですよ」「そうなの、有難うね。今滝君」

千春先生の高い声が対面の健の両耳に届く。

「さて、ここでクイズと参りましょう。地元 皆さんですから正解率は高いと思います。挙手をお願いして、当たった方には赤木社長と私が用意しました景品を差し上げます。景品の贈呈は一人一度きりです。先生も、千夏さんどうぞ参加して下さい。それでは第一問、難しい問題から、矢切の地名の由来は何でしょうか」皆は赤ら顔をかしげる。「はい、徳ちゃん」勢いよく上がって手は一つだけ。「先生、どうぞ」「家族でハイキングに来て、この渡しに乗った時、船頭さんに質問したのですもの、はっきりと覚えているわよ。弓矢は昔の戦争の道具だったわね。対岸の人達が平和に暮らしていた所に戦さが何度も起こり、その苦しみを二度と味わいたくないと、その弓矢を呪い、矢を切り、矢切れを悲願して矢切と名付けたそうよ」「ズバリ、その通りです。では、花柄模様のネッカチーフをお受け取り下さい」「嬉しいわ。有難う。それからは子供達にその事を教

え、戦争の無い国を守り続けて欲しいと声を大にして伝えているの。今でも、世界のどこかで戦さやテロがあるから」

「僕達昭和十九年生まれは、戦争の傷跡を知らないで育ったから幸せだな。先生の年代はその真っ只中でしたから、大変だったでしょう」「そうなのよ、米原君。二度とあの思いは子供達や孫に体験して欲しく無いわ。それには近隣諸国と腹を割って話し合わない」と

「先生、よろしいですか。第二問目に入らせて頂きます」「ご免なさいね、横道に誘ってしまつて・・・」「いいんですよ、勉強になりますから。では、この矢切の渡しは何時頃、どう言う目的で造られたのでしょうか。三沢の組み合わせにします。時期は一番が一五〇〇年代、二番一六〇〇年代、三番一七〇〇年代のうちどれか。目的は一が役人、二が農耕従事者、三が一般人の為で、両者を正解して下さい」「徳さんよう、まるで授業を受けてる様で、酔えねえなどうせ、おいらにはとんと判らんけどよう」ギョロ目の周りを火照らせている力が、ドスの利いた低音を発した。「何も強制じゃないから、自由に飲んだり、食べたりしていいんだよ。単なる遊びなんだから。隣の大形さん、悪いけど古本君に注いでやってよ」

「あら、ご免なさい。つい、景品貰おうと殺気だつてしまつて。はいはい、古本の旦那、お一つ如何」「すまねえな、姉さん。気を使わせちまつて」

なみなみと注がれたコップを、力は喉仏を見せながら傾ける。

三人回答するも、皆外れ。四人目の清江が運良く当てた。

「皆さんご存知の丁度一六〇〇年に、天下分け目の関が原の合戦があり、東軍の徳川家康が西軍の石田三成を破って徳川幕府二六五年の礎を築いたのです。ここは江戸幕府公営の渡船場として、一六三一年の寛永八年、三代將軍家光の時代に造られた農耕作者だけの渡しで、一般人は金町、松戸関所の渡しを通らねばならなかったそうです。当時は利根川水系に十五箇所が渡しがあり、現在、都内に残るのはここだけです。対岸の矢切に住む杉原家が個人運営しているとの事です。実は、私は一度も乗船した事はありません。未だの人

は手を上げてみて下さい」

次々と半数以上の手が青空に向かった。

「地元にいながら、乗ってない人は意外と多いですね」「私は泳げないから怖くて・・・」「何時でも乗れるからと・・・」「自転車で来る事が多いから」「川幅が狭いから、それ程ではないと思うので」などと、理由とか言い訳が飛び交う。

「三問目は、向こう岸の奥の高台にある給水塔近くには西蓮寺があります。そこには架空のお墓があるのです。それはどう言ういわれのお墓でしょうか」

六人が一斉に手を伸ばした。じゃんけんで回答権を得た藤谷が細身をふらつかせながら立ち上がる。

「勿論、それは伊藤左千夫の『野菊の墓』の文学碑の事。民子と政夫の淡い恋物語。その舞台が対岸の閑静な田園地帯で、今でもその面影が色濃く残っています。北側の水戸街道近辺には住宅が散在し、ビルが学校が建てられました。伊藤左千夫は千葉県の人で正岡子規の門下生の歌人です。『馬酔木』、『アララギ』を発刊し、弟子には赤彦、茂吉がいますよ。実は、五年程前から近所の歌会に参加しているんです。時々、女房と娘に店番を任せて、吟行して、頭をひねっていますから・・・」

「良い趣味をお持ちじゃない」「呆けなくていいわよ」「脚が丈夫になるなあ」とのコメントが寄せられる。

「景品を女房にプレゼントしたいので、申し訳ないが、女性用を下さい」「あら、ご馳走様。それでは、花模様のネッカチーフをどうぞ」

好美から箱を頂いた藤谷は付け加える。

「この一件で、今日は参加した甲斐があった。どうも、皆さん、有難う」

一段と大きな拍手が沸き起こった。

「さあ、次は誰が射止めるでしょうか。四問目はNHKの人気ドラマ『里見八犬伝』から。作者は江戸後期の戯作者、滝沢馬琴です。」

今気付いたのですが、ドラマの主演者がタッキーこと滝沢秀明君で偶然名字が同じですね。ひょっとして、末裔かも。その舞台が対岸の南に在るこんもりした森の中にあった里見城です。今は城跡しかありませんが。ドラマを見た方はご存知の様に、時代は室町末期で、武將里見義実の娘、伏姫が愛犬八房の精に感じて生んだ八犬士が里見氏の再興の為、大活躍する勧善懲悪の伝奇小説ですね」「徳さん、前書きが長過ぎるよ。問題は何なんだよ・・・」

不服そうな顔を髭の中に見せ、勝は言い放つ。

「いいじゃねえか、折角徳ちゃんが調べてきてくれたんだな。急ぐ旅でもあるめえしよ」善太が徳夫をかばい、声を荒げる。

「判った、判った、二人とも。ここは、幹事の進行に任せような。

徳さん、問題頼んだよ」禁酒している富一が軽く仲裁に入った。

「八犬士が八個の徳が書かれた玉を一つずつ持っております。さて、道を悟った立派な行為を示すその八徳とは何でしょうか」「全部は、判んねえや」「ドラマは観たんだけどなあ・・・」「何か、昔の親孝行を指す様な漢字だったわ」「問題が難し過ぎるわよ」

勝手な意見があちこちから噴出した。

「八個全てを当てるのは至難の技なので、一つで正解と・・・」言い終わらぬ内に、何人もの腕が大空に突き出された。指名された力が低音で言い切った。「やくざ映画の『仁義なき戦い』の仁義だな。義理がすたればこの世は闇だ。昔の人はいい事を言ったもんだな。今は個人主義だと騒いでおるが・・・」「大正解です。さすが、映画やドラマが飯より好きだとおっしゃる古本君だけの事はありますね。二つプレゼントします」

盛大な拍手が力に向けられた。

礼節を重んじるの礼だと豊乃が答える。

観音様の様な笑みを浮かべ、雅代のおちよぼ口が開く。

「夏目漱石の『草枕』の有名な書き出しにあるわ。山を歩きながら考えた。『智に働けば角がたつ。情に棹差せば流される』と。叡智の智ですよ。わたし、漱石の大ファンなの」「皆さん、人生経験が

長いだけあって、色々知ってるじゃないですか。他には・・・」

忠義の忠、信心・信仰の信、親孝行の孝までは、何人かの間違いも混ざりながら辿り付いたが、後の一つが出てこない。

「千春先生、八個目は判ります・・・」 「チョッと思いいせないわ」

「りっしん偏に弟と書いた『てい』です。弟と言う字の方がよく用いられてますが。意味は、年長者を敬う事です。これで八徳が揃いました。現在は、拝金主義に踊らされ、猫も杓子もインターネットでホリエモンを目指し、一攫千金を夢みて株取引が大流行です。私も善太も首を突っ込みましたが、他人はどうでもよい、自分さえ良ければの心境に陥りました。そこで、先人が残したこの八徳をこの機会にじっくりと考えたいと思います。皆さんも経験を踏まえて、子や孫に教えて欲しいです。何だか、道德教育みたいになってしまいました・・・」 「丹木さんの言う通りよ。大人も子供も他人への思い遣りがなくなって、公衆道德がなくなってないもの。電車の中で化粧をしたり、音楽がイアホンから漏れたりしているわ」

和服姿の美和子が唇を曲げながら喋る。

「五歳の孫が、時々くそ爺と言いやがる。お客さんに対応しててハラハラもんだわ。嫁の教育が悪いのか・・・」 「富ちゃん、それは近所の悪がきの口真似だわ。本心じゃないぜ。内でも、よく言われたもんだ。小学校三年位から言わなくなったけどな」

禿げまでアルコールが浸み込み出来上がっている善太が、救いの手を差し伸べた。

「他人の事は言ってられないわ。卒業してから、先生にお手紙を差し上げていないし、クラス会も参加してない。自分の事にかまけて礼を欠いていました。先生、ご免なさい」 「何を言い出すのよ、西沢さん。みんながこうして立派に育ってくれた事が一番嬉しい事よ。人にはそれぞれ生活があるのですから。それに、私の我が儘で、去年に次いで今年もクラス会を開いて、楽しい思いを一杯貰ったわ。有難う。終りよければ、全て良しよ」 「先生、これで終りではありません。みんなは毎年でもやりたいと言ってますから。先生は無理

をなさらず、体調の良い時にご参加下さい」「有難う、氣遣ってくれて・・・」「さて、予定の時間も迫って参りましたので、最後の問題にします。飲み物も未だ残っておりますから、どうぞ召し上がって下さい。あの渡し場の横に御影石の石碑がありますが、何だか判りますよね。そうです、ご存知『矢切の渡し』の歌碑です・・・」「作詞家を当てるんだろう」「いや、作曲家だろうよ」「歌手は有名だから、第何回の何の賞を貰ったかよ、きっと」と、皆は出題を予想する。

「残念ながら、みんな外れですね。その位の事は地元なら誰でも知っていますので。一九八三年の第二十五回レコード大賞曲で、歌碑には石本美由紀作詞、船村徹作曲、細川たかし歌と歌詞が石本氏の直筆で書かれています。この歌はリバイバル曲で、細川たかしが歌ってから大ヒットしたのです。では、最初にレコーディングした有名歌手は誰でしょうか・・・」「ええー、リバイバルなの。ちつとも知らなかったわ」「彼の持ち歌じゃなかったのか・・・」「そんな裏事情は知らねえぜ、徳さん」

皆は一様に驚きの声を上げる。

「判る人はいないわ。問題を変えたら」と、弁護士の西沢が迫る。

「じゃあ、ヒントを出しますよ。この歌は『酒場川』のB面にあった曲で、彼女はこの発売の四年前にレコード大賞を獲得しています。大賞曲を言えば、大ヒット曲なので全員に分かってしまいます。その歌い振りは気迫と色気に溢れ、好きだと言う方が多く居ます」「『酒場川』なんて歌知らないわよね」「女性の受賞者は誰が居たかしら・・・」

「吉永小百合や都はるみが思い浮かぶが、それぞれ迫力とか色気には少し遠いしな」「まさか、美空ひばりの歌にはないでしょ」「そう言えば、八代亜紀もいたわ」「皆さん、ぶつぶつ言っていないで、大きな声で答えて下さい。間違えても罰ゲームはありませんから」それぞれが手当たり次第に女性歌手の名前を叫ぶが、正解なし。

「それでは、大負けにして、彼女の代表曲を言います。大部分の方

が答えられるので、じゃんけんで回答順を決めましょう」

その結果、一番目の米原は『夜間飛行』、『四つのお願い』の歌手名が判らず、続いて橋田も降参した。三番手の千夏が見事、『ちなおみ』を言い当て、受賞曲は『喝采』であると。

「親娘のダブル受賞、御目出度う御座います。これは、やらせではありませんから、念の為」

笑いとともに、二人は拍手の渦に包まれた。

鳴り止むと、「『矢切の渡し』なら徳さんの十八番だろ、歌えよ」と勝が催促した。「無理だよ、カラオケが無いと。音痴だから、伴奏の勢いに乗せてしかやれないんだ」「そこは拔かりがないぜ」と勝が言いつつ、手をポケットに入れ、何かを取り出した。

「ハーモニカを吹いてやるし、昭和の思い出の歌集を二冊ここにあるから、見ながら歌えるさ。それに内のカラオケのハンドマイク付きだな」「なーんだ、勝君は早く歌にしたいから、クイズを急がせたのでしょうか。そうならそうと、はっきり言えば良かったのに。あの時はみな嫌な気分になったのだから・・・」美妙が頬を膨らまし、とがめる様な口調で、川を背にした勝を見る。

「ご免よ。この企画は最後まで内緒にしておきたかったからなんだ。さあ、ここからは童謡とおさらばして、大人に戻って大いに歌おうぜ」「もう、とくに大人に戻ってるじゃない。お互いしこたまお酒を飲んでいるわよ」裕美子のきつい言葉に、勝は白と黒のブチの髪を掻く。

「徳ちゃんの歌を是非聞きたいわよ。だって、小学生の時は、悪いけれど、お経みたくて歌になってなかったものね。成長の跡を知りたいの」「オルガンに合わせる音階テストで合格出来ず、善太と残され、私は何とか裏声が急に出て辛うじて、パスしました。善太一人を置いて喜んで帰った事を今でも善太と飲みながら思い出します」「早く、歌ってよ、後がつかえているから」満を持した声音を出すのは豊乃。

勝は胡座をかいたまま、前奏を開始した。小さな銀色のハーモニカ

は白いちよび髭と顎鬚の間を左右に往復する。マイクを左手に勢い良く立ち上がった徳夫は、上体を左右に振り、リズムを取る。

「つれてー 逃げてよー ついてー おいでよー 夕暮れのー
雨がーふーるー やぎりいいのー わたーしー 親のこころ
ーにー そむいてまーでもー 恋に生きーたーいいー ふたり
ーでーすー・・」

目の前の川面には一艘の渡し船が浮かび、ギツチラギツチラコと櫓を漕ぎ、周りには歓迎するかのように川鳥が舞う。

間奏を入れ、二番も伊達のマイクを近付けたりと遠ざけたりして熱唱し、喝采を受ける。

「凄く上手じゃない、徳ちゃん。本当に驚いたわよ。細かい点では少し音がずれてる所もあるけれど、太い声で情感が籠もっていて主人公の気持ちが強く伝わってきたわ。歌を自分の物にしている」

「これと同じ細川たかしの『浪花節だよ人生は』、千昌夫の『北国の春』を何百回となく、繰り返し聞いて、カラオケテープで練習しました」「努力家の徳ちゃんだけの事はあるわ。習うより慣れろね」「先生、今度はわたしが森昌子の『せんせい』を唄いますから」雅代が甘い声で、「淡い初恋 消えた日は 雨がしとしと 降っていた・・」と発車し、ハーモニカなしで唄い終える。

「勝さん、美空ひばりの『柔』をお願いするわ」「判った」

和服姿の美和子が声量豊かに、低音を響かせる。

「勝つと思うな 思えば負けよ・・」 「雲雀とまではいかないが、目白だ。目の周りが白くてよく目立つから、美和子さんの歌も目立つ程上手と言う事。ちょっと苦しいかな」「まあまあ出来だな、石井君」と徳夫がコメントする。

その時、ピーピュルピュルピーとの囀りとともに、春風に乗って低く飛ぶ雲雀が現れた。

「まあ、雲雀だわよ。何年振りに見たかしら」「そうね、母さん。この頃外にも出なくなっただから。暖かくなってきたから、公園にで

も行きましょうよ」「そうねえ、表は気持ちがいいわね」「他に歌いたい人はどうぞ。ストレス発散効果は抜群ですよ」「医者の方木さんがおっしゃるのだから、わたしも恥を捨てて唄うわ。母が座っていた番台のラジオから毎日の様に流れていた初代コロンビアローズの『東京のバスガール』。あれは卒業の歳の昭和三十二年よ」「よく、耳にしたわよ」「軽快なテンポで大ヒットだったわね」と口にし、博江のソプラノ声に何人かが合わせる。髭の間のハーモニカが休み無く働き続ける。

「若い希望も 恋もある ビルの街から山の手へ 紺の制服 身につけて 私は東京の バスガール 発車オーライ 明るく明るく走るのよ……」

歌声はふんわりと浮かぶ二片の雲を越えて行く。

歌集は手渡しで回され、皆、血眼で選曲している。

「お座敷でよく歌った八代亜紀の『舟唄』がいいわ」「よっ、待つてました、お姉さん。得意の喉を聞かせて貰いませよ」隣の力の掛け声が聞こえる。

「お酒はぬるめの 燗がいい 肴はあぶった イカでいい 女は無口な ひとがいい……」

しんみりとした雰囲気皆引き寄せられ、瞼を閉じ聞き惚れる。

二番の「夜更けてさびしく なったなら 歌い出すのさ 舟唄をルルル……」と、歌い終わると拍手の嵐となった。

「さすがに、年季と色気が込められていたな。酒が一段と美味くなったぜ。有難う」赤鬼の顔になった力は手放しで、褒め、喜ぶ。

「先生、この唄を口ずさむ時、何時も先生が寄せ書きに書いて下さった、『楽しい時 そして、さびしい時にも歌いましょう』を思い出します」「そうなの、裕美子さん、有難うね。そうやって何時までも覚えてくれていて、先生、嬉しいわ」「歌には、随分と勇気付けられてきました。これからも歌い続けます」「さあ、次の方どうぞ。遠慮なく。勝君には、もうひと踏ん張りお願いします」「森繁久弥作詞作曲で、加藤登紀子が歌う『知床旅情』を森繁節で一丁や

るか」「自分が歌っては伴奏する人が居ないぞ。他にハーモニカをたしなむ人が居るかな・・・」伸之が眼鏡の先の細目で、周りを見回す。

「大丈夫だって。演奏ばかりでは、逆にストレスが溜まってしまったから、こちら辺でガス抜きだわ。この顎鬚は森繁さんとまでは行かないが、生やし続けるんだ」髭をしごきながら、茶のポロシャツを着た勝は腰を伸ばした。

「しれーとこーのみさきにー はまなすーの さくころー おもーいだーしておくれー おれたちーのこーとをー のんでさわーいーでー おかにのべればー はるかーなしーりにー びやくやはあけるー・・・」

唇を縦に開け、野太い声をゆったりと引き伸ばし、森繁の歌唱法を真似る。

「いよっ、大統領」「歌好きの武辺さんだけの事はあるわね」「歌い慣れてる感じだ」「森繁にそっくりだな」との会話が飛び交う。

「どうした、善太。いやに、大人しいじゃないか。何時もの元氣はどうした。一曲歌えよ」「徳ちゃん、俺に恥をかかす気か」「恥とか見栄とか、幼馴染みにはないんだ。音痴大将の私だってどら声を張り上げてすっきりしたからさ」「無理強いはいけないよ、丹木君。僕も小学校の時、先生から音痴と言われ、それ以来、ラジオで音楽が流れると消したもんだ」「へえー、米原君も音痴だったとは・・・。私と善太の二人だけと思ってた。だから、脇目も振らず、刀鍛冶に打ち込み、一芸に秀でたんだ。返って良かったかも・・・」「まあ、そうだったの。随分と幼心を傷付けていたのね。ご免なさい。言葉には気を遣わなくてはいけないわね。貴方に、音楽の楽しさを閉ざしてしまっていたなんて・・・」

「今だって、母さんは思ったり、考えたりした事を誰に対してもズバズバ言い過ぎるのよ」「そこが先生の先生たる所以ですよ。個性です。私は反発して、音楽の楽しさを覚えしました。声質でなく、リズム感で・・・」「歌じゃあ、出る幕はねえよな。徳さんは練習した

からいいけどよ」善太は不服顔を赤味の中に滲み出す。

「音痴大将同士、トリオを組んで練習して、次のクラス会には是非とも一曲披露しようよ」「内では、女房がカラオケ気違いで、セツトがあるから練習場にすればいい」「そうか、悪いな、勝君。でも、奥さんに聞かなければ・・・」「なーに、歌好きな人は大歓迎してる」「巧い人は別だよ。こんな音痴じゃあ、奥さんが飽きれるよ」「女房自身、最初は調子っぱずれだったんだから。俺が仕込んだら、俺より熱を上げちまってセットを買い込んだって訳さ」「そうか、それを聞いて安心した。どうだ、善太、米原君、やってみようや。習うより慣れろを実践しよう」徳夫が二人の顔を交互に見遣ると、苦笑いしながら頷く。

「武辺君が先生なら、わたしも参加したいわ。歌もハーモニカも断然お上手なんですもの」「好美さんは、去年のカラオケで結構巧かったじゃあないか」「もっと上手になりたいのよ、武辺君。それに最近老老介護で少し疲れ気味なの。クラス会の打ち合わせだと言えば、大威張りで家が空けられるでしょ」「判った、いいとも」「楽しく歌えて、ストレス発散以外に呆け防止にも良いカラオケは、誰が作ったか知ってる・・・。アジアで大流行していて、各国ともカラオケで通じる。これが意外と知られていないな。実は私も知らなかった。日本人とは噂で聞いていたけど・・・」「教えてよ、誰なの」

「野村さん。インターネットで検索したところ、兵庫県の三宮で弾き語りをしていた井上大佑さん。音痴な客に合わせて演奏するのが得意だったそうだ。或る時、馴染みの社長から社員旅行用に演奏の録音を頼まれ、そのテープを渡した所、社員の好評を得た事から一九七一年にオリジナル演奏の空テープを作り、再生装置にコインボックスを付けたカラオケ一号機を完成させたのです。歌う事に飢えていた人々に瞬く間に広がり大ヒットした。○四年には賞金は出ないが、ノーベル賞さながらの栄誉であるイグノーベル平和賞を受賞しています。この賞はハーバード大学やマサチューセッツ工科大学の教授達が毎年ユニークな研究、開発の成果に対し授与しているもの

です。また、米国の週刊誌『タイム』で、『今世紀最も影響力のあったアジアの二十人』に、ガンジー、毛沢東、昭和天皇らとともに選ばれていますよ」「思い出したわ。昨年、『日本人のユニークな発明品シリーズ』のテレビ番組で見たわよ。名前は忘れていたけれど・・」無口な千絵が口を挟んだ。

「日本では余り評価されてないみたいだな。特に専門家の間では・・」
「そんな感じだ」「日本で、賞は貰って無いのかな・・」
「録音機、再生装置、コインボックスなどの機器類は既にあり、マシンにメロディのみを吹き込む事を考え付き、そのシステムを考案したので、エジソンみたいな発明家とまではいかなかったのかも。これはあくまでも私の推測ですが」徳夫は皆の疑問に答えるように、私見を述べた。

「さて、今回は歌のオンパレードでしたが、次回には歌は少しにして、善太の『株と投資信託の実践』と題して自己の体験並びにホリエモン事件を踏まえた株取引の光と闇について三十分位講演して貰いましょう・・」

賛同の拍手が鳴り響いた。

「判ったぜ。どうしたら臍繰りが二倍になるかのノウハウの一端を披露するかな」「米原君には、『刀剣に込めた思い』を語って頂きます」「何も喋る事はないよ」と、莊次郎は引いた声を出し、顔が困惑する。

「そんな事はないだろう。数々の賞を受賞し、葛飾区の区指定無形文化財の保持者なんだから。特異な分野なので、判り易く苦労話など話してくれればいいよ。みんな、聞きたいだろう・・」
「どう言うお仕事か知りたい。それに、日本刀一本で幾らの値が付くのか、興味があるの」「清江さんは現実的なのね」刑事の妻、美妙が呆れた表情をする。

「だって、一円、二円単位の野菜しか扱った事がないんですもの・・」
「無名の頃は一振りで、五万円から十万円位かな。今はお陰さまで、五十万円から百万円位にはなります。時には五百万で売れる事

も」

ウワー、凄いわねとの驚愕の声が響く。

「日々の努力が報われてきたのね。本当に良かったわ」千春は目を丸くして、口元を緩める。

「それでは、最後を飾って、本職の先生に一曲お願いします」「そうね・・・。演歌とか歌謡曲は余り知らないの。皆さんと同年代の人の歌がいいわね。吉永小百合さんの『寒い朝』はどうかしら・・・。季節が厳しい冬から暖かな希望の春へ向かい、それぞれ違った喜怒哀楽の人生を思い浮かべ、一緒に歌いましょう」

力強く、軽快なテンポの伴奏が始まり、全員が立ち上がった。小節毎の歌詞を、徳夫が声高く読み上げ、皆が続く。

「北風吹きぬく 寒い朝も 心ひとつで 暖くなる 清らかに咲いた 可憐な花を みどりの髪に かざして今日も ああ 北風の中に 聞こうよ春を 北風の中に 聞こうよ春を・・・」

遠くに居る行楽客までも何事が起こったかと、振り返る。

引き続き、倍賞千恵子の『下町の太陽』が高らかに合唱された。

「下町の空に かがやく太陽は 喜びと悲しみ写す ガラス窓 心のいたむ その朝は 足音しみる 橋の上 ああ太陽に 呼びかける・・・」

最後は、人生の応援歌、水前寺清子の『三百六十五歩のマーチ』となる。音痴も歌上手も関係なく、全員肩を組み、左右に揺れながら、声を限りに歌い上げる。

「幸せは歩いてこない だから歩いて行くだね 一日一歩 三日で三步 三步進んで二歩さがる 人生はワン・ツー・パンチ 汗かきベそかき歩こうよ あなたのつけた足あとにゃ きれいな花が咲くでしょう」ここで皆肩から腕を放し、歌詞を真似て前に腕を振って足を上げる。

「腕を振って 足をあげて ワン・ツー ワン・ツー 休まないで 歩け ソレ ワン・ツー ワン・ツー ワン・ツー ワン・ツー」そのままの勢いで、一糸乱れず、二番に突入する。

「幸せのとびらはせまい　だからしゃがんで通るのね　百日百歩
千日千歩・・・」

歌い終わったそれぞれの顔には、小気味よい汗と連帯感の芽生えが見える。

「皆さんのご協力を得まして、楽しく、盛大なクラス会を無事終了する事が出来ました。心より御礼申し上げます。子供時代にスキップし、恩師千春先生との旧交を温め、満開の桜に負けない位歌にお話に、花が咲き乱れた感じです。お終いに、千春先生より、お言葉を頂戴致したいと思います。それでは、宜しくお願い致します」

「本日は本当に有難う御座いました。幹事の方々、またここに御集まりの皆さんに、もう一度有難うを言います。若かりし頃を思い出し、また皆さんがそれぞれに自分らしく成長され、私の跡を追って、歳を重ねていらっしゃる事も十分判りました。現状を嘆くのではなく、それを受け入れ、前向きに残りの人生を過ごせそうです。今日の良き思い出を胸にしっかりと抱いて・・・皆さん、一人一人に響き合う心を感じました。この縁を大事に、互いに協力し合って日々前進なさる事を願っております。本日は親娘ともども歓迎して頂き、誠に有難う御座いました・・・」

千春と千夏が丁寧なお辞儀をする、円陣の中に拍手が鳴り響いた。

「音痴トリオを代表致しまして、善太社長に締めをお願いします」

「ご指名で御座いますので、僭越とは知りながら、三本締めと参りましょう。手拍子をお願いします。千春先生並びに皆々様の益々のご繁栄とご健康をお祈りして、いよー」

打ち揃った手拍子が波紋の様に大空に拡がって行く。

「それでは、記念写真を撮りましょう。森さん、お願いします」

円の中に入った写真屋は三脚を立て、先生を真ん中にして半円の顔を写し、次いで残りの肩を組んだ姿勢を撮った。

「お坊さんみたいに頭を剃り上げて、今時珍しいわね」「実は、先生。本当のお坊さんなんです。本職は写真屋さんですが、或る新興宗教に誘われて、何事にも夢中になるタイプで僧侶の資格を獲った

在家僧侶なんですよ」「須木さんのおっしゃる通りです。最近ではデジタルで撮った画像を家庭用プリンターで出力したり、カメラ付き携帯電話が普及したりして、商売も上がったります。僧侶資格のお陰で、お盆にはアルバイトが出来ますので一息ですよ。芸は身を助くとはよく言ったものですな」

西日に彼のかてか頭が映え、眉毛の濃い長身のハンサム男である。新興宗教なる言の葉を耳にした徳夫の顔は、一瞬曇った。

「みなさん、今度はあの歌碑の前に集まって下さーい」やや沈みを含んだ徳夫の声が、風に乗る。

歌碑の前に女性陣がしゃがみ、男性陣は碑の後に回る。

「いいですかー。このレンズより十センチ上を見て、チーズと言いましよう。素敵なお顔になりますよー。はい、チーズ」

逆光ではあるが、カチャとシャッターが渴いた音を出す。同じポーズを二度撮ると、船着場に移動する。櫓の波を避ける様に、頭から背が褐色で、目の周囲と嘴が黒く、胸が橙赤色で、白い腹を見せる千鳥がピヨピヨンと砂地を飛び跳ねる。川面では、頭が緑で、黄色い嘴の雄の真鴨が存在感を示し、群れの先頭に立ち、グエツ、グエツと鳴く。白い百合鷗は群れをなして、小船の回りを舞っている。「ねえ、舟に乗りましょうよ」「そうよ、折角来たんだから。この間来た時は、残念ながら運航してなかったもの」「先生は足が苦患で無理よ」「ここで解散すればいいんじゃないかな」「それじゃあ、一体感が無くなるぜ」「みんな、近いのですもの何時でも来られるでしょ」「仲間と乗船するのが楽しいのよ」などと、議論百出の態。「先生はここで待っていますから、どうぞ乗ってらっしゃいな」「この並び具合では、対岸にも乗客はいるし、往復で一時間以上は掛る」「何時までやっているのかしら・・・」「ここに書いてあるわよ、清江さん。午前九時から日没までと」豊乃は掲示板に貼られた一枚の紙を指差す。

「じゃあ、未だ大丈夫だね」「先生は大分お疲れの様子ですから、皆でお宅までお送りしましょうよ」雅代の提案に話がまとまった。

思案していた徳夫はほっと胸を撫で下ろす。

「渡し舟に乗った積もりで、小船と水鳥を撮っておきますよ」「その写真も一緒に、皆さんに送る事にします。それを見て、乗りたくなったら、後日、最愛の人といらしてこのクラス会を思い出して下さい。それでは、戻りましょう」

人波を除けながら、千春の車椅子を交代で押し進め、駐車場に着いた。運転手の伸之がドアを開け、千夏が親を誘導し、席に腰掛けさせる。その後から、顔の赤が最高潮だったり、褪め加減だったり、また完全に元に戻ったりした人の列が続く。マイクロバスは走り出し、隣同士の会話が賑やかになる。

バスは一路元来た道を引き返し、柴又の線路を渡る頃、夕日がビルや家々の屋根に見え隠れする。高砂駅を素通りして、高砂橋に差し掛かると、富士山にうつすらと霞が掛っていた。青戸から立石へとエンジン音は長らく休息していたせいか、軽やかである。車中、更にガソリンを胃に補給する輩もいて、ヒートアップした声が飛び交う。

暫くして、踏み切りを通過し、茶色のビルの前でバスは止まった。

「皆さんは先に降りて、両サイドに並んで下さい」

善太が車椅子を運び出し、セツトする。そこに千春が背を丸めて腰を入れ、千夏が押す。千春は一人一人の笑顔を脳に再度刻み付けながら、握手を交わして行く。

「皆さん、有難う。さようなら」「先生、お元気で。また、お会い致しましょう」「長生きして下さいね」

「先生からのお電話、お待ちしております。何時でもどうぞ」「さようなら・・・」

千夏が千春の目頭を拭う。二人はお辞儀をしつつ、静かにエレベーターの中に消えた。

数々の思い出が詰まったバスは、連帯感を乗せて来た道に戻って行く。

帰宅した徳夫は夕食前に、ビールの味を喉の奥まで湿した。幹事と

して話し続けて、ビールはほんの二、三杯程度であり、喉はアルコール欲しさに悲鳴を上げていた。大きく息を吐く。色艶の良い刺身を味蕾に感じさせ、もう一杯を口に運ぶ。少し間を置いてから、朋子得意のビーフシチューを味わわせて貰う。日常に戻り、夕刊に目を通す。テレビの報道番組で最新ニュースをチェックした。床に就いてから、隣の朋子にクラス会の内容を話す。

「良かったじゃない、貴方。先生にそんなにも喜んで頂けて・・・」歳のせいか、張りのあった頬がやや凹み、目の大きさが強調されている朋子の笑顔を、徳夫は見詰める。

「これで喉につかえていた小骨が取れたみたいだ。長年クラス会を開いてなかったからな・・・。中学と大学の恩師はどうに亡くなっているが、中学の還暦を兼ねた同期会には風邪で行けなくなって非常に残念だった。片思いだったあの女がどう変身しているか見たかったな・・・」「ま、片思いだ何て。恋人だったくせに」布団がもぞもぞ動いたと思うと、徳夫の腕がつねられ、朋子の指が徳夫の掌に重なる。

「二度位は喫茶店でデートしたかな。君だって、話してくれないけど、色々あっただろうよ」「見ての通りの女ですもの・・・」薄笑いを浮かべるだけで、朋子の告白は無い。

「大学のクラス会は幹事の持ち回り制で、四年に一度オリンピックの年にあったが、六十の坂を越えたので、運の無い奴は早々と鬼籍に引き込まれるから二年に一回開催する事に決めたんだ・・・」

「鬼から守って上げますから、安心して下さいね」徳夫の手が強く握られた。

「宜しく頼むよ、これから・・・」「高校のクラスには、世話好きがいてね、そいつが万年幹事なんだ。山岳部だったので、よく登山に誘われた。頂上に立ち、眼前のパノラマを眺めると、達成感、充実感で疲れが素っ飛んだものだ。しかし、彼の仲間が遭難してから、ハイキングに切り替えて、温泉浴を愉しんでいる」「そうなのは、歳で体力が衰えていますので、危険な事はなさらないで下さいね」

「判ってるよ。そう言えば、君はクラス会に余り出てないな」「ええ、誘いの葉書は来るのですけれど、子供、孫、それに親の世話をしている内に出不精になってしまつて・・・」「しっかりと、家庭を守ってくれて、感謝してるよ。有難う。徳太郎も一人前の医者になつて跡を継いでくれる。クラス会に参加して、十人十色の人生ドラマを聞けば、自分を慰め、自分に感謝し、やる気も起こるよ。己は一つの道しか歩けないのだから。私が留守番するので、今年から大いに参加して欲しいな。そうすれば、若返るって」「まあ、お婆さん扱いして、憎いひと・・・」

二人の頬は鈍い光の下で重なり、夢の世界へと旅発つ。

翌日曜日は、朝から無風で春光が目眩しい。

今日一日急なお産も無く穏やかに過ごしたいと、徳夫は考えながら、玄関を開け、郵便受けから朝刊を取り出した。

ポトリと何かが落ちた。

拾い上げ、自分宛ての手紙と判り、裏を見る。そこには武憲と二文字があるのみ。弟だと呟き、直ぐに封を切った。

真白い無地の便箋には幾分乱れた文字が毛筆でしたためられている。

『徳夫様 今更お手紙を差し上げる資格の無い私で御座いますが、仏の道に進み、母への謝罪を祈り続けて参りました。仏の功德により、心安らかになり、悩める人々に仏の教えを伝えております。縁あつて妻を娶り、二男一女を授かり、親としての子に対する喜怒哀楽が身に染みました。両親には何一つ恩返し出来ず、残念ですが、その分、我が子や周りの人達に返している積もりです。この一言が兄上に言いたくて筆を取りました。左手で書いております故、読み辛いかと思います。毎日、丹木家の皆様方のご健康とご多幸を仏にお祈り致しております。御仏の導きのままに・・・』

文字を一字一句脳裏に刻み付けながら、徳夫は来し方を振り返った。武憲が折角、都立隅田川高校に合格出来たのに、大学を受けようともしない事に腹を立てた自分。

バイクで郵便配達中に、車に追突され、横転し、右肩を強打し、右腕が麻痺した武憲。

狩子猛に新興宗教を薦められ入信した武憲と言い争った自分。

他の宗教は排除するからと、父の位牌を廃棄しようとして、止めた母を突き飛ばし、テレビの角で母の目に痣を作った武憲。

それを妹から聞いて、出て行けと怒鳴った自分。

翌日、手紙を残して家出した武憲。

その時々^{つむじ}に於ける両者の感情の起伏が鮮やかに蘇る。

相手の立場を考えた思い遣りに欠けていた事を心から反省する。

済まなかったな、武憲。

一陣の旋風^{つむじかぜ}に、手紙が手から離れ、桜花と共に大空へと舞い上がった。

(了)

ネガの秘密（後書き）

あとがき

今から二年前に小学校のクラス会を開き、十五名が元気な顔を見せ、一年遅れの還暦を祝いあった。残念ながら、恩師は開催日の直前に体調を崩し、不参加となってしまったが。鬼籍には二名が入られ、冥福を皆で祈った。連絡が取れない友も多く、去る者は日々に疎しを感じざるを得ない。

確か、卒業後は高校時代に一度開催した記憶がある。その時は、同級生の寿司屋の二階で行い、参加者は四十八名中二十名位だったと思う。

このような事情で、二回目の今回のクラス会では、卒業以来四十八年振りで会う人も多く、お互いに往時の卒業写真と現在の年輪の刻まれた顔を常に比較し、遠過ぎる記憶を必死に呼び起こした。酔うほどに話も盛り上がり、過去へと引き戻された。私は高校が電気科、大学が薬学部と専門性の高いコースを歩んだので、その仲間達は同じ様な会社に就職した。一方、小学校、中学校の同級生は様々な職業に携わり、話の内容から他の世界を垣間見ることが出来る。また、お互いに利害が無いため、本音で赤裸々に成功、失敗、趣味、病気、老老介護などを話せる。起伏に富んだ一人一人のエピソードを書き留めておきたいと思った。しかしこれらを公表するには二〇〇五年に施行された個人情報保護法によって、プライバシー権が強化され、当事者から承諾書を取らねばならない。万一、訴えられれば、賠償金を支払う羽目になる。少ない著作料からは到底まかなえない。勿論、売れなければ著作料も貰えないが・・。

そこで、小説風にして書こうと思った。

小説とプライバシーの単語が脳細胞に入った途端、芥川賞作家柳英里の例の裁判を思い出した。

当時、マスメディアや文芸誌などを賑わしていたものだ。古い記憶なので、正確を期する為、インターネットで検索する。その結果、柳美里のデビュー小説『石に泳ぐ魚』が一九九四年の文芸月刊誌『新潮』九月号に掲載され、モデルとされた親友が顔の病気を暴露されたので、九十九年にプライバシーが侵害されたとして、著者と出版社に出版差し止めと慰謝料請求を地裁に提訴した。地裁、高裁、最高裁で争われ、出版差し止めと百三十万円の慰謝料の支払いが確定したのだ。この裁判のお陰で、作家としての知名度は、良し悪しは別にして高まった事は事実で、宣伝効果は抜群となった。

従って、小説と言えども、架空の人物でなくモデルが居る場合は、慎重さを要する。そこで、私は友の名前は勿論、職業も変えた。性格や風貌、エピソードは一部使わせて貰ったが。参加者はお互い誰の事かは判る筈である。こうしてもプライバシーの侵害になるか不安であるが・・・でも一読して頂いた様に、悪意のある記述はないと考えられるので、安心していい。

生老病死は人として避けて通れない。人ばかりでなく、生物全般に言える事である。この物語の様に、その時々不安や葛藤は出会った人達の心配りによって、緩和されたり、増悪したりする。知恵や知性で乗り切りたいものである。

この『ホンニナル出版』の四作目は、第二十六回新風舎出版賞の出版化推薦作ですが如何でしたしょう。忌憚の無いご批評を頂けたら幸いです。『ホンニナル出版』について、是非とも友人、知人の方にご紹介下さい。それでは、第五作目でお目に掛かりましょう。

二〇〇七年六月吉日

？ 木 徳 一

高 木 徳 一 たかぎ とくいち

1944年6月5日東京都葛飾区新宿（現高砂）生まれ。

区立住吉小学校卒、区立桜道中学校卒、都立蔵前高等学校

（電気科）卒、千葉大学薬学部卒、同大学院修士課程（薬

物学)修了。

山之内製薬(現アステラス製薬) 中央研究所入社、薬理研究グループ(消化器系)、開発部、国際開発室、瀋陽山之内

研修部、国際アジア事業本部、日本シャクリー製品開発本部、

資格…薬剤師、薬学博士

著書…『抗潰瘍剤ファモチジン(ガスター)の薬理学的研究』
他研究論文

『炎に死す』(筆名高德春水、第1回『鶴』シニア自分史大賞佳作、鶴書院、1996年)

『ホンニナル出版』Web公開(07/5, 6, 6)、小説部門なかみ

http://www.honninaru.com/web_order/publish/

第1作目…『北京の月季イエチエ(ばら)』

第2作目…『愛と死の絡繰からくり―北京の月季イエチエ(ばら)増補版―』

第3作目…『生かされて華開く―世界的新薬開発の裏窓―』

定年後は、自治会の地区副部長を務め、幼馴染みと旧交を

温めながら執筆活動が続けております。

趣味…過去は、軟式野球、軟式テニス、和歌創作、小説創作、

現在は、文化的散策、小説創作

現住所…〒125-0054、東京都葛飾区高砂8-27-13

電話番号…03-3607-9829

Eメール…toku-6.5@crest.ocn.ne.jp

ブログURL…<http://tokuichit.blog.ocn.ne.jp/blog/>

検索方法…グーグル、ヤフー、MSNなどで『高木徳一』で検

索すると、『ホンニナル出版』、『ブログ』にリン

クします。

なお、2010年11月1日現在では小説は下記16作目まで、また第1詩集の『旅情詩に恋して』を『ホンニナル出版』と『でじたる書房』に掲載中です。詩集は『でじたる書房』で無料配信中。

第1作目…『北京の月季イエチエ（ばら）』

第2作目…『愛と死の絡繰からくり—北京の月季イエチエ（ばら）増補版—』、

第3作目…『生かされて華開く—世界的新薬開発の裏窓—』

第4作目…『ネガの絆—歌咲くクラス仲間—』

第5作目…『縁えにしの環』

第6作目…『南無妙物語（心の一滴）』『癌シリーズ？』

第7作目…『挑戦の座標軸』『癌シリーズ？』

第8作目…『希望の確率』『癌シリーズ？』

第9作目…『赤い笹舟』『戦争シリーズ？』

第10作目…『炎に死す（改訂版）』

第11作目…『いろはにほへと』『戦争シリーズ？』

第12作目…『ナナカマド』『戦争シリーズ？』

第13作目…『愛の万華鏡』

第14作目…『逆走の闇』

第15作目…『黒服の客』

第16作目…『花風に魅せられて』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6436o/>

ネガの絆ー歌咲くクラス仲間ー

2010年11月2日13時56分発行